欠の湯あたりの秋を知らして呉れ、そこらを背景にして君を思ふことはいつでも僕に暈り知れぬ溫かみを與へて呉れる、自愛せよ、重田君、

十一月三日　　牧水

彌次郎様

歌見たし、送れ、(封筒裏面に)

二七

十一月六日、靜岡縣沼津町在楊原村より、信濃中村安次郎樣宛（手紙）

拜啓、

御地方はよほどもうお寒いことゝ存じます、皆樣お達者の御事とおよろこび申します、初夏の頃はお伺ひ致し、並ならぬ御もてなしに預り誠に嬉しく難有く存じました、たいへん遲れましたけれど只今御禮申します、先日中はまたお忙しいなかを端君をお呼び立てして、何の風情もないのに長々とお引留め致し、留寸宅にては嘸ぞお困りであつたことゝ少なからず恐縮して居ります、長年のつきあひのうちにまだ一度も机を並べて讀書し作歌したりしたことのなかつたのがいかにも殘念でありましたので斯ういふ事を企てたのでありました、何卒端君をもお叱りなくまた小生をもおとがめ下さるまじくあつかましき至りながらお願ひ申します、なほ端君のお歸りの時持つて歸つて頂かうと思つてゐましたものを少し遲れて今日別便小包よりお送り申します、くだらぬ物ですが、御笑味下さらば難有く存じます、末筆ながら御家族皆々樣によろしく御傳聲下されたく、端君には留守の償ひに數倍の働きをなし下さる樣お傳へ下さいまし、

とり急ぎ右のみ申しあげました、

十一月六日　　若山牧水

中村安次郎様

正月の頃、あなた樣にもいかゞでございますか、海岸の暖い冬を御らんになりにお出かけ下さいませんか、お待ち申します、

二八

十一月廿一日、沼津在楊原より、信濃、中村柊花樣宛（手紙）

お手紙、難有う、お逢ひした氣で讀みました、何よりの可哀相なのはその荒行だ、色男臺なしといふ形ぢアないか、ベソをかいて山を降りて來る怪しき顔が夕闇に浮いてる樣で、心そこ無常を覺えさせられた、それでも感心だ、もう十日も續けたといふならば、そろ〳〵骨も硬まつて來たでせう、ついでにうんと硬めつけておくのも惡くはないかも知れない、何は然かれ、うるさい世の中といふものだ、謹んで弔意敬意を捧ぐと云爾、

身延の事、鰍澤のこと、ことに後者のこと、秋風行路難の感を以て讀んだのであつた、欠の湯からのよせがきにはたうとう女房の前をも恥ぢず手放しで泣き出しながら讀んだことでした、泣くに泣けず、笑ふに笑へずだが、とゞ泣くに落ちる種類の悲喜劇だつた樣に思ふ、その後折々あれを取り出しては、うす暗い例の離室で氣味わろき獨り笑ひなどを續けてゐる、天ぷら屋からは、——、イヤ、どうも恐縮、——、彌次さんにも出したと思ふのだ、それきりこちらにも便りなしなんだ、土の中で芋が腐つた樣な怪しき日を過してゐるに相違ない、困つた息子だと思ふ、一杯飲みでもする樣にと干物を少し送つておいたが、それも同僚に掠奪されてしまつたかも知れない、寧ろ無氣味だね、

その後、今月は我等にとつて甚しい惡月であつた、子供たちの病氣と金の都合のくひちがひで、實に惶しい苦しい朝夕を送り續けた、まアちやんの耳まだわるく、そののち旅人がはしかをやり、程經ていままたまアちやんがそのはしかで泣いてゐる、この次ぎどうせみい公もやるのだらうが、あれらに泣かれるのが一番つらい、何も手につかぬのを覺ゆるのだ、金のことでは、先日難有かつた、君だつて苦しかつたゞらうにと、苦しみながらあれを受取つた、

遅れ走せに禮を云ひます、そんなこんなで、今日は例の三度松氏の御婚禮で、僕は仲人なんださうだからゆかなくてはならず、廿三日の五十年祝賀にも出たかつたのだが、たうとう東京行もやめてしまつた、そんなになると氣ばかりあせつて爲事も捗らず、いよ〳〵氣を腐らせるといふわけだ、然し、難有いことに歌が出來つゝある、君と別れてから數だけなら確かにもう百以上は書きつけてあると思ふ、新年號の文章世界に出す氣でゐる、出たら見て呉給へ、

九星氏に從ふと十二月はいゝ相だ、先づそれを樂しみに今月はおとなしく子供の守でもして遊ぶのだね、先日、荻村のために一緒に愛鷹に登つた、見かけによらぬいゝ山だつた、何とも云へぬ深い林でね、紅葉もよかつた、大正日々は捨てゝいゝのです、あれは江の浦に行つた朝起きて書いたのでそれを見するために豫じめ二枚づゝ社から送つて貰つてあつたのだ、江の浦の奥のあたりを風の來ぬうちにもう一度行つてみたいと思つてゐたにもうその名物がやつて來て、今日など隨分吹いてるよ、然し、思ひ出すだけでもいゝ所だね、君の歌にも多分出るだらう、早く見たいと思ふ、「創作」にもこの二三日前からかゝつてゐる、來年はこれも何とかしたいものだ、

さびしいと云ふことをいふのは寧ろ滑稽に近いが、近來身にこたへてそれが襲つて來る、寢覺の時だと一層惡辣だ、永くこれに耐へてゆけるかと思ふ時がある、

十一月二十一日　牧水

柊花兄

二九

十一月二十二日、江の浦局より、長野縣、中村柊花樣宛（葉書）

たゞにをりてをりがたき日の夕暮を外に出で來れば涙は下る

ふところに錢かぞへつゝ寄る店の酒のあぢはひ涙なりけり

餌やらむ釣れよといひし先きつ日の男に逢ひぬ入江の町に

二十二日夕四時十五分　牧水

三〇

十二月十五日、沼津町在楊原村より、下野國、高鹽背山樣宛（手紙）

高鹽君、近くの伊豆の山の海邊に蜜柑の澤山出來る所がある、そこで木からもぎたてのを少し買ひました、ほんの少しですけれど、おちひさい人たちの玩具にもとお送りしました、新しいだけに味は違ひませう、昨日鐵道便で氏家驛止置として出しましたが、何とか君の方からつてはありますまいか、こゝに同封の受取證を持つてゆけば受取れるわけです、めんだうですがお受取下さい、君の學校の歸りに自轉車を走らすのは方角ちがひか知ら、

先日の手紙お受取になつたことゝ思ひます、「下野草」はどうなりました、たうとう原稿送りませんでしたが、この次ぎには是非ねがひます、

寒い〳〵、こつちもかなりにこたへますよ、

十五日　牧水

背山兄

君の方までは配達しませんか、運賃は濟んでゐます、

三一

十二月十九日、沼津在上香貫より、長野縣、中村端樣宛（手紙）

些少のものに、いろ〳〵手數をかけさせて何だか困つたことになつたものだといふ氣がするが、とにかく今送り出しておいた、篠の井驛止置だ、この手紙が屆いたその次ぎの日あたり受取りにゆくがよくはないかと思ふ、何といふことなく散歩に出たつもりで、出かけて呉給へ、そして心ひそかに一個五十錢位ゐの蜜柑に出世することなどの無之樣にと請ひ祈る、

君の歌について、少し云ふことがあるが、もう少

しあとにする、少し甘いといふ自覺は蓋し當つてゐる樣だ、甘いといふより不用意すぎるのだね、これは僕たちの間に共通の缺點だつたのだ、氣がつかぬではなかつたが、なか〳〵改めなかつた、それを自他ともに改めたく思ふのだ、

茨木君がやつて來て二日ほど遊んで行つた、飲みたくない酒をツイ飲み過すといふ馬鹿げたことだけはどうかしてやめたいものだ、

歲いよ〳〵迫り、爲事一向に捗らず、分秒實にいやな氣持ですごしてゐる、何も彼も容れ得ることになるか、何にも彼にも打ち克つ身になるか、どつちかにならぬと全くやりきれない、

けふは然し暖いゝ日だ、一昨夜飲み過した罰で頭の痛いのが勿體なく愧しく、ぽつんとして坐つてゐます、

十九日　牧水

柊花兄

この受取證を持つて驛へゆくべきこと、

大正十年

一

一月十八日、靜岡縣沼津町在楊原村より、日向國、若山春子樣宛（手紙）

春子よ、僕の方もすつかり無沙汰をしてゐた、それで先日のお前の手紙を見るまでお前が都農にゐるのかどうかもわからずにゐた、あの手紙でいろ〳〵樣子がわかつてたいへん安心した、

都農の皆々樣もおたつしやの樣で何よりうれしい、かなりもう久しいことお目にかゝらぬので、お年はよつたであらうが、然し兄さんも姉さんも相かはらず御元氣のことゝ思つてゐる、お前もいよ〳〵元氣らしくて、けつこうだ、いよ〳〵お前が河野家の養女になつて婿を迎へるといふことだが、それもまことにめでたい、私からもお禮を申しあげたと兄さん姉さんにお前から話して呉れ、さうなればお前のしあはせになるばかりでなく、私たちもたいへん安心をする、その代りお前の責任は非常に重くなるのだからそのつもりで、せい〴〵注意をせねばならぬ、そして兄さんたちを安心させねばならぬ、ぼんやりしてゐずによく〳〵このことを心においておくがよい、さうすると坪谷の家は老母と靜姉ばかりになるわけだが、これでもさぞさびしいことゝこまることだらうと思ふ、こちらの方の話はどういふ風になつてゐるのかもうすこしくはしく知らして呉れ、私の考へでは靜姉をば絹が引き取り、お婆しやんは是非こちらに來て貰ふやうにしたいと思ふのだ、お前の手紙を見るとすぐ坪谷のおバーしやんあてにその樣に手紙を出しておいたが、どんなに返事してくるかと待つてゐる、こんど私たちがこちらに移つたのは病氣などのためでなく、東京にゐるとお前も知つてゐる通り毎日十人から十二三人づゝの訪問客があるので、すこしもおちついて勉强をする時間がない、そのためこんな田舍へ引きこんだのだ、此處は東京から汽車で四時間半ばかりかゝる所で、こゝまではさすがにそんなに訪ねて來る人がない、（それでも東京や諸國から二三日に一人位ゐはやつて來る）それで漸く少しづゝ勉强もできだしてゐる、田舍で、あたりは靜かだし、いま借りてゐる家は小石川や天神山あたりで借りてゐた家の三四倍の大きさはあるし、庭に畑もあるのだから、おバーしやんもそんなに窮屈ではないと思ふのだ、どうか來て貰ひたいと思つてゐる、お前たちからもその樣にすゝめて呉れ、

來て下さるとなると私が迎ひに歸らうと思ふ、さうでなくとも一度いろ〳〵の用事で歸りたいと思ふが、やはり非常に忙しいのと金の用意がないので、急には歸れない、五月ころになりはせぬかと思ふ、とにかくこの手紙のつき次第に坪谷のことや絹のことなどのくはしい樣子を知らしてくれ・

先月送つたかけ軸は兄さんのお氣に入つた樣かね、あれでもあの繪師が一月あまりかゝつてかいたものだ、あの人はお前も逢つたことがあるかと思ふが、越前翠村といふ私の友人で、若手ではなか〳〵未來のある人なのだ、友人同志のことで謝禮といふものは出さなかつたが、繪をかゝせる前後の酒代やら何やらでかなりかゝつた、半年あまりさいそくして漸くかきかゝらせたのだ、

兄さん姉さんには別に書かないから平常の御無沙汰のおわびやら、坪谷のことお前のことについてのおせわのお禮やらお前からくれ〴〵よろしく申しあげて呉れ、兄さんたちおそろひの寫眞はないかナ、あつたら一枚ねだつて送つてくれ、わざ〳〵とつて貰ふとなほいゝなア、

喜志もなにかにつけてはよくおまへの噂をして逢ひたがつて居る、あとで手紙をかくさうだが、よろしくとのことだ、

お前のごこんれいの日はいつにきまつてゐるのだ、半襟の一枚も送つてあげたいと思ふから知らしてくれ、

お前の袴が殘つてゐるが、あれはどうしやう、送らうか、

一月十八日　繁

春子樣

二

一月廿七日、沼津町在楊原村上香貫より、岡山市、三浦敏夫樣宛（手紙）

御健康の由にて何より心安く思はれます、近來三浦敏夫といふ四文字と病氣といふ二文字とがいつも混線する傾向があつて、非常にいやでしたが、ほんとにそれをきいて安心されました、一つは氣持からだつたのですね、でも、あまり氣をゆるさない樣になさい、

僕たちのこちらに來たのはつまり人に逃げたのです、他のために自分といふものが皆無になりさうになつたので、思ひ切つて避難したのでした、いよ〳〵貧乏にはなり心細くはありますが心持は非常に靜かになりました、矢張りこれが僕にはいゝのでせう、都會で騷ぐ人間ではなさゝうです、これで少しおちついて勉强する氣でゐます、ゆく〳〵此處に草庵など結びたいとも思ひます、さほどいゝ處でもわるい處でもありませんが、まア斯んな處だらうと思はれます、今年三十七歲、これから一生の計畫を立てる樣な氣でゐます、

云ふのが少し早すぎるかとも思ひますけれど、どうかすると君を訪ねてゆきますよ、まだあてにはなりませんがね、この三月か五月に母を見舞はうと思ふのです、そしてそのゆきか歸りに君を脅かさむとぞ思ふのです、國にもあの時以來歸らないのですから、どうでも近々歸らなくてはならぬのですが、出來るなら右の時期に歸りたいと思ふのです、まだ汽車賃の目あてもついてないので、烟にならぬとも限らず、云はずにおく方がいゝかも知れないが、とにかく一度は歸らねばなりますまい、母ももうかなり參つたらしい、承知すれば彼女を連れてこゝで暮したいと思ふのです、東京ではひどく嫌はれましたが、此處なら田舍ですからね、あまり反對しないかも知れません、それはとにかく、お訪ね出來るのは嬉しい、廣島ならなほよかつたが岡山でも惡くはない、都合では小豆島を一つ案內して下さい、出來たら今度の歸省記を長篇紀行の單行本として出したいなどゝも考へてゐるのです、それには小豆島などいい色どりだと思ふ、それから矢掛町といふのはどこ

です、そこの中學の教師に僕の幼な友達（平賀春郊）が行つてゐるので、近かつたらこれにも逢つて來たいと思つてゐます、

斯んなことを書いてると、明日にも出かけたくなつていけない、一週間ほど前からたちのわるい風邪を引いてねたり起きたりしてゐるのです、肩がこつてしやうがない、君をも一度この土地へ呼びたい、月並な景色のなかに、見る眼で見ればなか〳〵いゝ所がある、君こそ閑人だからいつでも出て來られるでせう、一つその覺悟をきめてお置きなさい、少くとも東京より遙かにいゝ、病院も相當なのがあるから心配はない、第一そこら中に大小の溫泉が幾つかある、家も前のゝ三倍位ゐある、

何の用もなさゝうで忙しくて〳〵、ちつとも時間がありません、この四月にはまた第四番目が飛び出す樣子です、どつちが親爺だか子供だかわからぬ狀態でどさくさ騷いでゐるのも甚だ樂で無い、御憫笑を乞ふ、

岩城の方には折々は歸るのですか、梅が庭に二三本咲いてゐます、君の方とどちらが暖いか知ら、

とにかく、近々逢へる樣に祈りながらこの手紙を終る、

一月二十七日　　牧　水

敏　夫　樣

三

二月一日、沼津町在上香貫より、茨城縣、友常幸一樣宛（手紙）

拜啓、お手紙難有うございました、

水戶の梅見は數年前から志してゐることで、いまだに果されずにゐます、昨年の暮ちかくから三四人の人の誘ひを受け、今年こそと思つてゐましたが、急にある著述の稿を爲上げねばならぬことになり、その花のさかりのころ、最も忙しい頂上らしく思はれます、今年もまたお流れになることでせう、

「木星」のこと、小生は小生の受持つ以前のことを一向に知らず、誰が舊いか新しいか（藺部といふ人

など、多分舊い方の人だらうと多少手かげんはしてゐたのですが）一切無差別です、それに近來投稿者激增してよほどづぬけて佳いと思ふのでなければ目立つほど澤山採ることなど出來ません、投稿の中、三分一位ゐは全部すてますが、出來るなら一首づゝでも採つてやりたい氣が先立ちますので、それに歌の出來から謂つてもさう懸隔がない只今の狀態ですから、先づあんな風になるのです、受持つ前の木星といまとの出來のよしあしをも右の次第で一向に知りませんで、お手紙を見てオヤ〳〵と思つたことです、今までそれらに關して受取つた手紙にはみな今の方が盛んになつたとのみあつたのです、小生自身の考へは、何しろまだ全部が幼稚だが、然しなまなか地方宗匠の惡氣取や惡をさまりの無いだけ、これからこちらさへ勉强して見てゆけば相當の高さまで押しあげることは出來ると思つてゐるのです、さういふ幼稚な人たちの中ですから誰か少しでも先きがける人は無いのかと探してゐる所なのです、發表の體裁だの數だのに係らず、どん〳〵舊木星の人たちにも出して貰ふ樣に君よりお話し下さい、この人は斯ういふ人だからと特に手かげんをするのはなか〳〵苦しい事で、それは先づやりませんが、永く詠んで來た人とさうでない人との間には自から差がありませうから、その位ゐの事は小生にもわかりませう、先づ君あたりからお出しになつては如何です、

「潮」のこと、承知しました、いつまでに送ればいいでせうか、いま歌がありませんが、

二月一日　　牧水生

友常樣

四

二月二日、沼津在楊原村上香貫より、大阪、井田虎男樣宛（手紙）

井田兄、兄のお名前を見るごとに、なつかしい、といふのと、濟まないなアといふのとが必ず一時に起つて來る、ほんたうにすみません、許して下さい、

大阪神戸附近の社友をば橫濱の發行所から兄あてにすぐお知らせする樣只今通知します、然し、大阪附近の人たちは何だか心ぼそくて、張り合ひがありませんよ、君がおやり下さるにしてもどれだけか齒痒さや憤慨やをなさることゝ思ふ、たゞ大阪で大島武男、神戸で谷口孤梢、この人たちは多少ともお話相手になるでせう、

ほんとに暫くの氣がします。實は二三日うち手紙さしあげたいと思つてゐた所でした、（出鱈目にぁらず）この三月ころ、鄕里に母を見舞はうと思ふのです、そのゆきかへりに（多分かへりに）大阪に降りて、兄と、大朝にゐる藤田進一郎（早稻田の同級で特に親しかつた方）と、大島君あたりにだけこつそり逢つて大阪の料理と酒とをうんと御馳走になつて來たいなアと考へてゐた所なんです、まだ旅費の見當もつかないでゐるので先きぶれは少し早すぎるかと思ひましたが、とにかく右の三人にだけはその旨云つておかうかと考へてゐたのです、お葉書を見たりすると是非にもといふ氣になつたりしてますが、確定はもう少しお待ち下さい、右の藤田といふ男も少し癖はあるが好い男です、御紹介したいと思つてゐました、大島君は御存じですね。若しそれまでに確實な支社が出來たりするとどうしても一日歌會か何か開かれねばなりますまいね、出來るならこつそりがいゝと思つてゐるのです。

雜誌も御らんの通りで面目ありませんが、今年からはどうにかやつてゆけるでせう、さぞ骨折甲斐のない爲事でせうが、もう少しあいそをつかさずにおいて下さい。

多分まだお目にかゝらないのでせうが、妻がしきりに兄に對する小生の筆不精を氣の毒がつて、ほんとにすまない〳〵と云つてゐます、いつか此處にも兄をお迎へしたいと思ふ、松原に富士、然し月並もこの位ゐ大きくなるとなか〳〵馬鹿になりませんよ。いつか近く機會はありませんか。おこしらへなさい。

三月には京都にも一寸寄つて飲仲間だけに逢つてゆきたいと思つてゐました。若し大阪で歌會でもあ

るなら京都連をも呼ぶのですね。

それからどうしてゐます、大阪は面白うございますか、そしてまだお一人ですか、ではないでせう、今度御逢ひします。小生、東京を見限つてよかつたと喜んでゐます、でも、いよ〳〵貧にしていよ〳〵忙しく、さんたんたるものです、でもさう不快でない、爲事が割に眞面目に面白くやれる傾向です。いま、歌集「黑土」を編輯してゐます。（いま恰度九年度分にかゝつてゐた所にお手紙着）今までの自分の歌集のうちでは何をいつても一番です。これを眞實の處女集のつもりで出すのです。

いつぞや「櫻草抄」を難有う、思ひがけなかつたので驚きました。

昂奮と時間切迫とで、亂筆甚し、御推讀々々々、

二月二日午前　　牧　水

井　田　兄

五

二月十九日、沼津在より、長野縣、重田彌次郎樣宛（葉書）

意外に速く、御贈物只今到着、恐悅御推量を乞ふ、早速いまむしつてるがね、これで今夜おみきを二倍にした勢ひで或る講演會に赴くのだ、土地の銀行團で出來てゐる會合から賴まれたんだが、鵪の威をかつて大に天地人生を談じつけてやらむとぞ思ふ、雜誌は二十二日に正月號が出來るさうだ、去月の十五日に編輯をば終つたので、君のはこれには間に合はなかつた、次のを明日から選にかゝる、手紙が來さうで一向來ないので少々心配になつてゐた所だが、一本よこしてくれ、

「くろ土」印刷中。小生來月は日向に歸る、用とてはなしお袋を見に。

二月十九日夕方四時　　若　山　生

六

二月廿六日、沼津在上香貫より、東京、杉本寬一樣宛（手紙）

やれ〳〵珍しい人から來たものだ、とお手紙拜

見、それでも一寸逢つた樣な氣がしたよ、

御健勝何より、小生等、例により例のごとく、何の故とも知らずして毎日毎日ごた〳〵して暮してゐるものと御賢察あれ、然し、東京にゐるより遙かにいゝだけは事實らしいね、來月あたり一寸上京の豫定、逢ひたいね、君は飮めるの、僕はさつぱりだめになつたが、うまさには變りなし、

歌、忘れないうちに送つておかう、

とりあへず、

二月廿六日　　牧　水

寬　一　樣

然し、何といふ事なく寂しくていけない、段々オレは寂しくなる樣だが、いゝのか知らと思つてる、

誰にか逢ふかね、この頃？　榎本君は元氣かしら、よろしく言つといてくれたまへ、

僕來月早々九州へ歸つてくるつもりだつたが、妻のお產がいつもより厄介らしい傾向があるので、引き止められた、五月には出かける、

僕の歌集「くろ土」が近々出る、それはそれは素敵だぜ、早速一册を購ふべきだね、オレのこれは處女歌集だ、

七

三月十六日、伊豆、湯ヶ島溫泉湯本館より、岡山縣、平賀財藏樣宛（繪葉書）

どうも頭がわるいので、十日ほどぐつすり眠りたく、けふ此處へ來た、天城から出た溪の眞白になつて流れてゐる所だ、一杯飮んで夕方から寢た所、目がさめたので、いま一浴び浴びて來た所だ、何しろひどい溪の音サ、夜なかの二時だ、

三月十六日

先日、珍しい長手紙、ありがたう、一兩日中、此處から返事を書く、旅は五月に延ばした、岡山の中國民報社主催の歌會ある筈、（繪葉書畫面に）

八

三月二十三日、湯ヶ島湯本館より、沼津町、塚田靜保樣宛（繪葉書）

さびしいので、飲んでばかりゐます、それがまた痛快にまづい酒なのです、をり〳〵溪から山魚がとれます、信州はいま鰍の魚田ですがねエ、此處にはゐないやうです、今朝もまづいのをちびりながら信州の山河を思ひ出してゐる所です、そばかき、とろゝ鰍の魚田などたべたいなア、

二十三日　　牧　水

この湯に頭をうたせてますと、そばで、河鹿がないてます、風があると寒いが、凪ぎさへすればちやうどいゝ氣持です、

少し溪奧に殆んど野天の湯があります、女も男も着物を石の頭にぬいでおいてそして入るのです、お天とさまがにこ〳〵しながら眞上からさしてます、溪のしぶきがかゝります、（湯本館湯瀧の繪葉書畫面に）

九

四月二十二日、沼津町在楊原村より、大阪市、大島武雄樣宛（手紙）

御無沙汰してゐます、例により、おちつかぬ日夜を送つてゐるものとお憫み下さい、來月は是非お目にかゝりたいと樂しんでゐます、五月十五日に岡山市に土地の新聞社主催の歌會があり、それに出ねばならぬことになつてゐますが、そのゆきにお寄り出來るといゝのですけれど、いろ〳〵用事溜りをり、一寸むつかしいかと思はれます、すると岡山から小豆島へ、そこより高松へ、そこより神戸へ、大阪へと廻りたいと思ひます、岡山の田舍に平賀春郊が行つてゐますので、それを訪ねたり、神戸の親戚に寄つたりしてゐて、かれこれ一週間ののち大阪着となりませう、然し、この日取のことはまた改めて確定次第に申しあげます、大阪でのねがひは、支社の歌會（一般的でなく、内輪だけにして、一般には一切發表せぬ樣にして下さい）出席と、大阪式のおいし

い料理を一晩御馳走して下さい、これも大がゝりでなく、ひつそりとたべるだけにして下さい、それからお酒をすこうし飲まして下さい、澤山このころ飲まぬことにしてゐます、それから若し時間があつたら寶塚に行つて少女歌劇といふものを見せて下さいませんか、まだ一度も見ないし、それに田舍に來てゐると一層さういふものが見たいのです、最も、これは附錄のこと、以上のほか、何の慾もありませぬ、他のお心づかひをば一切よしにして下さいまし、こちらから先におねだりした方がいゝと思ひ、斯う催促がましく申し出しました、

支社のことはお目にかゝつてゆつくり御相談申しませう、今までの樣なものでは、あつてもなくても同じです、もつと內容的なものにすることにしたいものですね、それにはどうも出世間的といふことが一つの必要ではないかと思ひます、大阪ではそれにするかもつと大がゝりの形式的のものにするかの二つに限ると思ひます、でないと、小さな天狗の鼻つきあひの今まで通りのものに終るに相違ありますまい、これはお逢ひして話します、

「くろ土」のお祝ひ、難有う存じます、本になつたのを見ると例によりがつかりしますが、とにかく一步の進步はあると思つてゐます、これも、お目にかかつて御批評を聞きたいと思つてゐます、

沼津に來て、東京以上の忙しさに追はれてゐます、いやなことです、それで、無理な旅にも飛び出すことになるのです、

大阪での、右のいろ〳〵のこと、電話でゝも井田君に君からお話し下さいませんか、そして萬事よろしく打合せて下さい、

四月廿二日　　牧　水

武　男　樣

一〇

四月廿五日、沼津町在楊原村より、岡山市、三浦敏夫樣宛（手紙）

三浦兄、例により頓首々々、もうお目出度が濟ん

でゐるころと思つてゐましたに、さうでしたか、いつになりませう、小生の方は多分五月十五日岡山市中國民報社の主催で歌會が催されるかと思つてゐます、まだそれも確定はしてゐません、けふあたり、問合せてみます、何だか君の方の日取と一緒になりさうで氣を揉んでゐます、新婚早々、極めてお溫かきところを騷がせるも氣のきかぬ話と遠慮されますが、とにかくそちらに行つたら先づお訪ねします、謹愼戒嚴以て貴家の神聖と平和とを亂さゞらむことを努めますからその點は御安心下さい、中國民報社に郡山辰巳（タツミ）といふ人がゐます、それが舊友郡山幸男（經堂と號す）君の弟さんで、そんなことから歌會話も出たのでした、日取がどうなつたか、近くでゞもあつたらその社で同君にお逢ひの上、聞いてみて吳れませんか、そして、歌會のことでもいろ／＼骨折つてあげて下さい、そして樣子をお知らせ下さい、

妻のあれがまだ濟まないのです、中旬あたりといふ產婆たちの豫定がだん／＼延びつゝある所です、昨夜も一時半のころに起されて俥屋に飛んだりなどして今朝に到りましたが、まだ何ともなさゝうです、少々心配になりました、然しどうといふ身體の故障はないのださうです、

三月の末に出かくる筈の旅立も右の故に次第遲れになり、やゝ氣拔の上、路銀なども先づきれいに霧散した形で、實をいふと、いま、ポカンとしてゐるのです、然し、そこらに發表はしてありますし、無理をしい／＼一廻りだけは廻つて來るつもりです、岡山は日向からの歸りにする筈でしたが、それを變更し、其處を第一にし、それより小豆島、高松、神戶、大阪、京都、それから山陰道へ入り込み、隱岐まで渡るつもりでゐます、そして九州を極めてかんたんにします、いつぞやのお手紙にあつたトモの津は實は小生もずつと前から頭にあつた所ですが、時間の都合でどうだらうかなどゝ考へてゐます、

とにかく、近々、お逢ひ出來ます、いろ／＼と樂しく考へてゐます、

四月廿五日　若山牧水

三浦敏夫兄

矢掛町の平賀春郊には同道して訪ねる旨、云つてやつておきました、同地中學の教師をしてゐるのです、

一一

四月廿六日、沼津町在上香貫より、兵庫縣、藤原東川樣宛（手紙）

先日、お手紙、難有うございました、久しく歌をも拜見しないし、どうなすつたのかと思つてゐた所でした、それよりさき、上道君より來書あり、やゝ御消息を知つてゐたので、「鄕愁」のことをもさう突然には聞きませんでした、とにかく、結構のことです、紀念とし、また一種の鞭打として極めて有意味のことゝ思ひます、印刷などはどうなります、土地で出來ますか、田舍で作るとすればことさらのこと、あまり凝らない方がいゝと思ひます、販賣といふこともあまり頭に置かぬがいゝと思ひます、初めから唯だ知人に分つ位ゐの考へが、必要かと思ひます、「創作」には適宜に紹介します、

いま、ひま／＼に少しづゝ拜見してゐますが、お手紙にあつた「直す」といふことは、いま一寸不可能だと思ひます、何しろ大爲事になりますから寧ろ初めから手をつけない方がいゝと思ひます、氣のついた假名違ひを改める位ゐでおいときませう、そして、序文を書きませう、斯うしてみますと、いろ／＼と思ひ出さるゝことがあつて書きたいことが自づと出て來ますから、

旅には、とにかく、無理でも出かけたいと思つてゐます、四月號に書いたのを逆にして、岡山、高松、神戶、大阪、京都、それから山陰道へ入りたいのです、城の崎には獨りでも一寸降りて見度いと思つてゐたのでした、其處でお逢ひ出來ればこの上ないことです、然し、地圖で見ると東河村と城崎とは大變離れてゐるぢアありませんか、それでも差支へありませんか、二三日前、城崎郡江原村中島いさむ（社友）といふ人からも城崎で待つ旨の手紙が來ましたが、出來るならみな一緒に逢ひ度いと思ひます、

そのことをいま同君あてにかきますから、そちらで都合よく直接交渉の上、相談をきめて下さい、一泊か二泊の時間しか無いと思ふのです、

右、上道君にもお話の上、萬事、よろしく御とりきめ下さいまし、とにかく、近々、お目にかゝれることゝ思ひます、

「鄕愁」詠草は四五日うちに序文と共にお送りします、

多分五月十日頃當地出發になります、五月下旬、そちらに參ることになりませう、

四月廿六日　　　若山牧水

藤原東川樣
上道草二樣

先日、お手紙に添つてゐましたもの、難有うございました、恰度東京から友人の來てゐた時で、大に有意義でした、

一二

四月廿七日、沼津町在上香貫より、信濃・中村柊花樣宛（手紙）

左樣か、歸つたのか、

どうしてるだらうと非常に頭を惱ませながら、どうにも一寸手の出し樣のない氣持に囚はれて、苦しい沈默を續けてゐたのであつた、それも、一日々々と上京する日を自身にも待つてゐたので、上京して逢つた上で、と思つてゐたのであつた、然し、さう早く落城しやうとは意外であつた、

矢張り見物人になるほかはない、まアよかつたとも、どうしたものだとも、僕には云へない、かれこれ云つて今の君の心を亂すでもなからうとも思ふ、

とにかく、一時的にせよ、一種のおちつき(?)が出來たことゝ想像する、どういふ風に君の眼があいてるか、それともつむつてるか、それはまだ知る由もないが、やれ〳〵といふ氣はしてゐることゝ思ふ、危險な時間かも知れない、が、一切、批評の事をしない、

僕も四月は正月同樣、いけない月だつた、三月の

末頃から今日まで、まるで來客とバカ酒との間に苦しいバカ行(ギャウ)を續けてゐた、（それでも、若しか〳〵と君たちを待つてゐたのであつた）全く、何もしなかつた、

旅はやりたいと思ふ、路銀のあてをなくして、途方に暮れてるが、上京して、無理をして來るつもりだ、來月早々上京、十日ころ、出立のつもり、

妻が昨日、男の子を生んだ、今までにない嬉しいといふ氣がした、年をとつたのだね、君も喜んで呉れることゝ思ふ、月並だが、富士人とつけた、美しく健か、

四邊悉皆青葉、旅をやめて机にかぢりついてゐたい氣もする、それも今朝とくにその感あり、お產のすんだ影響らしい、

四月廿七日午前十時　　　牧　水

柊　花　兄

殘酷とも思ふが、これからどうするつもりか、一寸聞かして呉れ、旅の汽車中での氣がゝりになるのを恐るゝ故に、

一三

四月三十日、沼津在上香貫より、東京市、山崎斌樣宛（手紙）

今朝、お祝ひの歌、（オドロイタネ）難有う、豫定より大分遲れる（三月末かの見込なりし）ので、それに昨今、ぐず〳〵してたので、かれこれと心配してゐたが、それこそ事に當つてみると諺の通りで、至極かんたんなものだつた、兩人共、甚だ健全らしい、

移轉が濟んだ樣だね、どの邊か知ら、電話の番號から見るとあの近くだらう、大村君のどつちになるのだね、

僕の上京、この四日か五日か六日かのうちだ、持病が起つて、今日はすつかり怠けてしまつたのだ、今日も烈しい選の催促など來てるのだが、どうにも手をつけるのがいやなのだ、然し、さうもゆかず、それをこれから晝夜兼行で片附けといて出かけたい

のだ、そして九月にこちらに歸り、十日、西の方へ向けて出立することになつてゐる、のつけに岡山にゆき、（十五日、岡山の中國民報主催の歌會があるのだ）小豆島から高松へ渡り、神戸、大阪、京都と引返して、山陰道へ入込みたいのだ、豫定を幾らか變へて九州を從にし、山陰を主にすることにした、隱岐など、面白さうだ、

「中外」のこと、これはとにかく逢つてからよく話さう、何とか他で方法がつけば、そのまゝでゆく方がいゝと思つてる、とにかくずつと紀行をば書き續けて見度い、のつけに單行本にしてもいゝなどゝ考へてる、

何だか然し計畫なんか立てゝおいて出かけるのは苦しくていけない、今では何だかねばならぬ式になつてる様で今度の旅も一向いま樂しくも考へられぬ、何も彼もいやだといふのが本音かも知れない、

福永君はどうしてるだらう、季候のせゐか、大人のことが頻りに心に來るが、相變らずか知ら、家人の健康はどうだらう、いつ上京するのだつて、丁度落合へるといゝが、その様にゆかぬかね、時間があると一寸安房まで出かけたいけれど、佐藤君の元氣はいゝことだ、何か出來たらしいね、それがもとだらう、ほんものゝ元氣であつて呉れよと思ふ、もつともから元氣でもいゝね、何か知ら、心の中にばねがないと苦しくていけない、

先づ足下はどうだね、足下のバネも油がきれさうでなか／＼切れないから感心するよ、少々悲慘にも見えるがね、

東京に出たら越前君とこが獨り暮しでのんきだらうと思つてゐるのだが、繪でもかいてゐたら君の方にころげ込まして貰ひたい、飲まないから大丈夫だよ、全く飲めない、二合を越すと翌朝くるしい、

何も彼もいやだといふ氣持は全くやりきれないね、ではふら／＼寝てるがいゝかといふとそれもたまらぬ、因果な存在サ、

アー速く出てゆきたい、一寸でも氣持が變ればそれでまた當今はもつかも知れない、飲みたいなア、君にも一度刀が拔かせたいよ、

四月三十日　　牧水

阿岐良兄

としさんやいづちやんたちによろしく、（封筒裏面に）

庭が深い青葉で、何とかいふ大輪のつゝじが一つ赤い、蛙がそこら中で鳴いてる、

一四

五月二十七日、京都嵐山小楠公より、岡山市、三浦敏夫様宛（繪葉書）

いろ／＼の郵便物、難有う、直島で風邪をひいたがもとで諸病忽ち具發、さすがの小生も高松からは全く蟲の息になつて大阪、神戸と這ひ歩き、一昨日漸く此處へ來て寝てゐます、三四日休んだ上、すぐに日向へゆくか或は沼津へ引返すことにします、多分後者でせう、短册は明日か今日か書いて送ります、間に合ひますか知ら、阿父様たちに呉々宜しく申上げて下さい、あゝした旅興はもう今度が最後でせう、あれで納得してもうあの種類の旅はやめにします、すると大に意味のあつた岡山でした、

廿七日　　牧水

一五

五月廿七日、京都市外嵐山小楠公、竹添履信君方より、岡山縣、平賀財藏様宛（葉書）

三浦君方宛の郵便物（小包は悉く恐縮）はすべて此處で受取つた、短册は此處で明日あたり市中に出て買つて來て書いてそちらへ送る、あの後、岡山で二晝夜ぶちぬきに飲み、そこを出て直島といふ島で鯛漁に行つてまた飲み、舟の中で風邪を引いて終に倒れ込んだのであつた、それからは全くの病人となつたが、日取だけは狂はせずに高松大阪神戸とつとめて、一昨日此處へ來た、竹添君とは竹添進一郎の養子で、嘉納治五郎の息なのだ、「創作」では二九十八といふ名で歌を出してゐる、元や明あたりの古書畫を持つてゐるので、それを見せて貰ひながら寝てゐるのだ、多分沼津に引返すことになるだらうが、

なさけない旅をしたものだ、然し、一度は斯ういふことをもせぬことにはたんのう出來ぬ男なのだから一面當然の税を納めた形にも當るのだ、節子さん久ちやんに呉々よろしく、寫眞が見たい、

廿七日　牧水

一六

五月三十日、京都より、日向國、若山まき樣宛

（手紙）

早速ごへんじをいただきありがたうございました、電報には

ヤマイキヲツケヨイトナカヘレ

とありましたが、これは、たぶん、やまひ氣をつけ、よい時かへれのまちがひだらうと思ひ、そのやうに決心いたしました、明後日あたり、ここから、沼津のほうへかへらうとぞんじます、わがまゝばかりしてまことに、相すみませんけれどもどうぞおゆるし下さいまし、わたくしの病氣といふのは腦がいたむのと腎臟がわるいのとのふたつが持病なのです、酒さへやめてをれば、ふたつとも何でもないのですが、すこしすごしますと急にわるくなるのがくせなのです、しかしこんどでよくよくこりましたから、もう決してばかな酒はのまぬことにかたく、決心いたしました、神戸のをぢの樣なたつしやなひとが、あゝいふやうに、ぽき／＼仆れるのを見ると、すこし氣味もわるくなりました、とにかくこれから充分氣をつけてもう御心配をばかけぬことにいたしますから、ごあんしんして下さいまし、

こんどはこのまゝ引きかへしますが先日も申しあげましたやうに秋にはかならずお目にかゝりにかへります、そのまへにすこし申しあげておきたいことがありますので、どうぞおきゝ下さいまし、實は今度お目にかゝりにかへらうとかんがへましたのは、あなたにぜひ沼津のほうに來ていたゞくやうにおすすめするためであつたのです、御一緒にゐていたゞきたいといふ、わたくしの心持はよく御推察のことゝぞんじますので、こゝではあらためて、なにも申しません、生れてきてから、こんにちまで、ほとん

どいつしよにあさゆふをすごしたといふこともなく、はなれてゐてもなにひとつ子らしいことをしたこともなく、おたがひにしだいにとしをとつてゆくといふことは、いかにもざんねんしごくのことなのです、どうかこのわたくしのこのこころもちを御察し下されて、すこしのがまんはこらへて、いたゞいてわたくしどもの方へ來てこれからの年をおすごし下さいませんか、をりいつておねがひ申します、

おひとりのかんがへで、ことがきまりかねましたら都農や今西たちにも、右申しました、わたくしの心をおはなし下されて、とくと御相談くださいまし、それも急にどうと云ふことには、ゆきますまいから、たゞいまから、そのおかんがへで、ぽつぽつと御用意下されて、この秋わたくしのかへりましたとき、すぐいつしよに、こちらに、おいでになられるやう手筈をきめておいて下さいまし、これはわたくしばかりのねがひではなく、喜志子もしきりにそれを云つてゐることなのです、さいはひ、沼津はこのまへの、東京とちがひ、ゐなかではあり、いへやしきは廣し、やしきの中に、畑もあり、さうたいくつなさるやうなことはばん／＼ないとしんじます、延岡の觀禪叔父もこれから東京ずまひになるさうです、沼津と東京とでは汽車が四時間かゝれば往復ができます、

ちかにお目にかゝるとまだいろ／＼申しあぐることがありますが、なか／＼手紙にはかきにくうございますから、わざとそれらをば書かずにおきますゆゑ、あなたのほうで、ばんじ御察し下されて、ぜひ／＼そのやうにして下さるやう、たゞそれのみ、おねがひ申します、

これからまた、暑くなりますから、このうへともおからだにお氣をつけ下さいまし、

この手紙にたいする御返事は、またいまゝでどほりに

　靜岡縣　沼津町在　楊原村　上香貫

としてだして下さい、

多分あすは、そちらにかへります、

とりいそぎ、右のみおねがひ申します、

五月三十日　京都にて　繁

母上樣

一七

六月十二日、沼津在上香貫より、信州、綿引惣吾樣宛（繪葉書）

京都宛お葉書只今拜見、三日にこちらに歸つて寢てゐました、旅を中途で切上げたのは生れて初めてのにが〳〵しい經驗でした、嵯峨に恰度十日ゐました、その間が一番いゝ時間でした、竹添君と二人きりで、いよ〳〵明日お別れといふ晩に京都の他の連中と逢ひました、蒼梧和尚の噂も隨分出ました、夏には寄りますか、

六月十二日　牧水

一八

六月三十日、東海道沼津在上香貫より、信濃、中村端樣宛（手紙）

中村君、一昨日、君の葉書を見て、たうとう先を越された、と思つた、書かう〳〵と思つてゐたたよりを君によつて先んぜられたのである、

中村君、僕はいま非常に（文字通り非常にと云はうか或は現在の僕としては極めて當然にと云はうか）疲れてゐる、眉ひとつ、唇ひとつ、動かすことの不能になつてゐる沈默者をたゞ見逃しておいてくれたまへ、

旅は、豫定のごとく失敗であつた、今まで、一週間の豫定は十日、十日の豫定は二十日とのみ伸びてゐたものが、今度は三月の豫定で出かけて、かつきり二十一日目に寢臺車に載せられて歸つて來た、斯うなることを、心の何處でか豫期してゐた樣にも思はるゝ、たうとう、斯ういふ身になることになり居つたナともうなづかれた、すべて苦笑と慚愧とである、四國高松から大阪に渡る汽船の中などでは、いよ〳〵乃公もこゝらで終末を告げるのかナなどゝ本氣になつて考へられたのであつた、そして、自づと、自分の全體に眼をつけざるをえなかつた、斯ういふ意味に於て、こんどの旅も全く無意義ではなかつた

ともいへる、

君の喜びさうなと思はれる繪葉書を隨所で買つたのであつたが、一枚も書きえなかつた、歸つて來るとあれこれの返事にそれで出すことの便利なものが多く、ツイ、大方、出してしまつた、京都美人が少しお茶を引いてゐる、それをこれから二三日つゞけて送り出すことにしよう、

君も、相變らずの樣に察せられる、これも苦笑だが、やはり止むを得ぬことかも知れぬ、さうかうしてゆくうち、どうにかかたがついてゆくのであらう、多少ともよくするか、惡くするか、其處が即ち七分三分のかねあひどこなのだらう、然し、君のはまだ何と云つても多分の對他的苦惱なのだから、かたがつけいゝ、僕のなど、全く、あとにもさきにも自分ひとりなのだから、苦しむとなると全くそのやりばがない、自分にまけまいまけまいとする氣苦勞だけでもかなり勞らせられる、

旅から歸つて（今月三日朝）ずつとあらかた寢て過した、幸ひに一月はごまかせた、これからはどうでも起きて怪しき稼ぎをやらねばならぬ、寢てゐる間にアルスから出る紀行文集「靜かなる旅をゆきつゝ」の校正をやつた、四六版、ポイントのベタ近い組みかたで三百六十二頁のものになつた、中に「山腹の友が家」を初め、他二三ヶ所に君の名が出て來るので、自分ながら意外に思つた、

せめて晩酌だけでもよさうと歸つて以來、從來より毎晩半減して試みつゝあるが、そのため、餘計に身體のからくりがぎし〳〵云ふらしい、然し、我慢して今度は押し通すつもりだ、あと一二ヶ月も半減をつゞけ、それからその半分と行つて、やがては全廢したい、

いやな梅雨で、身體が腐れかけてゐる、

御兩親、細君たちに呉々よろしくお傳へ下さい、こちらもおやぢを除くほか（おふくろも怪しいが）子供たちは大元氣だ、

六月三十日夜　牧水

柊花兄

重田君から手紙が來た、あの人も氣の毒な可哀さうな人だといつも思ふ、

一九

七月五日、沼津在上香貫より、東京市、山崎斌樣宛（手紙）

けさの朝日をみたら「無名作家」云々の中にあやしき名前を見出した、また、何かやつてるなと思つた、パンを噛りながら、このごろ、パンしか喰へない、もつとも朝だけだよ、

それでも何か彼かやつてるだけ君はエライよ、蟲が知らせるか、どうもそんな氣で出かけたのだつたが、こなひだの旅は存分にしくじつた、まだ旅といふ旅に入らぬ前に倒れてしまつた、前の東京の十日がわるかつたのだ、また、岡山でもあの通りを五晝夜か續けた、そして卒倒した、嵯峨で十日寢て（その間はよかつた、清凉寺横の禪寺で）六月三日にこちらに歸つて、まだ寢たり起きたりだ、身體全體が疲れ切つてゐるのだね、つまり、油が切れたのだ、來べき所に來たと思つてゐる、葉書一枚書けない、書けばうそ字ばかりだ、今朝など、全く初めての元氣なのだ、

酒をやめてるせゐもある、毎晩一合五勺に減らし朝晝及び臨時をなるたけ見合せてをる、カッパが木のテッペンにじつとしてゐる形だ、

君及び周圍の樣子をきかしてくれたまへ、をり〳〵君の夢をみるが、あまり景氣がよくない所ばかりだ、事實如何、

梅雨には弱つたが、これから少しはいゝだらう、今朝の僕の元氣も、微かながら庭の木草に日がさして來たからだ、夏の日光をみると、やはり死灰時に燃えむとする心躍りが身に湧く、

紀行文季（カキイレドキ）を一行も書かずにすごして大にこたへてゐる、今年の前半期は甚だいけなかつた、これから穴埋め工事を起さなくてはならぬ、出來るだらう氣もする、夏はいゝよ、

逢ひたいが、逢ふとまた困るだらう、御家族みな御達者か知ら、こちらもおやぢをのぞけば先づ元氣

だ、天神山を思はせる季節だね、あそこのヒゲさんも元氣か知ら、「斧」の錆びかげん如何、

矢掛で平賀君にあつた、いゝおぢいさんになつてるよ、この夏、出て來る筈だ、いまの住ひが川にのぞんだいゝ場所でね、川を距てゝ松の木の山があつた、川原で家族たちと寫眞をとつた、いゝ娘さんになつてる、十二位ゐだらう、

「中外」から借りてゆかなくてよかつた、「中外」といへば、いつかの歌の稿料がまだ來ないさうだ、折があつたら電話をたのむ、

本式に晴れるらしい、難有い、

とし子さんに吳々よろしく、

たいへんに逢ひたい、此間、君の方に行つてをればよかつたにねエ、苦笑々々、

五日午前　　　　牧　　水

斌　兄

二〇

七月十九日、沼津在より、岡山縣、平賀春郊樣宛（繪葉書）

昨日、君のために蚊帳をひとつ買つた、但し、これは大きいので僕等が釣り、君には古いのを釣る、然し、これでひとつ君を待つ心が新たになつた、

文集が來た、明日、送る、

因果なことにまだ身體がはつきりせぬ、飲めない、悲しい、

はつきり、いつになるかね、こちらに來るのは、

十九日　　　　牧　　水

二一

八月十二日、沼津在上香貫より、東京市外、和田山蘭樣宛（手紙）

八月九日發お手紙、珍しく、難有く拜見、

中央公論の歌、わざ〳〵、ほんとに嬉しかつた、先日「黑土」の批評を信州の中村君がして吳れ、いま

新作のを君に受け、よそならず感謝の心を深くしてゐる、

中公の歌は實に久しぶりの作歌であつた、春の頃、新潮と中外に二三十首出したのがやゝ作つた氣がしたもので、他にそこゝ發表はしてゐるがほんの責ふさぎのものにすぎなかつた、

今度のこの三十首はその永らく怠けたあとを受けてとにかく本氣で作つたものであつた、

とにかく僕はいま非常に勞れてをる、それはまことに噓の様に勞れてゐる、作つた時にはやゝ作り得た得意を覺えてゐたのであつたが、發表後に見ると、その「疲勞」が餘りにあり〳〵と形に出て來てゐるのを見て、落膽といふより寧ろ氣味惡さを覺えたのであつた、君の不滿を買つたのも主としてその「疲勞」にあるらしく、また一面、心持が出てゐるとほめられてるのもそれに因る様に思ふ、

一首々々の批評に答へたく思ふが、右の「つかれ」がそれを懶うがらせる、然し、大體の意見に於ては甚だ相近きものだ、ほめられて嬉しがる様だが、君が初めに佳いと云つて引いた四首は全く自分にも氣持のいゝ作と思つてゐたものだ、（雜誌があるといろ〳〵云へるかも知れぬが、數日前、吉奈溫泉に人を訪ぬるとて持つて行つて、そこに置いて來て手許にないのだ）部分的批難の個所にはどうも同感の出來ないのが多かつた、たゞ、「見る時の心の上にすが〳〵しばし映りて匂ふ草花」は全く駄作で、當然、あの中から删除さるべきものであつたのだ、

茂吉君のを僕はさう佳いと思はぬ、眞面目は眞面目だ、その糞眞面目と一種の才氣と聰明とが歌を空虛にはしてゐない、卽ち他の人の様なお座なりをば云つてゐない、其處に或る確實さと鮮明さとをば感ぜしむるが、要するに「或る種の作」といふ部分感しか僕には起きない、飛びついて感心させらるゝには到らぬ、然し、君がさういふならもう一冊雜誌を買つて見直して見よう、異つた感じが出て來たらまた書き送らう、

君の歌を「新文學」で突然に見て驚いた、これも置きつ放しにして來て詳しく云へぬが、記憶から呼び

起してみるに、あまり感動しなかつた様に思はれる、あまりに君の作は近視眼すぎると思はれた、惡く凝るとも云へるかも知れぬ、歌の心に冴えとおちつきとがない様に思はれた、近視眼といふことを今少し云ふなら君が少し酒に醉ひかけた頃、よくやる癖に「ソダナア！ ソダナア！」と云つて頭を垂れて感嘆する、つまりあの癖がともすれば君の作歌動機になつてゐはせぬかと思はるゝのだ、獨りで膝を叩いて身をゆすつて感動する姿が卽ち君の歌の姿になりはせぬかと思ふのだ、それは君といふものに特殊の親しみを持つて居る者には面白いことであるが、然し、一般から見る時にはやはり一種の醉興扱ひにせられ終るべき性質なのだと思ふ、また、一面から云へば、あまりに君は君の作の讀者を膝近くに置いて詠みすぎるとも云へるかも知れぬ、つまり、近くに（己れに）甘えすぎるのだ、

非常に云ひにくいが、君にはまだ君の歌は出來て來ない様に思はれてならない、單に一寸變つた和田山蘭の姿は見えても（すこし、あくどすぎる位ゐに）人間に卽しての君の獨特の歌、卽ち深く人間性に根ざした君の歌はまだ〳〵根がついてゐない様に思はるゝのだ、云ふごとに斯んなことのみで、まつたく云ひにくいが、やはり心を開いていふとなると斯ういふよりほかにはない様に思ふのだ、惡しからず思うてくれたまへ、

僕の不健康から折角の富士登山がお流れになつたのを遺憾にも濟まなくも思ふ、僕も何とか早く身體をよくせぬことには苦痛でならない、いろ〳〵行末を思ひ煩らふといふ風の歌がよく君の作に出て來るが、あの心持には全く同感する、

休みのうち、ぶらりと出かけて來ないかね、二三日離室で寢てゆきたまい、

八月十二日午前　　牧水

山蘭兄

そろ〳〵鷄頭の季だが、君の庭にはどうだね、僕、

種を探しそこねて、殘念でゐる、雁來紅はよく育つた、（封筒裏面に）

二二

八月十二日、沼津町在上香貫より、信濃、中村

柊花樣宛（手紙）

中村君、山の湯はよかつたね、僕は燒けないずつと前、一ヶ月の豫定で行つて、秋のすゑだつた、あまり寂しくて一週間で歸つて來たことのある所だ、繪葉書でみると、大分廣い所に移つた樣だね、一昨日僕の近所にゐる服部といふ人（國民黨宣傳部理事）が來て論文を書くために靜かな溫泉はと訊くから山の湯を敎へてやつた、けさ立つて行つたわけだが、ひどくこんではしなかつたらうか、

輕井澤から、若し氣が變つてこちらへ廻るなどゝいふことになりはせぬかと心を動かしたりしたが、さうもゆかなかつたらう、

中村君、先日の大好きなもの、お贈物に對してまだお禮を云はなかつた、大喜びで、早速細君をせきたてゝ作つて貰つて着てゐる、あまりを以て赤ん坊のきものを作り、親子して、大に涼しく居るわけだ、多分そちらの細君氏の手になつたものと思ふ、厚くお禮を傳へておいてくれたまへ、

僕の身體、どうもほんとに疲れてしまつてゐて、實際お恥しい次第だ、君の手紙「黑土評」に對して返事を書かうとしてもう一ヶ月もずべつてゐる、君の歌についても何か書きたいが、これも同じだ、もう少し涼しくなつたら如何にかなるだらう、これも空賴みかも知れぬが、とにかく、現在をば現在として見逃しておいてくれたまへ、（君の先日の歌を早稻田文學に出したいと思つてをるが、いゝだらう）

今年は海水にもようゆかずにゐる、釣にも無論だ、たゞ、とぢ籠るのみだ、藥を四種類のんでゐる、何といふざまだらう、

痔はどうだ、山登りが出來るなら、もういゝことゝ思ふ、

秋ぐちに、ぶらりやつて來ないか、

輕井澤から布施村訪問などあるのか知ら、

歌が作りたい、先日、今月號の（りんじ增刊號）中央公論に出した三十首は、さういふ氣持の動き初めたころ作つたものだ、若し目にふれたら御意見伺ひたし、都市田園號といふのに載つてゐる、

君のその後の作は如何、

和田君も凝つてるらしい、

八月十二日　　牧水

柊花兄

二三

八月廿一日、沼津町在上香貫より、東京、和田

山蘭樣宛（手紙）

冠省、

越後長岡市に開く創作社支社歌會に小生か君かに出席を乞ふ旨、發企人の一人から云つて來た、

僕はいまは到底ゆけない、で、和田君に行つて貰ひたいから往復の汽車賃を添へて同氏宛申込む樣にと、いま、返事を出した、その樣に云つて來たら、君、ひとつ行つてやつて呉れ給へ、土曜の夜行（十時廿分上野發信越線）に乘ると翌日の午前十一時廿二分長岡につく樣だ、月曜一日は休むことにして、諏訪歸りを篠の井（長野のつぎ）から松本を經て、甲州を經て東京に到る中央線に乘る樣恰好な汽車を選むがいゝと思ふ、かなり苦しいが、素通りにしても信州一周が出來る、一ふんぱつ願ひたいものだ、もつとも發企人と云つても幾人かあるのだらうからどういふ評定になるか解らぬが、多分右樣のことにならうと思ふ、その場合の覺悟をきめておいてくれたまへ、重なのは中川杏果（昨年東京に出てゐてよく巢鴨の家に來た）荒木直彥（これは永く橫濱にゐた、君も多分知つてるだらう）の二人らしい、橫濱の會のことは昨日長谷川が來たから、右樣の話をしておいた、

八月廿一日　　牧

山蘭兄

暑いのに弱つてる、身體のせゐだらうと悲觀してる、元來夏は好きだつたのだからね、都合では信州

の白骨溫泉にゆくかも知れぬ、

二四

八月廿五日、沼津町在上香貫より、島根縣、小豆澤錦潮樣宛（繪葉書）

お葉書、難有うございました、お變りなくお過しの由、嬉しく存じます、小生は五月以來の不快狀態がいまだに續いて、今までにない苦しい夏を送りました、少し涼しくなるのを待つて何處ぞ溫泉へ出かけるつもりでゐます、忙しいが然し無意味でないといふ樣な氣持で暮してをります、

若山牧水

二五

八月廿五日、沼津在上香貫より、大阪市、大島武雄樣宛（繪葉書二枚）

なにはなくたべむとおもふたべものも秋めくものか永くこもりし（繪葉書畫面に）

京都は眼違ひです、本尊は此處にしなびた顏をして閉ぢ籠つてゐます、まだあれからの健康が恢復せず、近く信州の白骨溫泉にでも籠らうかと思つてゐます、むく〱と肥えてゆかれる話が可笑しく美しく聞かれます、さうした豐かな淸らかな身體の幸福を決して手離さぬ樣にして下さい、呉々も祈ります、これはしんみにきいて下さい、

（2）いつぞや松江からのおたより嬉しく拜見しました、この秋、京都から松江の方へ廻るつもりでしたが、また延びさうです、でも、此頃頭はやゝ元氣で、歌も少しづゝ出來てゐます、いま、「大阪朝日」へ出すのを十首ほど作つてゐます、門前の稻田が穗を揃へたので、每日見てゐながらも驚いてゐます、夏ゆき秋立つ、事ごとに惶しい氣持です、

八月廿五日　　　牧　水

二六

八月廿九日、沼津町在上香貫より、信州、重田彌次郎樣宛（手紙）

三日前に小田原より柴山君來訪、今朝歸つた、一緒に少し飮みすぎたところ、てきめんに獰猛なる下痢を起し、坐つてゐるのも苦しい有樣だ、お葉書、只今着、難有う、白骨には多分行く、醫者に診察をうけてからにしたいと思つてゐるうちに、爲事山積、來客雲集、どつちもようせずにたゞあくせくと茫乎としてゐる、實に心苦しい話だ、君は大分おちついた樣だね、その樣子が見えて大に喜んでをる、實は君の流で、この休み中にひよつこりと來るのだらうと妻とも話して待つてゐたのだつたが、もう休みもなくなつたわけだね、白骨に行つたら一寸でも逢ひたいが、悲しい哉、飮めない、飮めなくて諸君に逢ふといふことはこれはかなり難行苦行で、とても小生凡夫の企及しがたき所かとも恐れてゐる、すると、默つて行つて默つて歸つて來るのだが、それも苦しいし、どうしたものかと思案に暮れてゐる、そのうち何とか解決着くことゝ思ふ、この夏は生來初めての苦しい三四ヶ月間であつた、もう少しこれが續くらしいが、困つたものだ、いづれ一度は遲かれ速かれ出會ふ事なので、諦めてもみるものゝ、とにかく苦しい、君は健康はどんなだね、心持の健康から推して身體もさうだらうとは想はるゝけれど、また意外に弱つてゐる樣にも受取れる、中村君にも無沙汰してのみゐる、越前君が中村君を訪ねた樣だが、君とは逢はなかつたかね、いゝ繪がかける樣か知らと氣になつてゐる、

身體がわるいと四方の景色も心ぼそく見えて、いづくも同じ秋の夕暮の感がひし〱と身にしみる、この有樣で白骨に行つてをれるかとも覺束ながられる、

歌は少しづゝ出來てる、君の方はどうだね、

阿母さん初め妹さんたちにも宜しくつたへてくれたまへ、

八月廿九日　　　牧　水

重田行歌樣

二七

九月三日、沼津町在上香貫より、松本市、綿引

惣吾樣宛（手紙）

綿引君、多分もう其處だらうと思ふ、とりあへず大急ぎにて、

小生、白骨溫泉へ三四十日籠らむとぞ思ふ、道順、溫泉のよしあし（君は夏、平湯へ行つたらう、すれば白骨から入つて行つたのだらう）その他、おほよその事を聞くにはきいたが、詳しくは知らない、知らしてくれたまへ、胃腸によく、風邪をひかなくなる、といふ效能は非常に僕の心を動かしたのだ、事實如何、

いま「創作」の選をやつてゐるが、これが濟めばすぐ出かける、折近し御返事を待つ、東京經由で行くつもり、東京では「下谷區谷中初音町三ノ廿五、大村松之助方」に一二泊する、七八日頃當地發のつもり、

としよりは氣ぜはしく、思ひ立つては矢もたてもたまらぬといふところなり、笑ふべからず、

九月三日　牧水

蒼梧兄

可哀相に、いよ〳〵飮めなくなりました、（封筒裏面に）

二八

九月十八日、猿橋附近車中より、長野縣、重田彌次郎樣宛（葉書）

昨日、沼津を立ち東京着、もう一晩遊ばうと思つたが、一向面白くもなささうなので今日十一時飯田町を立つていま車中に在る、同室に島木赤彦氏が新宿から乘込んだ、彼盛んに睡り、まだ何の話もせず、今朝、大村松之助方を立つ際に、君が春日の湯で書いた意味不明四枚續きの葉書を沼津から轉送して來て受取つた、今夜、何處かで降りやうか松本迄通さうかと今考へてる、

九月十八日午後三時　牧水

二九

九月十八日、車中より、東京、細野春翠樣宛（葉書）

ほんとに忙しい所を、今朝、難有う、いま、猿橋を通りすぎた、雨はずつと降りどほしだ、遙か下の谷が濁つてゐる、ひどく降つたと見えるね、車中、次第に空いて來た、甲府でまたこむだらう、赤彦は寢彥だ、

おねだりついでに、「日々」をもうひとつねだりたいなア、

十九日　牧水

三〇

九月十九日、松本市片端町洗心館より、東京、細野春翠樣宛（繪葉書）

和尙、例の如く黑く丸く大きく、その側にごろりところがりをりまをしそろ、

九月十九日夜　牧水

（綿引惣吾とのよせ書）

三一

九月廿二日、信州松本より、岡山縣、平賀春郊樣宛（繪葉書）

十九日に此處に來て、まだ白骨へよう向はずにゐる、聞きしにまさる難路で、郵便局所在地から八里もあり、集配が二三日目だといふので肝をつぶして此處で急ぎの用意を爲直してゐるわけなのだ、何だかいよ〳〵心細くなつてゐる、白骨で元氣が出たら平湯や上高地へ行つてみたいと思つてゐる、鞆の津よりのお葉書、いま、此處で受取つた、

九月廿二日　牧水

三二

九月廿七日、信州白骨より、東京、細野春翠樣宛（繪葉書）

斯んな山が前後左右を押し包んでゐるのだ、寂しいといふのはもう當らない、何だか變な氣のする樣な

ところだ、四軒の宿に秋蠶上りのお百姓がいま五百人から押し込んで、ます／＼增す一方だといふ、瞑目合掌、たゞじいつと湯に親しまうとしてゐる、

廿七日　　牧水

三三

九月廿七日、白骨溫泉齋藤本店より、北佐久郡重田彌次郎樣宛（繪葉書）

昨日、やつと、やつて來た、たいへんな道だつた、四軒の宿にいま五百人ほどの秋蠶上りがゐる相だ、綿引君が一緒に來て呉れてもう二三日泊つてゆく、何だかわけの知れぬいらだゝしさとやるせなさとが、ともするとべそをかゝせむ傾向がある、とにかく二三週間、眠つてゆくよ、

九月廿七日　　牧水

三四

十月三日、南安曇郡安曇村白骨溫泉齋藤本家方より、東筑摩郡、太田稻雄樣宛（手紙）

すつかり御無沙汰して、ほんとに一寸お詫も云ひにくいのを覺えますが、お許し下さいまし、いやな雨のみ續きます折柄、御年寄初め皆々樣、お變りなく御達者でございませうか、その樣にあることをひたすらに願ひをります、小生、去る九月廿六日より當所に參つて滯在して居ります、松本で一寸お伺ひしたいと思ひましたけれど、例の通り、二三人の人に圍まれ居りてその暇なく、ツイ失禮して素通りをして參りました、そしてこちらに來てみた上、お年寄お二人を是非こちらにお招きしたいと喜志とも相談して來たのでしたが、來てみますと、どうして聞きしにまさる路の惡さで、とても御老體には難儀だと思ひましたので、それも今日まで默つてをりました、然し、只今も湯の中に七十八になるとかいふ老人と一緒になり、かなり老衰してゐるにかゝはらず、あの山路を苦にもせずに越えて來た話を聞きました、この老人は伊那の人ださうです、さうするとおとうさまがたにも越えられるわけだといま考へてゐる所なのです、それに私の通りましたのは

先日の大暴風雨のあつたその朝だつたものですから（荒れた夜、稻扱に泊つてゐました）道が一層ひどかつたのです、いかゞでせう、一つ御奮發の上、お揃ひでお出かけになりませんか、いつもはこの宿だけにも三百人からの客（たいていお百姓ばかりの由）が昨今は押掛けるのださうですが、今年は雨と不景氣のため漸く百人を出たり入つたりで、案外に靜かです、私など、來た日から昨日まで桐の間とかいふ當家では第一の部屋でせうが、そこに獨りで威張つてゐました、今日は自分から好んで、ずつと溪に向つた靜かな部屋に移りました、他は多く合客の樣ですけれど、私が斯うして部屋をとつてゐますから、その御心配はありません、お湯はほんとに效能があるらしく、私にも信ぜられます、近くの伊豆に無數に溫泉のある中をはる／＼斯うして出かけて來た甲斐もありさうに思はれて喜んでをります、若し、おとうさまたちがおいやでしたら、兄さんたちがいらつしやいませんか、姉さんなどには必ずいゝと思ひます、たつておすゝめ申します、小生は今後なほ十日ほど、或はもう少しも居てゆきたいと思ひます、いろ／＼と爲事を持つて來てゐますので、さうたいくつでもありません、たゞ郵便の不自由に少々弱ります、島々局からの配達ですから七里ほどもありませう、ですから雨のひどい日など無論絶緣です、歸りには、人夫のいゝのがあつたら此處から上高地溫泉に出、飛驒の平湯溫泉に廻つて高山町に出たいと考へてゐます、然し、長野市に短歌會を開くとかで、騷いでゐますからそれに出なくてはならぬ樣になればまた松本へ引返すことになります、さうすれば一寸でもお目にかゝりに參ります、その歌會の相談に今日か明日中村柊花がやつて來る筈ですから、來た上でどちらかきまります、小生自身は飛驒に出たい希望です、

邦ちやんも元氣でせう、旅人の奴、このごろなまいきになつて、私の居る時ですら書生をだましては活動だの散歩だのへ出かけてましたが、私の留守中、いつそうさうでせう、邦ちやんも此處に來るといゝな、山ぶどうやあけびやたくさんあるよ、

何だか、たくさんお話があるつもりで筆をとりましたが、とつてみると何だかあわてゝ何も書けません、とにかく、右、おすゝめのことだけにして御返事を待つことに致します、

十月三日午後　　牧水

太田稲雄様
御一統様

三五

十月八(?)日、大野川より、埴科郡、中村柊花様宛（葉書）

梓川かや大野の川か合ふた所で別れます
水になりたやそば屋の前の流れ流れて稲扱へ
きけばきく程そば屋の前の水の流れが身にしみる
飲むはおささか涙のつゆか焚火煙りて目が開かぬ
飯の茶わんとおつゆのわんと二つ竝んでわしやビール
ビール〳〵とバカにはするな乃公はビールで泡たたぬ
たたぬ思ひをビールに寄せてせめて泡でも見る氣持
ちよいと前見りやきのこの肴きのこ鹽漬酒ほしや
お前ビールかわしややぱ徳利とくりとくりと寝たいかい
お前柊花か今夜の泊り稲扱あたりかねたましや
泊り泊りで日を夜を暮す今夜泊りは大野川
大野川かやそちやうらさびし酒のないとこ溪の音
宿の前ではをんなの聲よなんでか知らぬが身にしみる
わたしやおまへとをかしい因果ともにゐなけりや氣が濟まぬ
（註、一本のビールのみにて宿に酒のなかりしなり）

三六

十月十四日、信州白骨より、東京、細野春翠様宛（手紙）

細野君、

新聞を毎日と、おたよりを度々と、誠に難有う、ことに新聞がどれだけ樂しみだつたものか、堆く重ねてあるそれを顧みて感ことに深い、

いよ〳〵明日、此處を立ちます、上高地に登り、飛驒の平湯に越え、そこから富山へ出て、廿三日長野市の歌會に出席、木曾を經て沼津へ歸ります、岐阜縣中津町といふので歌會を何とか云つて來てゐるので都合では出ます、すると沼津は月末でせう、首尾よく一月半の旅になりました、

恥しいことに、樂しんで來た心のおちつきをばやはり此處でも味ふことが出來ませんでした、これは餘りに爲事を持ち込んだ計畫の失敗もありましたが、とにかく心細く思ひました、しんからの性根がすわらないことには何處に行つてもこれだらうとつく〴〵思ひました、

歌も出來なかつたが、自然の大きさをば外觀だけでもかなり眼にしたわけです、山の大きさ森の深さ紅葉の獰猛さ、ことに二三日前からの月はすてきです、これはもう二三日山の中で見られませう、

身體には確によかつたでせう、とにかく右のこれからの豫定はかなり冒險なのですが、それを平氣で企つる樣になつたゞけでも自ら驚いてることです、

東京の會合もいゝが、君が主となつてやるとなると、苦勞性の君だけにひどく氣を使ひはせぬかと思ふ、やるといふなら和田君に相談してもいゝし、一月には村松君も東京にゆくでせう（十一月からゆくかも知れない）から手心の知れてる同君と共にやるもいゝと思ひます、然し、考へてるほど面白いものでもためになるものでもないかも知れない、

それより、（といふより、先づ當然にだ）自分自身のことをもう少し獨りでゆつくりと考へる方がよくはないでせうか、君の新作を見たが、どうもまだ「枝葉の作」を出て居ない、腹から呼吸する深さ大きさがない、口さきの小さな〳〵聲である、あまり眼をぱち〳〵さすることをやめ、じいつと腹に力を入れ

る氣持を味ふことに努力してみませんか、淸らかでもあり、こまやかでもあるが、まだ一人前の作になつてゐないのを惜む、つまり、腹からの聲でないからだ、然し、こんなことは幾ら云つても同じことで、つく〴〵自分自身でその境地に感動しないことには駄目だとも思ふが、とにかく、書きつけておいて見ます、ひとにたよらず、自分で自分の作を身振手振拔きにしてじいつと見つめて御らんなさい、

十一月には一寸上京することになりませう、それでしたらまたその時ゆつくりお目にかゝります、

十月十四日　　牧　水

春　翠　兄

三七

十月十四日、白骨より、松本市、綿引惣吾樣宛（繪葉書）

和倘よ、僕明日こゝを出立、燒岳に登り（笑ふな〳〵）上高地に下り、平湯に越え、高山を一寸のぞき、轉じて富山に廻り廿三日長野に行かむとす、和倘樣と善光寺で逢ふ、また緣ならずや、

十四日夜　　牧　水

三八

十月十五日、上高地より、埴科、中村端樣宛（繪葉書）

あゝ和倘よ、なんと四山の紅葉がもう散つたではないか！（繪葉書畫面に）

わが命かなしくもあるか天地のかゝるながめにめぐりあひつつ

またや來むけふこのまゝにゐてや行かむわれの命のたのみがたきに

明日、燒岳に登り、蒲田に下り、平湯に廻らむとす、合掌禮拜、

十月十五日　　牧　水

三九

十月十六日、信州上高地より、岡山縣、平賀財藏樣宛（繪葉書）

昨日、白骨から此處まで來た、自然の廣大さ微妙さの前にはたゞもう瞑目し慄身する外無いのをおもふ、

今日、燒岳に登り、蒲田峠を越えて蒲田に出、日があれば平湯までゆく、

久しぶりに昨日は僕泣いた、

またや來むけふこのまゝにゐてやゆかむわれのいのちのたのみがたきに

十月十六日朝　　牧　水

四〇

十月十七日、飛驒平湯より、岡山縣、平賀財藏樣宛（繪葉書）

昨日上高地を立つて燒岳に登り、すつかり道を迷うて半死半生の目にあひ、蒲田に泊るつもりで降りて來た所洪水に一切流されてあとかたなく、福地の湯といふ村上近くへ辿り着いた所、これも完全に洗ひ流されてゐた、止むなくコップ酒に假勢を張つて此處まで登つて來た、身體が變になつて眠れもしないが、何だか無暗に心細いので、けふ急いで高山へ出ることにする、

十月十七日午前三時半　　牧　水

四一

十月十七日、飛驒平湯船津屋方より、松本市、綿引惣吾樣宛（繪葉書）

君にいつぞや蒲田の湯といふのゝ繪葉書を見せて貰つた時、嗚呼氣に入つた所だ、が、乃公の一生にや緣のない所だと諦めて見たのであつた、昨日、燒岳で命を拾ひ（この遭難談筆紙に盡せず、後日面晤を待つのみ）其處を飛驒に下つて蒲田の湯といふがあると老案内者がフイと云つたのだ、ヤッと思つたね、一議に及ばす蒲田泊ときめて大森林の中をえんやらやつと下つてゆくと、これはまた何のこと、昨年の洪水にぺろりと流れて影も形もなくなつてゐた、泣く〳〵月を踏んで此處まで來た、

十月十七日朝五時　　牧水

ナンダカココロボソクテカナハズ　ケフスダタカヤマニクダリマス（繪葉書畫面に）

四二

十月三十日、沼津在より、岡山縣、平賀春郊樣宛（繪葉書）

平賀君、昨日、歸つて來た、飛驒から越中に歩いて再び信州に入り、木曾を經て來たのだ、隨分無理をして來たが、割に元氣の樣だ、これで持ち直してくれると難有い、歸つて見ると富士が眞白で、名物の西風が家を搖つてゐる、何だか、これもまだ旅の心地だ、

十月三十日　　牧水

四三

十一月十九日、沼津在上香貫より、松本市、綿引惣吾樣宛（手紙）

拜啓

あゝ云つて來たのを押切つてやつては大闘君に具合がわるい樣にもあり、さればとて此際やめてしまへば社の加藤君に對して濟まぬし、ひどく迷つてゐたが、一昨日、とにかく當場だけ此儘續けることにして後また善後策を講ずるもいゝと、その旨、加藤君の方に手紙を出したのであつた、引違ひに昨日君から手紙が來たのだ、チトめんだうにはなつたし、これからは怠けるわけにゆくまいとおもふ、厄介なことになつたものだ、

君の健康はどうだね、僕はやはりいけない、よく〳〵根からいたんでるんだね、歸つて四五日元氣だつたが、それがたつと急にまた腹から頭と、白骨行以前と同じい病狀になつて、それに飛驒からの疲れも加はり、すつかり寢込んでしまつた、强ひて起きても何一つ手を出すのが苦しく、あたら新年號の書入時を原稿紙一枚書かないで過ごしつゝある、白骨はよかつたのだが、そのあとがいけなかつたのだね、來年はこつそりと白骨だけにして一と月も入つ

來たいとおもつてゐる、

君に一つすまぬことをした、君から借りた磁石ネ、あれをば常に湯呑の中に入れて腰に結んでおいたのだが、名古屋驛の乘換で非常に混み、人に押されてその紐が切れたと見え、汽車が出て麥酒を飲まうと腰に手をやるとそれがない、湯呑はとにかく磁石は全く惜しいことをした、君には特に幾つかの思ひ出のあるものだらうと甚だ濟まぬ氣がしてゐる、その後名古屋の友人に驛に問合せてくれる樣にと手紙を出してあるけれど、返事がない、まづ、無いものと諦めねばならぬかも知れぬ、とにかく、許してくれたまへ、それからアルプス案內、地圖二三枚を忘れて持つて來てゐる、これはこの暮御來遊の時にお渡しする、なほ、拜借物もこれから一つ大馬力で諸事萬端の穴埋工事をやらうと思つてゐるから、何とかなるだらうとおもふ、これも待つてくれたまへ、

君のうちに僕の「くろ土」を落して來はしなかつたらうか、君は別に持つてゐたので、置いてくるわけはないが、うろたへて忘れて來はせぬかとおもふ、いろ〳〵書き入れのしてある奴が見當らないので、いまうろたへてゐる所だ、白骨には持つて行つてゐたね、さうでなかつたか知ら、

僕が不景氣なため一家その影響を受けてゐる傾向はあるが、とにかく病人は僕ばかりだ、

洗心館一同へよろしく、

牧水

蒼梧兄

いつぞやのシイラは手料理だつたのだ、まづい魚だけれどね、

四四

十二月一日、沼津在上香貫より、東京市、山崎斌樣宛（手紙）

十二月朔日　　牧水生

山崎君、タラコン湯、難有う、早速用ゐてゐるが氣のせゐかたいへんいゝ樣だ、早速あとを註文して暫

く續けてみたくおもふ、若しほんたうに利いて吳れたらこの上ない話だ、藥を煎ずる匂ひも丁度昨日今日の季節にふさはしい、庭は全く落葉し、毎日一羽か二羽鶲の鳥が來てあそんでゐる。

めぐりはその靜けさだが、心中、甚ださうでない、布團をきてみたりはいでみたり、一日中家のうちをうろつく姿はわれながら淺間しい、そんなで、「二年間」もまだ讀み得ない、机のツイ手近には置いてゐるのだが、しつくりと讀み入る氣にようならぬのだ、何しろ、少し無理でもこゝ一二週間のうちに何か稼いで東京に出かけて來たいとおもつてゐる、その時は一寸でもこつそりと何處かで落ち合ひたい、無論いやな用事に出てゆくので、何を話す氣にもなるまいが、怪しきつらをつき合はすだけでも氣が晴れるとおもふ、行くのは確實だ、時日は一寸云へない．

難波英夫君といふ人が大阪に行つてるのだね、昨日、山貫氏とよせがきをよこした、君と僕とを大阪に呼びたいと書いてあつた、福永君はどうしてるか知らないか、けふの「萬朝」に『自由』云々と出てゐたが、何の雜誌だ、

いま、歌のノートを出して嘆いてゐる所だ、今年は全く何もしてゐない、だん〳〵淋しくなるね、そんなことが、（初めに追白）

四五

十二月七日、沼津町在上香貫より、長野縣、重田彌次郎樣宛（手紙）

いつぞや、白骨から投じた藥のきゝ目が意外の邊に及んだらしいのを見て竹庵老悉く照れ氣味などでもあつた、然し、その後、如何、無事ならむことを祈る、

今年は僕は全く駄目であつた、何もようしなかつた、散步に出るにも、柿一つ喰ふにも五分十分と身體の具合を考へてからとりかゝる樣な具合になつては全くなさけない話だ、然し、この病衰も僕の樣な無反省がちの者にとつては、强ち無意味ではなかつた樣だ、寧ろ、難有かつた出來事かも知れない、昨今、毎朝水を浴びたり、毎日三度づゝかけ足をやつたり、パン、麥飯をくつたりして、精々身體を養ふことに努めてゐる、うまくゆけば來年は勉强出來るでせう、ぼんやりしてゝは全く相濟まないわけだ、

君の樣子もよく聞きたい、

北佐久新聞の選をツイ何處ぞにしまひ忘れて弱つてゐたが、いま本箱のうしろからその日の郵便物一切が出て來た、早速見てしまつたが、どういふ風に選むのかよくわからず、若し、一二三等などつけるのなら君の方でこの中からつけてくれたまへ、このまゝでよければ社へ轉送方賴みます、

この三四日、急にこの地も寒くなつた、君の方はさぞだらう、

十二月七日　　　　牧　水

行　歌　兄

もう紙がないのだよ、

四六

十二月十五日、伊豆と駿河の界より、長野縣、中村柊花樣宛（葉書）

餘りに久しくうつくつしてゐるので、けふの日和を幸ひに、ぶらりと出て來てみた、いま江の浦にゐる、日がうす赤く入江にも松山にも枯草の野にも照つて、淚など、出かねまじき心持だ、これから三津まで步き、午後の發動で歸ります、いつぞや、柿を難有う、まだ珍重して四つ五つ殘つてゐる、

舟一つありてこぐみゆ松山のこなたの入江藍のふかきに

海人の家に飼ふ者あらし荒濱の冬枯の木に鳩のあそべり

十二月十五日午前十一時廿五分　　　　牧　水

四七

十二月十七日、沼津町在上香貫より、岡山市、

三浦敏夫樣宛（手紙）

思ひがけぬ結構なものをまことに難有う、早速やつて見たがまことにあたゝかい、これならばさすが小生の脚も痛まない樣です、チビのも難有う、これは妻が大喜びでした、よくお禮を云つて呉れとのことです、

今年は一切小生には不景氣だつたので、すつかり三猿主義をとり、有無なく過してしまひました、身體は丁度さうした時期に來懸つたのでせう、實際自分でも心細かつたが、そして努めて用心をも始めましたが、どうやらそのいけない盛りをばいくらか通りすぎた樣に思はれます、この上、ひどい失策さへなくばまた或る時期の健康期に入るかと思はれます、なるほど恥しいほど無茶をやつて來ましたが、これもやはりやるだけはやらないと納まらないと思ひます、これでも幾らかづゝはその度合が少くなつて來てゐますからね、さう笑はずに下さい、それよりも小生からは君の用心すぎる不安さを少々彌次りたい氣がします、人間の各細胞はすべて生存慾を持つて生きてゐるのだからすてゝおいても大抵のことは各自獨りで直つてゆきますよ、それをあまりにあれこれとそれらの上に交渉してゆくと終には各自が持つ折角の機能をどうかするとなくしはしないかとおもふ、兎に角、氣の疲れるだけでもひどいものでせうよ、少し牧水流にのんきにもおなりなさい、

でも、昨今はいゝのでせう、いつぞや溫泉の話がありましたが、あの希望は今でも保留されてありますか知ら、それだともう少し詳しくもう一度きかして下さい、今度は怠けずに返事します、昨日もあまり久しくうちにうつくつしてるので、急に一人でふらりと散歩に出かけ、江の浦といふ此處から二里あまりある入江まで歩きました、江の浦から小さな岡を一つ越すと其處に長岡溫泉があるのです、其處でおひるをたべたいと思つたが、一風呂浴びればもう屹度歸るのがイヤになるに相違ないと、我慢してゆきませんでした、長岡から半里で古奈（コナ）、二里で畑毛、四里ゆくと修善寺などの溫泉あり、修善寺より二里吉奈（ヨシナ）、吉奈より半道船原、一里で湯ケ島、木立等がありま

す、こんな話をしてゐるといまにもぶらりと出かけたくなる、いつかほんとに出かけて來ませんか、はつきり知らなかつたが、奧さんが來られたでせう、よろしく御紹介をたのんでおきます、そのうち、お目にかゝりませう、お父さんたちも東京で斷水のうき目を見られたわけですね、これから一月が東京は一番寒いのだが、風邪など大丈夫ですかね、

何かとこれで用事多く、ゐたり立つたりで、おちついて書いてもゐられない、とりあへず右にとゞめておきます、

十二月十七日　　　　牧　水

敏　夫　樣

四八

十二月廿九日、沼津在楊原村より、東京、細野春翠樣宛（手紙）

細野君、何ともお禮お詫の申上げ樣のないのを感ずる、餅は一昨日屆いた、實にハヤどうも叩頭百拜だ、難有う、そして、許して呉給へ、

五日に來給へ、東京の連中も二三人來るといふ、中野村松門林、それに横濱からも來るだらう、來る樣にいま云つてやらうと思つてゐる、少しごたつくが、君だけ一日早く來てゐるのもいゝ、惣吾和尚が四日に來ると丁度いゝぢアないか、右の連中のことはこの手紙がついて一日ほどして本鄕森川町四七羽州館（高等學校の向側の横丁）に門林君をたづねてみるとわかります、

君は例の講習會かね、

とにかく、右だけ、

何だか忙しくていけない、

廿九日あさ　　　　牧　水

細　野　兄

大正十一年

一

三月十三日、沼津在上香貫より、三河國、金澤修二樣宛（葉書）

歸り早々さう淋しがつて、ゝは爲方がありませんね、大に元氣をお出しなさい、久しぶりの歸省で、ことに時季はいゝし、いろ／＼心を洗つてくれるでせう、靜岡は面白かつたらしいですね、いかにも小生殘念でした、小生相變らず氣ばかりあせつてその實、何も手につかず、ぽかアんとしてゐます、でも、今朝一時より起床、いま漸く湯ヶ島の歌の中から山櫻だけ廿五首を選り出して淸書しました、「改造」に送ります、六月號に多分間に合ふことゝおもひます、出たら見て下さい、ついでに「黑土」以後の作を數へてみましたら四百五十首になつてゐることを知りました、

一昨日午後パリーアンに服部さんと飮み、その夜更らに塚田ドクトルを迎（加?）へて「まつの」で例のごとくになり、一時すぎかへりました、

十三日朝　若山牧水

二

四月四日、湯ヶ島湯本館より、沼津、金澤修二樣宛（手紙）

よかつたら、やつて來ませんか、大仁發當地行の定期自働車が大仁を前十時半と後二時半に出ます、（一圓五十錢）馬車は大抵汽（電）車のつくごとに出る樣です（七十錢）、

靜かなだけですが、まだ二三日は山ざくらの名殘もありませう、宿料は僕もまだきいてみませんが、滯在となると三圓だとおもひます、一日二日ならば小生御馳走致します、部屋はいま古いけれど靜かな離室があいてる樣です、

あまり、おすゝめしてもどうかと、とつおいつしてゐたのですが、とにかく、右、小生の意見だけを申し述べます、さうしないと、どうも氣持がわるいからです、

それから、服部氏への官報が若し急いで御入用でし

たら土肥館方同氏宛打電していたゞく樣、たのんでくれと同氏からたのまれてゐたのでした。

けふの郵便の時間までにと急ぎました、

四日　牧水

修二樣

チエホフ、一册よみたし、

三

四月四日、伊豆湯ヶ島湯本館方より、東京、和田山蘭樣宛（手紙）

和田君、此處に來ていつかもう八日たつてゐる、大に勉强するつもりでいろ／＼背負ひ込んで來たのだが、まだ何一つようせずにをる、一つは齒と頭とが二三日つゞけて痛んだのだ、

君の例の出版とその準備との結果はいまどんな風になつてるね、大に力を入れねばならぬわけだし、また、入れたいとも思ひながら例の無精と、折惡しく風邪だつたりした事から、殆んどまだ何の手出しもせず、どんなにか、たのみにならぬ男と君を落膽させてるだらうと甚だ心ぼそく心苦しく思つてをる、とにかく、目下の成績を聞かしてくれたまへ、いま、重だつた人——と云つてもどうしても社友になるのだが、——の宿所すらも暗記してをらぬので、沼津に歸つて、名簿から書きぬいて送ります、（忘れぬうちに書いておく、芝區田村町七、郡山幸男君がこの間沼津に來たので、早速、君の會に一口入れておいた、繪が出來たら右へ宛て一枚送つてくれたまへ、規則書を添へておけば金はすぐ來ることゝおもふ、忘れぬうち直ぐやる方がいゝナ）

僕も君と同じく（といふうちにも、君のより少し大望なのだ）それ式のことをやらうと實は思つてゐるのだ、小さな家をね、出來たら香貫へ、それが出來なくともせめて裾野の中へなりと一軒建てたく、短册半折會といふ風のものを起さうといふのだ、その準備に近々上京したいとおもふ、幸ひ廿三日の會があるので、その時にその用をも果したく思つてを

る、それについて、君にもいろ〳〵聞きたいことがあるのだ、主として筆や墨のことについてね、泥縄と笑ふ勿れ、何としてゞも一軒こさへないことには不安でならなくなつたのだ、いま、あの別莊を他に賣られてみたまへ、(持主が失敗つゞきらしく、そのこと、或は近く實現か) 沼津には全く一軒の貸家もないのだからね、家族と家具とを背負つて四十づらさげて路頭に迷ふのは、もう考へるだけでも苦しい、恥しいを忘れて今度の企ての遂行を期さうと思ふのだ、

廿日ころに出られたら、こつそり二人だけくらゐで一度逢ひたい、會がすぎては、駄目だとおもふ、一晩、つぶす心算をしておいてくれたまへ、

逢ふとなると、何も、もう書くのがめんだうになつた、とにかく君の方の事業の進行狀態を聞かしてくれたまへ、僕はまだ十四五日まで此處にゐたいとおもつてる、

身體はどうだね、咽喉は？

けふはいゝ雨の日だが、何だかむやみに淋しい、

それで、一日また何もせず、ぼんやりと雨のみ見て暮した、すてきだつた櫻が今日はもう褪せて見ゆる、何といふ速さだらう、

四月四日午後五時　例の部屋で

牧　水

山　蘭　兄

四

四月六日、伊豆湯が島湯本館より、東京、山崎斌樣宛（手紙）

赤ちやんが、さうだつたのか、非常に急だつたぢアないか、矢張り弱かつたのだね、ことに阿母さんはそれだけに哀傷深いことゝおもふ、君より、よろしくつたへてくれたまへ、君のそのしよげの原因はどこにあるのだ、身體でもわるいのではないか、

廿八日來今日まで、實にノンセンスに過してしまつた、酒を八升か九升飲んだことゝ、六七人の客を送迎したことゝが事業だつた、それから齒痛と頭痛とアンマと等々々、

とにかく、お手紙にある通りのものを書きませう、

但し、いま、時間きりの選を二つ三つ、至急果さねばならずにゐるが、然し、どうにかして書かずばなるまい、夜業でもして書く、みな、君あてに送ればいゝのか知ら、

幸ひ、昨日あたりから齒と頭の痛いのは、輕くなつた樣だ、

土肥に行つた方がよかつたかも知れぬ、ハアさんは極めて幸福らしい、昨日、塚田醫師がひよつこりやつて來た、もう少しで、沼津から一人二人連れて來る所だつたさうだ、あぶなかつたをしかつた、

六日　　牧　水

斌　樣

五

四月六日、伊豆湯ヶ島湯本館より、東京、細野春翠樣宛（手紙）

せつかく遠いところを來ていたゞいて、何彼と、甚だ飽氣ないことでした、ごめんなさい、野坂君にも君よりよろしくおつたへおき下さい、

でも、あの時は、實はいちばんいゝ時であつた、もうかんじんの山ざくらがすつかりだめになりました、河鹿は頻りに鳴いてますけれど、ね、

あれから今日まで・齒が痛み頭が痛み、さいなんでした、幸ひに、もういゝ樣です、陽氣のせゐだつたでせう、

十二時に間に合へて結構、馬車屋氏、よほど嬉しかつたのでせう、

寫眞は出來たか知ら、折返し、送つて下さい、出來のよしあしより、その場を寫した文章の樣な氣持で、頻りに見たい、橋のあたりのも、部屋のなかの宿醉づらも、

今日から、ぼつ〳〵寫事を始めました、十四五日まではゐることになりませう、

二十日には是非出たい、

ゐる間に天城の山を歩き廻つて文章と歌とを作つてゆきたい、出來なければ嘘だとも思ふし、恐ろしく

もある、
ケツノアナの松之助氏はあの葉書を見て昂奮、すぐこゝまで飛びつく所だつたさうですが、フトコロ寒くやめにけるかもだつたさうです、いま、葉書が來ました、
久しぶりに武蔵野の若葉を近く見られるとおもふと、幼くも心が躍る、一日、ぶらりと多摩川べりでも歩きますかね、
君、「住宅」といふ雜誌の三月號（たしか文化村號とか云つたとおもふ、ヘクラン會の文化村の家々の設計圖のみな出てゐるもの）が古本屋か雜誌屋で見附かつたら送つてくれませんか、いろ〳〵空想したいから、
では、左樣なら、
六日、淋しい日暮、　　牧　水
春　翠　樣

つばくらめひるがへりとぶ谷あひの山ざくら花
は褪せにけるかも

日は雲に影を浮かせつ谷むかひ山のなぞへの山
ざくら花

六

四月八日、伊豆湯が島溫泉湯本館方より、埼玉縣、山田子之吉樣宛（繪葉書）

榎本君と君との會合を、その各の歌で想像して、面白く思ひました、
新月が瀬といふほど梅の多い所ですか、どの邊になります、いつか小生も行きたいものです、秩父寄りの方ではありませんか、
小生暫く當所滯在、いま「創作」の歌を見てゐる所です、天城山の麓の深い溪間です、
四月八日　　若山牧水

七

四月十一日、伊豆湯が島湯本館より、東京、山崎斌樣宛（手紙）

山崎君、
歌十首、文章十四枚を、別封書留便で送る、歌は出來てゐたのから還ればよかつたが、文章の方は昨日の朝は三時から起き、今朝はかつきり十二時に起きて書くといふ有樣であつた、もつとも、このほかのものを最初書かうとして苦しんだのであつたが、君の手紙に新綠號とあつたのを思ひ起して書き直したりしたからなほ時間が、かゝつたのだ、久しく書かずにゐたので、初め甚だ調子がとれなかつた、
然し、書きあげてから見るとこの種のものとしては相當には出來てゐるとおもふ、どうか、このあとに書く「天城山の記」をよく書きたいものだ、頭痛に病んでゐる、とにかく一兩日遲れたゞけで送り屆け得たことを喜ぶものだ、
君の土肥勞れだか沼津づかれだかは、直つたかね、赤ちやんのことでまたわるくなりはしないか、細君は大丈夫か知ら、
僕の今度の入湯は甚だ不景氣で、却つて頭を病みに來た樣なものだつたが、歌だけはどうにか出來た、これから暫くの間、うんとよくて、今までのとりかへしをやつてくれるとありがたいと念じてゐる、
今日送る分の稿料は、後で送る「天城山」のゝと一緒でいゝ、どうせ宿に拂ふだけなのだから、君の方は、いま何と何をやつてゐるのだ、かなり忙しくはないか、
四月十一日午前四時二十分　　若　山　生
山　崎　兄

八

四月十二日、湯本館より、東京、細野春翠樣宛（葉書）

天金を二時間かゝつて探した人種よ、一體、おまへさんの鼻はどこについてゐるのです、ナントいふが實はオレも天金がくひてえ、けふはネ、こんないゝお天氣でせう、だから、これから天城山のてつぺんに在る青篠の池といふに登ります、何しろこのお天氣でせう、先づ前祝ひに一杯やつてますの、そして

もう何だかフラフラしてますの、これから三里の登りは、それこそ羽化登仙といふ奴さ、ソネメ〳〵、

十二日未明　　湯本館族

九

五月二日、沼津町在上香貫より、東京、細野春翠樣宛（手紙）

細野君、ひどく君をおびやかし、合せて野坂家を騷がせ、流石にキマリのわるい氣がしてならぬ、遲ればせながらお詫びとお禮とを申しあげます、僕ももう少しおちつかぬと困るのだが、少し動くと忽ち自身のみならずその周圍をも動搖させるのが癖で、その癖未だ甚だ拔けず、面目なく思ふ、いつまでも子供でゐるのか知らとなさけなくもなる、

歸つた翌日、山崎の家族に僕の家族全部、それに近隣服部家の夫婦とを合せた一大隊をソシキして、長岡溫泉に繰り出し、一泊、翌日古奈溫泉へ廻り、僕自身は全然泥のごとくに勞れて、歸つて來て以來、枕についてゐる、何しろ、子供ばかり半ダース、三つの家族が初對面同志といふので、引率者の苦勞はとても話の外であつたのだ、

それから、この次ぎの金曜に君の來るといふことね、あれをもう一週間延ばして貰へまいか、實は、右に云つた服部さんといふのが、（四月號短歌雜誌に僕の書いてる）去る廿三日に結婚し、その披露式をこの六日にやるといふのだ、それも一寸風を變へて園遊會式にし、彼自身の庭だけでは足りまいから僕のをも貸せといふのだ、事が事で斷るわけにゆかず、承知をしたが、スルト、その日曜一日君との會談が甚だ落着かぬものになるおそれがある、（箱根越は當然ダメだし）、いつそのこと、もう一週間延ばして貰ふと、そんな邪魔がなくなるわけだ、君の折角の氣持をまごつかせて誠に濟まないが、惡しからず聞いてくれたまへ、但し日曜を棒に振る氣ならば、今度でも無論いゝのだが、少し惜しいぢアないか、とにかく、右、我儘を云つて見る、

野坂君には別に手紙を書かない、君から呉々よろしく傳へておいてくれたまへ、奧樣も、アトでさぞ勞れたゞらうと思ふ、

二日　　牧水生

細野君

一〇

五月十六日、沼津在上香貫より、三河國、金澤修二樣宛（繪葉書）

急に水邊の杜鵑が聽きたくなつていら〳〵してゐた所へ細春がやつて來たので、沼津の暗い部屋で飲んだり喋舌つたりするよりいゝだらうで、出かけた箱根めぐりは大當りでした、最初の目的も完全に——十五日午前二時三時の月明に啼き渡る風情と云つたらなかつた——湛能したし、そのうへ、湯の花澤といふ仙境を偶然枯野の果に見附けたりして、ヨテイ通り、昨夜十時に歸りました、

五月十六日　　若山牧水

一一

五月十六日、沼津在より、三河國、金澤修二樣宛（繪葉書）

いゝ繪葉書を澤山にありがたう、いかにもその川が淸らからしくていゝ氣持でした、小生も君のおいでがないのでこの頃、まことに心許なく思つてゐます、町に行つても爲樣がないし、せい〳〵庭いぢりなどやつてゐます、鳳來寺山にも行きたいが、今はチト無理らしい、

十六日夕方　　牧水

一二

五月廿四日、沼津町在上香貫より、兵庫縣、野元純彥樣宛（手紙）

さあらぬていにて、一昨々日一昨日をばすごしぬ、たまらずなりて、昨日、停車場に出かけぬ、手荷物のところにゆけば、五升樽では重いから多分貨物でせうとかゝりのひげ云ひける、沼津驛の貨物場は、げにあやしく暗きところにありけるが、——そのとき、おやぢは、せがれ第一號をともなひけり——すこし、のぼせて——むろん、すこし飲みてぞ出かけ

たり、ゆふがたなりければ——やみくもにそのアヤシキ貨物係場に入り込みゆけば、忽ち、眼前に一個の樽をぞ見出でける、コイツだなとおもひながらに、エー、酒の五升樽が來てる筈ですが、と云へば——どうも、丁度その時、その樽の話がみんなの間に出てゐたらしい、——そこにつどへるみんなが、にほやかなる笑ひを發して、エ、いま、丁度ついたところでした、と云ひける、どうでせう、明日屆けて貰へますかな、エ、エ、よろしうございますとも、早くお屆けします、楊原はどちらでしたな、と、デスクの向ふの鼻低がニヤリ笑ひき、上香貫だよ、渡邊少將のとなりだよ、とそのばの若いのが云つた、——アトで、うちに歸つて訊いたらこの若いのは、もと、うちにゐた女中の弟らしい——ハ、ア、さうですか、よろしうございます、明朝、早速お屆け申しますと鼻低が、テイネイにおじぎをしました、たびととぼくするは、それらの光景に限りなく滿足して、引上げたが、サテ、今朝だ、エライ、あらしだ、この雨風にはとても持つて來まいな、どうしようかナと、オヤヂは、茶の間と離れとの間を、行つたり來たり、さればとて、サイクンに云ふべき限りにもあらず、ひとりひそかに苦惱をぞ致しける、ところが、夕方になると、すこし、晴れた、これでは屹度持つて來るぞと下待ちに待ちこがれたれど、やつぱり來らず、漸くにぢれだし、笹田君濟まないが、君、一寸行つて持つて來て呉れ、ナアニ、歸りは、俥でかけつけろ、

其處で、いよ〳〵、樽は僕のうちに來た、來てのち、いろ〳〵の事あれども、あまりくだくだしければ略しぬ、とにかく、いま、このごとき氣分にて飲みつゞけをることを此處に書きしるすのみ、

感謝、々々

牧水

（喜志子、旅人、登美三とのよせ書）

一三

六月四日、富士裾野須山村より、福岡市、坂本靜子樣宛（葉書）

用事のみ書きつけます、御免なさい。今月から（つまり六月號から）歌を出來るだけ多く送る樣にして下さい、いまゝでの樣に二十首と限らずに。そして、六月號分のはもうお送りになりましたか、その後、また出來ましたらすぐ追送して下さい、この十二日までに着けば結構です。

小生はいま、富士の裾野の大野原の中を歩き廻つてゐます、今夜の宿のツイ鼻さきに例の美しく清く高い山が聳えてゐます。

六月四日　若山牧水

一四

六月四日、野中なる須山村清水屋より、沼津、金澤修二樣宛（葉書）

今朝、例の、ふらふらとした氣持から、フイと草鞋をはいて斯んなところへ出かけて來ました、裾野驛から埃の立つ夏草の中の道を片登りに五里登つて、一昨年の晩秋、大雨の晴れた夕方に凍えて泊つた宿に、汗びつしよりで午後の二時につきました、今夜の月の富士と、明日の明方のそれとを見るのをたのしんでゐるところです、愛鷹の裏山が、窓前に青んでゐます、不取敢一杯の圖、

四日夕方　牧水

一五

六月十二日、沼津町在上香貫より、信濃、荻村久吉樣宛（手紙）

思ひがけない大好物を、まことに難有うございました、こちらからはまことに失禮のみ致してをりますのに、いつも何彼とお心にかけられ、おたより、其他およこし下され、ありがたくもまた面目なく存じます、椀屋のかげ椀とかいふたとへの筆不精のいたすところと、お見過し下さいまし、英雄君にも無沙汰してゐますが、お變りないことゝ存じます、お言葉にあまえ、どうかしますと、ひよつこりとおたづねするかもわかりません、昨年は一年中、病氣ばかりしてゐましたが、この二月ころから非常に丈夫になり、自分にも珍しい元氣でゐますので、この

夏は是非御嶽登山など致したく考へ居るところでございました、また、こちらの海岸もわるくありません、新しいおさしみをたべに一寸でもおいで下さいませんか、家内どもゝそれを申して、お待ち申し居ります、汽車の時間も、たいしたことはありませんのですから、ホントに是非お出かけ下さいまし、近くに二三ケ所の溫泉もございます、

いたゞきましたものをば、他の者へはたべさせず、小生一人で獨占して珍重玩味致しをります、

とりあへず右御禮まで、

六月十二日　　若山牧水

荻村久吉樣

一六

七月十五日、沼津町在上香貫より、大阪市、大島武雄樣宛（手紙）

富士はこの八月上旬、（下野の高鹽君、東京の和田君と一緒のつもり故、小學校が休みにならないと駄目なのです）に登るつもりなのです、殘念ながら君より少し遲れます、

然し、是非、お立寄り下さい、十七八日でも廿四五でもどちらでも居ります、どちらか、お葉書を頂くとなほ結構です、子供がうるさいけれど、一晩お泊りのつもりでおいで下さい、必ずさうして下さい、沼津驛で、俥屋に、上香貫（カミカヌキ）中學校表門のさき若山、とお言ひになりますとすぐわかります、約十分かゝります、時間が定つてをれば驛へ小生出てゐます、

とにかく、すぐお目にかゝれますね、日の定り次第お知らせ下さい、妻も樂しんでゐます、

十五日　　牧水

武雄兄

一七

八月二日、沼津町在上香貫より、東京市、百溪祿郎太樣宛（手紙）

幾つかの手紙の中に君の名を見出して胸を踊らせた、顏を不意に見附け出したおもひがした、

東京には殆んどゆかない、八月十四日で滿二年に當るがその間に四度行つたきりだ、行つても一二泊で歸つて來る、先日は一泊、

こちらに來給へ、下浦より多少いゝ暮しをしてるから君が來ても泊めることが出來る、靜浦江の浦といふすてきな入江がある、

平賀先生が今月中に來る筈だ、また、一騷ぎあることだらう、彼は一年中の惡氣を壓（アツ）サクして持參し來るのだから、流石の僕もチト恐い、昨年も來てこの小さい町を震ガイさせた、僕はこの夏は完全に籠居する、昨年まる一年、なまけたのでその穴埋め工事なのだ、當地三十七年目の暑さと稱す、然し、暑いのは大抵痛快だ、折々消息を交はさないと、まつたくいけない、僕はこれから此處で今月から印刷することになつた雜誌を每月送らう、手紙代りとしてくれたまへ、

昨年、死ぬかとおもつたが、今年はまた意外に元氣だ、君は例のごとくジユン〳〵乎として平押しに押してるのだらう、夫人によろしく、たしか、千駄木邊でお目にかゝつたきりかとおもふ、ちひさい人たちはいま幾人か、僕四人、長男尋三、長女尋一、あと一女一男、

延岡の連中と逢ふことがあるかね、あつたら、君からよろしく通じておいてくれたまへ、例のごとく誰にも失敬してゐる、

これでよす、

八月二日午前　　牧水

百溪兄

妻も「まア珍らしい」と君の手紙を見て云つた、

一八

八月八日、沼津稻玉醫院より、信州、荻村英雄樣宛（手紙）

昨日は思はぬ面會をなし非常に嬉しかつた、たゞ、あまりに意外な場所意外な場合に逢つたので、何彼につけひどく物足りない感がしてならぬ、が、止む

をえない、この次の機會を待たう、いま、お葉書拜見、そんなに慌しく立つたのか、勞れはしなからうかと心配である、様子をすぐ知らして呉れ、葉書にあつた言葉の「一轉期」といふのはこの際甚だ有意味に響く、この言葉を確實に實際の上に活かして貰ひたいと思ふ、

小生今朝より全く絶食、いま、不氣味な藥を飲んだ、これでうまく行つてくれるとい丶がなア、

八月八日午前十時　牧水

一九

八月八日、沼津稻玉醫院内より、三河國、金澤修二樣宛（葉書）

修二さん、御めんなさい、すつかり御無沙汰しました、細野君が歸ると、そのあと直ぐ高鹽君と越前君とがやつて來て、また、例のごとく、續きました、そして彼等が歸つてしまふと私は一大決心で此處に入院しました、お話しなかつたかも知れませんが、私のおなかの例のお客樣（註、條蟲）はまだ悠々と鎭座してゐたのです、それを此際思ひ切つて退治ようといふわけなのです、三日間、流動物、今日は絶食、そして何だか不氣味なお藥をいま、飲んだところです、お書に下劑、それで結果がよければよし、わるければまたもう一つのお藥を飲むのださうです、豪傑悉く降參、もう眼も見えず、耳も聞えぬ、ハシゴダンからハバカリへハヒハヒをして參ります、

八月八日　若山牧水

二〇

八月二十八日、沼津在より、東京、高橋葉子樣宛（繪葉書）

葉子さん、大變な日に歸りましたね、驛からどうして歸つたゞらう、電車の乘換はどうだつたらうと、寢られぬまゝにあの晩中心配してゐました、でも無事で結構でした、謹んで勇敢ぶりを祝福します、前の田圃は漫々たる大海と化しました、あの夜明に。ごた〳〵してゐた時で、ほんとに失禮しました、

八月廿八日　牧水

二一

八月二十八日、沼津町在上香貫より、千葉縣、神原克重樣宛（手紙）

犬吠の方でしたか、多分さうだらうと思ひながら御無沙汰してゐました、先日背山老來訪、二三日大にメートルをあげました、君も一度來て下さい、來年三月末か四月初、大會を沼津で開き度し、今からその積りでゐて下さい、東京あたりの會合のダラシのないのを見ること何とも嘆かはしく、一種のケンセイ運動としてもその要あるべくと愈々右開催の決心をしました、どうかその甲斐のある樣なものとしたいものです、

歌を一頁この五日までに送つて下さい、一頁組甚だ振はず、弱つてゐます、一つ奮發して下さい、是非待つてます、

來年の春はまだ鬼の笑ふ部に屬します、が。この秋、日光に小生の出かけるのに對しては鬼もほどこすすべなからんとぞおもふ、とにかく喜連川あたりへ打揃うて出かくることに致しませう、途中をば端折つても日光にだけはゆきます、いろ〳〵と空想してゐます、

まだお目にかゝりませんが、御尊父へよろしくおつしやつて下さい、犬吠へもこの秋廻るといふわけですが、實行出來たら一寸でもお目にかゝりたいものです、

綿引惣吾和尚、近くなつて折々やつて來ます、この三四日前も一寸寄つてゆきました、

八月廿八日　牧水生

克重兄

歌一頁必ずと待つてゐます、

二二

九月二日、沼津町在上香貫より、東京、大悟法利雄樣宛（手紙）

大悟法君、その後失禮、あとから〳〵の來客で、何も手につかずにゐました、

とにかく、出來たらすぐ來ることにして下さい、此處に汽車賃を入れておきます、

中學世界の助手をいま求めてゐる由を他から聞きました、白石君にそのことを賴んで見ましたか、もつとも何だか大變むつかしい要求があるさうだが、なアにやつて出來ないことはありません、要するに白石君をウンと云はすればよいのです、こちらに來るにしてもそのことをよく運動しておいてにした方がよいと思ひます、

では、とりあへず右のみ、あとはお逢ひしてからにします、着替の一枚も持つたゞけで、出ていらつしやい、

九月二日午前　　若山牧水

大悟法利雄君

二三

九月八日、沼津在上香貫より、信濃、重田彌次郞様宛（手紙）

こまごまとのおたより、涙の氣持で拜見、

君が默つてゐるので、さうした深い氣持をば知ることなしに、そつけなくお歸ししてまことに濟まなかつた、折角さうして出て來たのに、さぞあつけなく歸つたらうとおもふと、誠に心が痛む、自分自身、よくそれを經驗してゐるだけになほさらだ、運がわるかつたのだと諦めて呉給へ、

然し、とにかくさう悄氣てゐては次第にいけなくなるとおもふ、何とか心氣轉換の方法を自ら案出する必要が、是非、ある、氣を引立てゝ先づそれを考へ出し給へ、いつまでも氣を腐らしてゐては自分自身に對して濟まない事だ、讀書とか運動とか、または日曜毎の遠足とか、何かあるだらう、他を相手にせず自分で考へて見給へ、段々深みにおちてゆくと隨分不快なハメに陷ると思ふ、チヨット氣をかへると、それはまた何でもなくそこから脫却し得るものだ、

僕の旅行——、僕自身も何だか近來自分の掘つた

穴にずん〳〵落ちゆく傾向が見ゆるので、無理にも遂行したいと思うてゐる、是非十月の五六日には出かけます、さういふ風ならその歌會にも出ることにしませう、今のところ、二、三日を費して五湖を廻り、すぐ甲府から汽車で富士見一泊、朝早く茅野へ降りて八ケ岳の溫泉へ向はうとだけはほゞ確定してゐるのだが、それからは一寸豫定が立てられないでゐるのだ、山の中へ一泊か二泊かそれとも三泊か、そして松原湖へ、と斯うだけしか今の所考へてゐないのだ、大體の君の考へを聞かして貰へまいか、

松原湖で君に逢ふことは大變なたのしみなのだからこれは變更したくない、そしてうまく時間を作つて歌會へ出たいものだ、

とにかく、右の樣なことで、あとは君の考へでいろ〳〵きめて貰ふといふことにしたい、よろしく賴みます、

いろ〳〵の約束について御配慮難有う、すべて御心に甘えませう、

あれから矢張り千客萬來で、從つて飲みつゞけで、イマ、完全に疲れ切つてゐる、それに爲事の忙しさといつたら無いのだ、僕も（もつともこれはこの一二年の時間だけだとは思つてゐるのだけれど）何とかこのことについて考へなくてはいけないと切に感じてゐる、

ザクロまだ飲まず、從つておキヤク（註、條蟲）健全、あれからまた一度二間位ゐの長さに出て來た、

この十七日に名古屋で歌會あり、出席、アレは一昨年になつたねヱ、

山田邦子女史、半年ほどこちらへ轉地の意を告げ來り、細君はいまその宿探しに出てゐる、もつとも君の今日の手紙をば讀んでから出て行つた、

まだ書き度いが、さうしてゐられない、これで御めんなさい、來月逢ひます、

九月八日朝九時　　牧水生

重田兄

二四

九月十八日、尾州犬山城下木曾河畔迎帆樓より

東京、細野春翠樣宛（繪葉書）

春翠よ、お前さまとチト一度遠出をして見度くなつた、此處などもわるくないぞ、

ナモナモトサヘヅルコトリノナカニアリテスヒスフツユハオイシキヅナモ（註、ナモは名古屋辯の常用語）

九月十八日　牧

（服部純雄とのよせ書）

二五

九月二十日、沼津在より、東京、和田山蘭兄宛

（手紙）

山蘭兄、

名古屋の會に引張り出されて、二三日あそんで來ました、昨夜歸宅、

歌集、いよ〳〵おきまりの由、安心しました、叢書云々はよしませう、矢張り單獨發行がいゝかも知れない、「酒壺」は氣に入つた、いつ出ます、君の方で原稿をこさへて送つて下さい、十月號に廣告を出しますから、

高鹽君のをこちらから出すことにきめた、來年一月に（僕が旅行をやめれば十一月中に　發行されます、

先日は失禮しました、ツイ、行きがゝりであゝ大勢になつてしまひ、ゆつくりする餘裕もなく、徒らに君を騷がせたことになつてまことに氣の毒でした、ゆるして下さい、夫人はいつ歸つて來られました、

それから先日尾上八郎氏來訪、君の話をしたところ、いつにても來て下さいとのことでした、但し自宅、小石川四二〇〇番へ電話をかけて在否を確めの上がよろしき由、早速出かけて見給へ、

月末一寸上京するが、俗用故、たぶんお目にかゝれまい、

此頃、また飲みすごす傾向あり、手ふるへて字書けず、

廿日　牧水

二六

九月廿三日、畑毛中華亭より、沼津、金澤修二樣宛（繪葉書）

小降りになつたを幸に午後から出かけて來ました、俥でひどい眼にあつたが、晴れた日歩いて來たら途中がどんなにかいゝだらうとおもひました、榮屋に團隊客來る由をきゝ此處に入りました、いゝ樣な惡い樣なへんな、氣持でいま二階から田圃と丘とをぽかんと見てゐます、すぐあとアツイのが參ります、

九月廿三日　牧水老人

二七

九月二十三日、畑毛中華亭より、沼津若山方二階組御中（繪葉書）

見るといかにもぞんざいだが、また事實さうでもあるのだが、あたりの丘と田圃とが、たいへんこの宿をおちつかせてゐます、

僕の部屋の兩方の窓から黃いなみどりな田圃が見えてゐます、俥でひどい目にあつたが、晴れた日、ぶら〳〵歩いたら此處までの途がすてきだとおもふ、いつか歩きませう、

明日、書けさうな氣持です。

九月廿三日夕　牧水老人

二八

九月廿九日、沼津在上香貫より、東京、細野春翠樣宛（手紙）

細野君

氣をもませてすまない、どうか許して下さい、苦しき事情あり、今朝立つ筈のところ、立ち難し、いつそのこと、十月號の選を濟ませてのち行かむとす、たいてい五六日にはゆきます、いよ〳〵きまれば葉書と電報とを出します、それの行くまで、ボカンとしてゐてください、

例の筆は、九段坂上、招魂社横、電車通、平安堂にしかありませぬ、さう言はなかつたとすれば小生のしくじり、其處のみにて龍眠筆は作らるゝなり、いづれ上京の上いつしよに行つて買ひませう、それまでに、こちらにて何とかまに合はせます、古いの

もあるのだから、

行くときまれば前日に品川驛着の時間を打電せむとす、大抵の頃を見計らひ澁谷驛へ出てゐて貰へると甚だありがたい、あそこの道には一二度獨りで迷つてゐるので、性根がすわらぬ、丁度夕方か夜か着く樣に都合します、

此頃の僕の忙しさを一目でも見せてあげたい、半死半生の馬車馬の態だね、

野坂氏夫妻へよろしく、

廿九日午前二時半　　牧水

二九

九月廿九日、沼津在上香貫より、愛媛縣、村井伊久馬樣宛（手紙）

拜復、村井伊久馬では解らなかつたが、お手紙を讀み終つて村井幽果に到つて、ア、さうか、とおもひました、御平靜を賀します、小曾戸君もそちらに行つてゐるのでしたね、もとはやはり三十一文字などひねくつた仲間でしたが、今はどうですか、お逢ひでしたらよろしくおつしやつて下さい、それに先日「平賀が來て、大に飮んで行つた」ともお傳へ下さい、「創作」も續けてゐます、社規別封お送りします、「水郷」ありがたう、お歌、まだ幼いのをば拔けえない樣だが、質實な詠風をいゝと思ひました、

山口夕花君の長逝は初耳でした、同君の事につきもつと詳しくお知らせ下さいませんか、寫眞がありましたらお貸し下さいませんか、御依賴申します、

九月廿九日　　若山牧水

村井幽果樣

三〇

九月廿九日、沼津在上香貫より、長崎市、大橋松平樣宛（手紙）

大橋君、お手紙難有う、偶然途上で行き會うた氣がしました、

まつたく君も御不幸つゞきの樣で、一寸御慰めの言葉も出ません、先日、あの御葉書を見た時なども妻と顏を見合せたまゝ、二人だけでゝも一寸何とも

言葉が出なかつたのでした、然し、君は割合に強い人の樣に思はれる、止むなく強くなられたのかも知れないけれど、それにしても、賴もしさを覺えます、月並な歌だが、「憂きことのなほこの上につもれかし、かぎりある身のちからためさむ」といふ心を何處かに持つてゐて下さい、下句はぬきにして、上の句だけでもいゝとおもふ、其處には矢張り目に見えぬ力がこもつてゐますよ、とにかく御自愛下さい、なほ、令閨にもよろしくお傳へ下さい、そして、御一緒に、すべての物に勝つて下さい、

中村（註、三郎）君のことでも、不本意なことばかりしてゐます、然し、中村君にはこちらの心が解つてゝ呉れる樣で、割合に心は平かです、たゞ一つ氣にかゝるのは、同君慰勞金を集めた時、五圓を送る旨發表しておいてまだよう送らずにゐることです、あの時持合せなく、その後も思ひ出すごとに具合がわるかつたのです、そしてとう〳〵だまかしたまゝに中村君を遠くへ送りました、あれはどうも氣になる、幸ひ此處に他から來た切符がありますので此處に封入しておきます、使用法は君におねがひします、或は若し現に君が必要でしたら故人の代りにお使ひになるも甚だいゝことでせう、中村君もさうした味はよく知つてゐませう、

同君の追悼號風のものが出るから何か書けと云はれて、矢張りその時よう書きませんでしたが、出ましたか、出ましたら一寸でもお見せ下さいませんか、「創作」をば十二月號をそれにあてようと思つてゐます、山口濱雄君も僕等の知らない間に北海道でこの一月死んでゐたのでした、伊豫の山口夕花君も死去の旨、二三日前知りました、簡單ながら、「創作」での野邊の送りをしたいとおもひます、自分に書かずに、甚だ勝手ですが君と町田君に何か書いて貰ひたいとおもふ、町田君へは君から賴んで呉れませんか、是非おねがひします、同君の最近の寫眞は何處かにありませんか知ら、あつたらそれも添へて下さい、

中村君のあと（家）はどうなつてゐるのです、長崎にあるのですか、

「創作」もまた元氣を出すことにしてゐます、來年

あたり、追々よくなりませう、もうこれからは調子を狂はせません、小生の田舍暮しがそれを保證しさうです、

歌をお作りなさい、若い人が元氣に作つてゐますけれど、どうも物足りない、もう少し腹に力のあるのがほしい、久しぶりに十二月號あたりに見せて下さい、十一月號は小生は見ませんから、

長崎の連中はどうしてゐます、折のあるごとに君よりよろしくおつしやつて下さい、誰にも默り込んでゐるのです、

小生は割合（フシギ）にこのごろ丈夫です、本物とはおもへないが、とにかく目下夜晝なしに机に向つてゐます、十月の十日ころから永い旅へ出かけます、

妻よりもくれ〲よろしく申しました、いつかこちらにお迎へする時があるでせう、小生は多分ずつと沼津で暮します、

やれ〱、久しぶりで手紙を書いてい〻氣持になりました、では、左樣なら、

九月廿九日　　　　牧水生

大橋松平樣

友人御紹介ありがたう、よろしく、

三一

十月二日、沼津在より、東京、山崎斌樣宛、（手紙）

いろ〱、御察しします、隆文館の話は危ないと思つてはゐた、校長の安受合には小生もよく手を燒いた、

アルスがうまく行つて呉れると難有い、僕も今日早速鐵雄さんあてに手紙を書きます、

「旅行と文藝」は實際惜しい、第一君のうつり氣がいけないのだよ、君さへやりとげる氣ならどうにともなつたんだらうがね、まだ僕は未練があるのだが、何とか考へてみないか、

「表現叢書」、それは困つた、實は日本橋の横山といふ人が來て（先日「スウキス日記」を出版した店）もう話をきめたのだ、九月一杯に渡す筈だつたのを、

まとめて見ると案外行數不足で、今、善後策交渉中といふわけで、同じ時に同じものが出ては、とても具合がわるいとおもふので、すまないが、君から右の事情を云つて斷つてくれたまへ、（右の行數不足を纏めるために、今、一つ長いのを書いてゐる始末）

僕もこの夏、來客會飲の罰で、いま、來沼以來初めての四苦八苦をやつてゐる、九月末上京する筈だつたが、右のことや何かで行けず、この五六日にゆくことになつてゐる、萬事は逢つて話しませう、

十月二日　　　　若山牧水

山崎斌兄

痔は、例の「溫湯とダッシメン」策を講じてみたまへ、氣永く。（末に）

とし子さんによろしく、「お察しします」つて。（初めに追記）

これを書いてる側で聲あつて曰く、「山崎さんもホントにいつになつたらおちつけるのだらう」とさ、

三二

十月四日、上香貫より、稻玉病院、塚田靜保樣宛（手紙）

塚田兄、昨日の寒さに一たまりなくやられてまた例の風邪でうなつてゐます、例の妙藥をおねがひ申します、鈍い頭痛、鼻つまり、咽喉がガゼ〱云ひ、從つて肩が凝り齒が痛むといふ症狀です、熱は今朝三十七度五分ありました、昨夜はひどく寢苦しうございました、例のピリンシンがなくば賣藥でもい〻程度でせうけれど、あれがあるので、貴兄をわづらはします、何卒おねがひ申します、

とう〱東京にも行きませんでした、雜誌の編輯を濟ませて〻なくては、行けば永くなるといふ細君の說にまけて、行けなかつたのです、然し、藤間の踊は大成効だつたさうです、多少、安心です、

うがひ藥もいた〻きたいと存じます、

十月四日あさ七時　　　　牧　水

塚田様

三三

十月六日、沼津町在上香貫より、名古屋市、尾山篤二郎樣宛（手紙）

御返事、それにいろ〳〵とお心づかひ、ありがたう、「歌集」これは借金してゐる關係からとにかく新潮社に話だけでもする必要があるので、先づそれへ行く、それから、君の話の横山君の方へ廻りたい、同君には散文集出版の約束をしておいて、行數不足のため、いま、まごついてゐたところだ、

「短册」この話は、僕自身にもどうしたらいゝのか、まだしかと見當がつかない、さほどうろたへてもしかたがないし、もすこしたつて、自然君と出會ふ樣な機會に篤と御相談することにしよう、それでも急に妙案浮ばんも知れず、行く先々の宿所をば忘れずに知らしておいてくれたまへ、

「廣告」これは二三日うち上京、矢島君に頼まう、「創作」の廣告を向う一年間、君の雜誌にたのみたいのだ、廣告料最低額の旨を至急同君あて申送っておいてくれたまへ、

宇治ずまゐは羨ましい、宇治のはたごや三輪の茶屋をやるのぢアあるまい、どうも、こなひだの自筆繪葉書が物騷だつたよ、まア、行つてゐられるだけ行つてゐたまへ、

運わるく、風邪をひき、少し念入り、この分では三四日、寢ずばなるまい、とりあへず御返事おねがひのみ、

六日　　　　牧水

尾山兄

歌明日送る、

三四

十月六日、上香貫より、稻玉病院、塚田大兄宛（手紙）

塚田兄、

靈藥にて、殆んどもういゝのですが、念のため、もう一回いたゞかせて下さい、イヤ、一回でなく、小生この病氣直り次第東京に出て、それからずつと信州上州野州の山から山を廻り歩きます、そのときの持藥としてこのお藥を懷中してゆきたいと思ひます故、十日分ほど御調劑下されたくおねがひ申します、

御勘定は、旅から歸つてまた入院をおねがひします故、その時御一緒にといふことにしておいて下さいまし、

十月六日　　　　牧水

三五

十月十四日、裾野驛を出る頃より、沼津、若山方大悟法利雄樣宛（葉書）

沼津驛頭、おもひもかけぬあの樣な美人の見送を受け、うつとりとして車席に着いてゐると、ソレ、待合室にゐた二人の尼樣がピタリと僕の兩脇に腰をかけました、そして今、をり〳〵僕の前にカッチンコをする位ゐに剃りたての青頭をつき合はせては富士を讃めてゐます、富士はうつすらと新しい雪をその頂上に置いてゐます

あらはなるまはだか山のふじがねのすそのけぶらふ秋がすみかな

十四日朝七時　　　　牧水

三六

十月廿八日、日光入、湯元より、沼津、大悟法利雄樣宛（繪葉書）

この湖の細く切れ込んだ奥に湯元溫泉はある、實にいゝ場所だ、たとへ芦の湯のそばに芦の湖を持つて行つても此處ほどの深みは出ないね、折れ合つた山のよさ、その山に茂る樹木のよさ、それに時候としても今が一番僕にはふさひさうだ、滯在したいけれどよしてすぐ明日中禪寺に出ます、草津から履き始めて丁度十日間履きつめて來た草鞋にも多分明日でお別れだ。

十月廿八日午後　　　　牧水

三七

十月卄日、日光中禪寺湖畔より、島根縣、小豆澤錦潮樣宛（繪葉書）

十四日から信州上州地の山を歩いて、昨日漸く此處へ來ました、落葉したところ、紅葉のさかりのところ、雪の來たところと、いろいろ面白うございました、永い旅の心地がします、六七日歸宅のつもりです、

留守中、松茸をいたゞきました相で難有う、

牧　水

三八

十月三十日、中禪寺湖畔米屋より、大阪市、大島武雄樣宛（繪葉書）

君の通つた時には眞みどりの匂をたゝへてゐたであらうこの野の樹木も草も今は純黄に枯れはてゝゐた、一昨日上州地から金精峠（湯元のうしろに聳えた岩山）を越えて湯元一泊、昨日ぶら〳〵と此處まで來たところです、永い旅の心持がします、

十月三十日　牧　水

三九

十一月十日、沼津在より、東京、細野春翠樣宛（手紙）

細野君、すまなかつた、默つて歸つて來て、君がどんなにか氣をわるくしてるだらうとひどく氣になつてゐたところ、けふのお手紙で、よくそれを飲み込んでゐてくれてることを知り、まことにほつとした、難有う、

日光から例の酒戰に入り、型のごとくつぶれてしまつたのであつた、五日夜に「酒壺」の會があつたとしても、十一時の汽車では僕歸るつもりでゐた位ゐ、一刻も速く自宅に歸つて寢込みたかつたのだ、それなら酒をやめたらいゝわけなのだけれど、それをそなへて待ち受けてゐる人たちの顏を見るとツイ過したくなるのが癖なのだ、いゝ齡をして恥しい至りだが、どうもまだ身動きがとれない、君たちの酒をばとゞめて自身で飲むのもまことに面目ないが、今暫く默つておいてくれたまへ、

廿五日には是非出たいとは思つて居るが、そのころ一番新年號ものゝ忙しい時なのだ、それにお察しの通り、昨日まで寢てゐたので、實に爲事の溜つてること凄い有樣なのだ、で、都合では或は失禮するかも知れないと君一人の心の中で豫想しておいてくれたまへ、それとも夕方そちらについてその夜の汽車で歸るといふ樣なことをするかも知れない、とにかく萬事たのみます、主として君と越前君との骨折だらうといふことを聞いた、

筆、ありがたう、實は昨日大悟法君が上京したので同君にも賴んだのであつたが、すぐそれをばやめさせます、

小包はまだ來ないが、明日でせう、もう少し大きいのがほしいのだが、都合でそれを大悟法君にたのみませう、

半折、ありがたう、いま溜つてる大至急の用を果してすぐ書きます、いやな用事を、ほんとに難有う、

旅は、然し、矢張りよかつた、歌は出來なかつたが紀行をば書きます、

野坂君はいま自宅か知ら、奥さんにもよろしく云つといて下さい、

酒をやめたのはよかつた、癖にならぬうちだつたのでなほよかつた、沼津に來た時に飲む位ゐにしときなさい、

うんとこれから稼がなくてはならぬと氣を張つてゐます、稼げさうです、

十一月十日　牧　水

春翠兄

四〇

十一月十日、沼津町在上香貫より、栃木縣、高鹽背山樣宛（手紙）

高鹽君

今度はまた、申しあげ樣のないいろ〳〵のお世話樣になりました、一人ならず大勢押しかけて行つて殆んど全家を震駭した傾向あり、お禮やらお詫やら、なか〳〵俄かには申しつくせぬのを覺えます、然し、

御尊父様初め皆々様にお目にかゝり得たのはこれまた言葉につくせぬ喜びでした、どうかこの喜びとお騒がせしたお詫とを皆々様にもよろしく申上げて下さい、

歸つて來ますと案の如く二日ばかり寢込んでしまひました、寢込んだ書齋には急ぎの爲事が山をなしてゐるといふわけで、全く、茫然とするほか、手の出し様のない有樣です、でも、今日から辛うじて机には向つてゐます、

「峽間」の原稿を別封小包でお送りします、概算して千五百首位ゐあるかとおもふ、これをどう選むがいゝか、小生には一寸見當がつきかねます、東籬集には五首づゝの八百五十首ほど入れてあります、出來るなら多數を入れたがいゝとおもふのですが、さうするか、それとも數を少くして體裁をよくするか、それは貴兄の考へどほりにして、選んで下さい、百八十頁位ゐまでは延ばしてもいゝとおもひます、

十一月號もお蔭さまで大變よく出來ました、六日には全部發送濟となり、その速いのがだいぶ諸方を驚かした様子です、

それから、例の證人一件の様子はどんなです、もう出なくても濟みさうですか、そして、結果は君たちのお考への通りになりましたか、とにかく、さぞおうるさきことゝお察しします、ことに阿父さんに氣をもませない様に、よく／＼氣をつけてあげて下さい、

なほ、これは差出がましい心地もするのだが、先日お見受したところでは一番姉さんの、やす子さんといひましたかネ、あの人がどうもお身體が弱さうだ、暫くの間でも、この海岸に來てゐてみては如何でせう、さういふ御希望でしたら小生の宅で喜んでお預かり申します、せめて半年ほども來てゐてごらんになつたらよくはないか、と、妻とも話したことでした、お客様としてだと一寸困ろが、二人の娘の相手をして頂いたり、小さな縫物でもして貰つて、ゆつくりとして居られたら、といふのです、只今、女中と子守とが一人づゝゐますから（二階には今日から笹田君一人となりました、大悟法君は上京）お臺所

の用事は先づ大抵今のまゝで用が足りますから、とにかく御參考までに申し出て見ました、

ノートを難有う、今度の旅では命から二番目のものであつたを忘れるとはよく／＼參つてゐたものと苦笑されます、これを種に紀行文を書くつもりなのです、

別便小包でお粗末なものをお送りしました、選のお禮や何や彼やだと思召し下さい、小生のいふ年頃がよくわからぬので（誰が幾つで誰が幾つと）細君もよく見立てられずおよその見當で買つたものださうです、よき様にしてお使ひ下さいまし、干物は小生の手がすこしすいてから作つて送ります、

ゆつくり例の川岸の二階で久しぶりの沼津の酒など味はむ心もゆれど、何や彼やにて今のところ、少々御我慢のてい、近く、どうかすると中村柊花再遊するかも知れず、その時を待つてゐます、羨しかつたら出てらつしやい、半日で來られるのですからネ、皆様にくれ／＼よろしく、妻よりも宜しく申上げました、

十一月十日　　牧水

背山兄

四一

十一月廿一日、沼津町在上香貫より、東京、山崎斌樣宛（手紙）

山崎君、廿七日の會の出席がチトあやしい狀態にある、廿五日の山蘭の會にも駄目と見て斷つてやつたのだが、これは一寸でも僕が出ないと會が成り立たない樣な風なので、これには一寸出てその夜の汽車か翌早朝ので歸らうとおもふのだ、

「創作」の十二月號をすませておいて、あと、旅の歌と紀行文とを作り、どうかして何處かの新年號に間に合はせむといふ苦しき算段をしてゐる場合なのだ、全く、いけない時だつた、（歌は少し出來かけてゐる）、

然し、今度は大分顏觸は揃ふ樣だし、この前とは全く違ふとおもふ、「結婚」の會といふより、皆に落ち合ひ度いといふ希望が先に立つが、逢へば飲み度

いし、飲めば底を抜き度いし、抜けばとても當夜一晩の事件ではなくなるし、(まつたくなのだ、旅から歸つて十日間寢てしまつた、日光以後の酒がたゝつたのだ) 要するに此際敬意を表するの止むなきに立ち到るわけなのだ、惡しからず許してくれたまへ、

右の、紀行文が思ふ樣に書けたら、早速持參上京、其處でうまく行つたら僕だけの「結婚」會を開くといふことにしよう、

集つた諸君に君よりよろしく傳へておいてくれたまへ、

十一月廿一日　　牧水

山崎兄

四二

十一月廿一日、沼津在より、東京市、大悟法利雄樣宛(繪葉書)

度々お便り難有う、なか〳〵忙しいらしいので、寒からうとおもふ、風邪を引かぬ樣に痩我慢を張らぬ樣にと、皆心配してゐます、廿五日にはとてもよう行かぬと思うたが、思ひ直して出かけます、小生もいま毎晩八時就床十二時起床といふ狀態です、こゝも非常に風邪が流行るが幸に無事、細君が洟を垂らしてゐます、

國技館に今日からチンコ芝居(女芝居のこと、君の國ではさう云はぬか)がある相だ、ねヱやたちを連れてゆきたいけれど、とても今の所時間が惜しい、小生が忙しいと從つてトムミー氏も忙しいとなる、いつか慰勞日を開きませう、君もひとつ飛んで來い、でんまつのヌーボーにも困りものだ、少し鹽をねぶらせる必要があるかも知れん、

はなの木の妙味がわからなくては少くとも東京以外に退去する必要があるナ、

十一月廿一日　　牧水

四三

十二月六日、沼津町在上香貫より、東京、和田山蘭樣宛(手紙)

和田君　難有う、君の「酒壺」を讀む事によつて僕はいま非常な幸福を感じてゐる、

君の本當の素質が、今までろくに知らなかつた素質が、いま漸く明らかになつたのを感ずる、これは誠に恥しいことでもあり、難有いことでもある、

「酒壺」はまつたくめづらしい歌集である。これを世に紹介せずにおくことは、何だか、僕等の責任になりさうにおもふ。出來るだけのことをしたい。君一人の問題ではなくなつて來た。

序文、書いてみたが、なか〳〵書けない、あれかこれか、いろ〳〵考へて、やつぱりこんなものになつてしまつた。少し云ひすぎてるとおもふけれど、そのつもりで一頁位ゐの短いものに書き直してもみたのだが、それではやはり腹ふくるゝ氣持で、とう〳〵これになつた。君の氣持で、附けるも附けないも、まことに自由だ、たゞ、今まで待たせておいたのが濟まなかつたけれど。

何か、この集について、他に僕にすることはないか知ら、いま考へてゐるのでは、「創作」には無論として、新聞か雜誌に紹介が書きたいとおもふ。前者では「時事」か「讀賣」か、後者では先づ「短歌雜誌」か「早稻田文學」だ。どれがいゝだらう、行數の自由なのは「早文」だとおもふ。一しきり忙しい爲事がすんだら、すぐ書いてみたい。

非常に嬉しいので、何か、僕一人の(先日の會は別として)お祝ひを送りたいと考へたけれど、恰好なものが思ひ當らない、考へついたら送る、近ければすぐ一升さげてゆくのだが、遠いし、時がわるい、年末に一寸出て來ないかね、正月でもいゝ、君が所望なら土肥溫泉にゆく、

それから此處にひとつおねだりがある、先日、妙なはずみから妙なことを云ひ出して、君に「その金をば幾らかでも送るから」といふ樣なことを云はせてしまつた、君のことだから、そのことについて眞實に頭を使つてゐるかも知れない、僕としても受取れたものではない、要するに兩人で飲む位ゐがオチ

だとおもふ、ところでだ、その金（山蘭集費）の代りに僕に半折に歌を五枚書いてくれぬか、これにも實はこみ入つた考へをしてゐた、僕は君の企て（半折會）を聞いた時すぐ五枚だけ申込む氣になつてゐたのだ、その歌をもきめてゐた、けれどまた思ふに僕自身もそれと同じ企てをやらむとしてゐる、その際にきはだつて僕から申込むとまたあとで君が何かしはせぬかと氣が廻はされて、まごついてゐたのであつた、然し、今夜、（ではない今朝だ）右のごとき實にずるくしてまた最もよきおねだりを考へ出したので、その前の申込をば撤囘してしまふ、で、是非さうしてくれたまへ、歌をばあとで申し送る、四季と雜とがほしい、幸ひ妙な表具屋を知つたので、こちらで表裝させられる。

咽喉は如何。「結婚」の會の日は、いろ〳〵遺憾であつた。君が沼津に來てくれると、ゆつくり二人で飲める。若しかすると十日頃、僕上京するかも知れぬ、したら訪ねてゆきます。夫人は如何、「酒壺」にさかんに歌つてあるので、すこしやけた。

僕ふしぎに元氣、毎朝十二時起床。旅の歌がたくさん出來た、多くは間に合はせだけれど、本氣なのもある。あとで見てくれたまへ。

十二月六日朝五時五十分　　　　牧水生

和田山蘭兄

四四

十二月八日、沼津より、東京市、大悟法利雄樣宛（葉書）

「冷たさ」の方が部分的になり小さくなるけれど、さういふ風に感じたのなら矢張り「冷たさ」の方がいゝだらう、（　）符の中に書いてあるのはみな拙い、元氣で結構、沼津もこの二三日めつきり寒くなつた、門前の枯田にはまだ麥が芽生えず、信濃境の連山が純白に並んで見える、それに例の名物西の風だ、然しまだ小生の冷水マサツが續いてるのだから驚くにも當るまい、正月には待つてゐる、一件は申越次第送ります、トンミー氏も何彼と忙しい、今日校正が出る筈、家内みな元氣。

十二月八日　　　　牧水

四五

十二月十七日、靜岡縣沼津町在楊原村上香貫より、東京市、大悟法利雄樣宛（手紙）

お歌、いつか一度見たものだね、非常に結構、誌上に出ると一層引立つとおもふ、

君の方の忙しさはどうだね、僕、もう匙をなげてポカンとしてしまつた、手も足も出せないのだ、昨夜は天勝見物、明晩は呂昇聽、

正月留守はあれはウソ、多分何處へもゆけまいとおもふ、うんと餅をついとくよ、

十二月十七日　　　　牧水

利雄さん

四六

十二月廿一日、靜岡縣沼津町在楊原村香貫より栃木縣、谷邦夫樣宛（手紙）

谷君、

それはおめでたう、ほんとうにおめでたう、小生もまことにうれしく感じます、そして君たちふたりの勝利と幸ひとを祝福します、その現在の幸福を充分に充分にお二人の身體に浸みこませておいて下さい、

小生の身體のことをそれほどまでに案じていたゞくかとおもふと、胸のせまるを覺えます、難有う、そのつもりで小生も氣をつけます、酒はいま對酌をやめてゐます故、たいしたことはありません、獨酌だと量が自づときまつてゐますからたいしたことはありません、正月には何處かへ逃げてゆきます、君にも歌が、さかんに出來るでせう、小生もこのごろ、をかしい位ゐ出來てゐます、二月號でお目にかけます、なか〳〵佳いのがある、

とりあへずお祝ひ申します、いづれいつかお目にかゝるでせうが、その、君のかはゆき〳〵人へよろしくおつしやつて下さい、

大正十二年

十二月二十一日

若山牧水

一

一月十八日、土肥館より、沼津、金澤修二樣宛

（繪葉書）

乘遲れたり吹かれたりして昨夜やつと出て來ましたよ、土肥は相變らず靜かです、然し、今年はまだ梅が咲いてない、昨年は夙うに咲いてたのですがね。正月のノミスギがたゝつたか、へんに頭が痛みます、まづ、せつせと眠りませう。その後の沼津は如何です、何か、よきたよりなどありませんか。

十八日　　　　牧　水

二

一月廿五日、伊豆土肥、土肥館より、福岡、塚越潔樣宛（繪葉書）

塚越君、「深夜獨酌」一首、難有う、幸ひ今日は大吹雪だから、君の歌にさそはれた形で、眞晝獨酌と致しませう、元氣ですか、そして、勉强が出來ますか、春は休みはないんですか。まだ見ぬ倭文夫氏夫妻へよろしく。

一月二十五日　　　　若山牧水

三

一月廿五日、伊豆田方郡土肥溫泉土肥館方より

沼津創作社氣附、黑木傳松樣宛（手紙）

黑木君、すつかり僕默つてゐた、默つてゐる方がよいと思つたからだ。よく君はその心を知つてゝ吳れた。よく步くべき道を君は獨りで步いてゐてくれる。難有いことにおもふ。とにかく、しつかりしてくれたまへ、「傳松は可愛い男でせう」などいふ安つぽいことは云はぬがよい、せぬがよい。心を、大きく高く持たねばならない。卑しくすると、一生それがつきまとふ。

今日は大吹雪だ、この土肥には全く稀なことださうだ、東京が思ひやられる。一杯、飮みたいと思ふが、大森と土肥ぢア話にならぬ、君一人でやりたまへ、こゝに三圓入れとく。豚でも煮て飮む分にはこれで足りるだらう。

十七日から此處に來てゐる。爲事を山の樣に持つて來てゐるのだ、いま「二月號」のにかゝつてゐる。二月中に一寸東京を通る。時間を見附けて、逢ひませう。

身體を大事にしたまい。心を卑しくせぬこと、身體を疎末にせぬこと、この二つを忠實に守つてくれ給へ、賴む。

番地を忘れたので、沼津經由にする。僕は二月の五六日までこゝにゐるだらう。では、左樣なら。

一月二十五日　　　　牧　水　生

傳　松　君

四

一月廿六日、伊豆、土肥溫泉、土肥館方より、

島根縣、小豆澤錦潮樣宛（繪葉書）

小豆澤君、僕去る十七日より此處に來て爲事をしてゐる、入湯といふと聞きのよろしきだが、實は例の「晝夜兼行」だ、五時より晚酌、八時就床、十二時起床、就業、四時半入浴、五時就床、七時起床といふ風にネ。いま丁度五時半、ホツトウヰスキイの三四杯目のところだ、フッと口に出た出雲節、（此頃の流行にならぬ前のがよかつた。）あれを心にうたひつゝ涙ぐみつゝ、君を思ひつゝある。

二十六日午前五時半　　　　若山牧水

（繪葉書畫面に）

「酒壺」評、ありがたう。

今月など、お歌たいへんによろし、もう一息のところを勉めて下さい。（二十六日朝）

五

二月十八日、沼津在より、宇都宮市、神原克重樣宛（繪葉書）

「下毛」、ありがたう、なか〳〵よく見てある、蘭翁もさぞ滿足であらう（註、和田山蘭著「酒壺」評）然し、痛快な誤植だネ、幾度か吹き出した、出來るならと思つたが、三月號、非常に六號ものが多いので、「創作」

に轉載の出來ないのを悲しむ。小生、土肥から歸ると、すぐ風邪をひき、まだ寢たり起きたりです、その中にもやはり晝夜兼行です、あはれみ給へ天理王の命よ。

十八日　若山牧水

四月一日、なか〳〵ですよ、たのしみ〳〵。
おくさんによろしく（繪葉書畫面に）

六

二月二十日、沼津町在上香貫より、東京市、原田實樣宛（手紙）

原田君、誠に突然だが、當用のみ認めます、御めんなさい。この四月一日に、「創作社全國社友大會」を開く、その午前中を講演に當てゝあるのだが、それに一つ是非君に出て貰ひたいと思ふ、枉げて承知してくれたまへ。「文藝と教育」といふ風の題目、その他、それは何でも御自由です、各地方から集る中に小學教員の多いのを頭に入れておいて下さい。忙しいだらうが、厄介だらうが、無理にも承知してくれたまへ、お禮は出さないが、汽車賃と宿錢はこちらで持ちます。一日の午前七時開會、午前中に講演を濟まさうと思ふので、前の晩から泊つて、頂くと難有い（時間が無かつたら、夜十一時東京驛發、朝四時沼津着があります）。それに二日朝、千本濱で大地曳網を引かす故それをも見て行つて頂くと難有い、運よくば鯛の十枚もお土産にさしあげます。
「創作」の三月號に豫告を出したいので、大至急、御都合と演題とを聞かしてください、いま、もう初めの方は校正が出てゐるのです。佐藤君と、白鳥君とに、このおねがひをするのです。都合では平賀君が山口から出て來るかも知れぬ。

とにかく、是非、おたのみ申します。勝手な時のみ、いゝ氣なおねがひをして、濟みませぬ。奧さんにもよろしくおつしやつて下さい。

二月二十日　牧水

原田兄

七

二月二十八日、沼津上香貫より、京都市、雨森長三郎樣宛（手紙）

雨森君、直ぐ返事を書かうとして書き損なひ今日に及びました、あれからひどい風邪を引き、それが耳に來て、中耳炎に外聽道炎などといふ念入りに二ッ併發といふ騷ぎで、寢ず食はず（痛いものですねヱ）今日まだ頭はガンジガラメのありさまなのです。

いろ〳〵とのお便りで、お逢ひした氣がしました、ことに四月一日にはわざ〳〵おいで下さる由、非常に嬉しく存じます、西内君の「少年の日」も難有う、このことを三月號の餘白に何處ぞへ書き入れるつもりでしたが、校正を全部他に委せたゝめ、それが出來ませんでした、四月號に改めて書くことにします。

廣告はやはり普通の廣告にして一頁とつた方がいゝと思ひましたので、それまでに、例の木版をも一寸借りて使ひたいと思つてゐたところです、この十五日までにお送り下さいませんか、二十五日ころにはお返しします。

半折短册會のこと、今度、いよ〳〵おもて向きに雜誌に出して見ました、謂はゞ、背水の陣を敷いたわけです。斯うなると、或る程度までゝも成就しないことには、面目丸つぶれなのです。ほんとにどうぞ、そちらの方面のことを、萬事よろしくお願ひ申します。昨年あたりから、やりかけてゐたのですが、それは内々でやつてゐたので、今度漸く公然とやるわけなのです。どうにかして目鼻をつけたいものと覺悟されます。

夏はとんでもない目に逢はれし由、そのころ丁度在宅中でしたに、殘念なことでした、四月三日から附近の溫泉にゆくつもりでゐますが、何とかヒマを作つて一緒にお出かけになりませんか、いつも小生のゆく天城山麓の湯ケ島溫泉です。

京都の人たちとも、とんと御無沙汰がちです、そちらでは折々御會合ですか。そして、みな、元氣ですか。どうか誰方へも宜しく、おつしやつて下さい。

半折會のこと、なほ繰返しお願ひします、三月

號今明日中に出來ます、萬事それを御らん下さいまし、

二月二十八日　　牧水生

木版のこと、遲れぬ樣ねがひます。

八

二月二十八日、沼津町在上香貫より、東京府、村井武樣宛（手紙）

村井君、思ひがけないお手紙を頂いて、驚喜した、そして、君の名を見るや否や、「オイ、來たよ〳〵」と細君にさし示したのであつた、實は數日前から折々君の名が僕のうちの食事の時（その時でないと顏が合はないのだ）に長火鉢附近でとり交はされてゐたのだ、そして、そのもとはと云へば、丁度今日の手紙で君の云つて呉れた通りの用事だつたのだ。

昨年あたりから、當地に永住することにきめて、それには第一住宅を作らねばならぬ、作るには金が入る、それが一文もない、といふ樣なことから「短冊半折會」といふ樣なものを考へ出して、此ごろからぼつ〳〵とそのビラなどをまいて見ると、多少の反應はある。けれど、一度これを公表して後に、全然失敗する樣では不面目この上なしと思ひ、痛し痒しでまごついてゐたのだ。けれど、どうしても今更ら東京へ出かけてゆく勇氣がないので、イチかバチかの氣持で、今度、（この三月號の雜誌「創作」で）それを發表することにした。君の名が話題に上る樣になつたのもその雜誌の記事がもとだつたのだ。

その三月號が今日出來るので、一部、送らせることにしておいた。あんな調子で、事に當つて見ようと思ふのだ。豫定通りに行かうとは思はないが、全然失敗はせぬとおもふ。とにかく、大小にかゝはらず、一軒、巢をば作ることにする。そして、是非、君にその設計を賴む。これはもう既定の事實で、昨年のいつであつたか、そのため、金田晴一君あてに、君の住所を問合せたこともあつたのだつた。

何しろ、向う一年間の豫定の、例の計畫の進捗狀態によつて全ての豫算を立てようといふので、氣の長い話なのだ。半年もたてば大體の見當はつかうと思ふので、その節、僕、君を訪ねて行つて萬事お話する。とにかく、今日は萬事引受けてだけおいて呉れゝばいゝのだ。雜誌は今後毎月送ることにする、筆無精者の手紙代りにもなるわけだ。

とにかく一度沼津に來て見ないか。すぐ來て貰ひたいけれど、今度の日曜の四日には僕靜岡で講演會があつて引張り出されるので、その次ぎの日曜（十一日だね）に、やつて來て呉れ。いま君はどこにつとめてゐるね。それとも自宅營業か。つとめてゐるとして、土曜の午後から來て、翌日一日遊んで歸れる樣ないゝ汽車があるのだ。何しろツラとツラとをつき合せてからの話でないと、一向にはかどらない。とにかく十日に出て來ることゝきめておく。

萬事その時にゆづる。何しろ、今日の手紙は難有かつた。鈴木君にも同じく無沙汰してゐる、君よりよろしく。

二月二十八日　　若山牧水

村井武兄

九

三月五日、靜岡縣沼津町在楊原村上香貫より、東京、村井武樣宛（手紙）

十一日は殘念だナ。止むを得ない、十八日を待つことにする。

都合で、鈴木君をも誘つて來ないか、これは君の意見に任する。沼津驛に夕方着く汽車、（東京驛發午前十一時五十分、沼津着午後四時四十分。東京發午後一時五十五分、沼津着六時二十六分）がある、このいづれかを選び給へ、そして、そのいづれかを知らせておいてくれ、驛に出てゐるから。

僕の小さな巢の事に就いて非常に君が興味を持つて呉れる事を何とも云へぬ嬉しさに思ふ、何年か前からヒヨイ〳〵と心に浮んでゐた幻影が何だかいま漸く事實化しかけて來た意外さと喜びとをもまた感ずるのだ。何だか、眼に見えぬ因緣が我等二人の間をつなぎつけてゐたもの〻樣にも思ふ。

今のところ、まだ痴人夢を樂しむの圖で、一向に

確かな事が云へないのだが、今年中にどうかして五千圓は作り得るかとおもふ、その結果によつて土地をば買ふなり借りるなりすることにする。とにかく此處にその夢の一端を語つて見ようか。(部屋の數と樣式とをば別紙に書く)。

離室(ハナレ)が主で、次ぎが主婦室、老人室(お袋がまだ坪谷で頑張つてるのだよ、三十九歳になつたセガレを、まだ一人歩き出來ないものとして一向に信用せん、で、先づこの一室を作つておいて、强制執行のもとにこゝに引張つて來ようとおもふ)となる。二階は主として來客宿泊用なのだ。發行室といふのは玄關を兼ねた書生部屋なのだが、大抵平常二人づゝゐろ平均になつてゐるので、先づ六疊として、中に衝立(ツイタテ)でもおいて、二人坐らせるかどうかしようと考へてゐる。書生の役目と、雜誌の庶務の役目とを持つわけなので、こま〳〵した書類等を入れる戸棚風のものを此處では重視したいのだ。

全體の地所は約三百坪、といふ豫定でゐる。庭は落葉樹常綠樹を混植し、芝生にし、極めて平凡な明るいものにしたい。

地所の都合では掘拔井戸にして、水を極めて自由に使ひたい、書齋の窓あたりにも管を引いて、氣の向いた時に手を洗へる樣にしたいなどゝ空想してゐる。

僕のいま住んでる四五丁北東に香貫山(カヌキヤマ)といふ延岡の愛宕山を少し小さくした位ゐの小松ばかりの山がある、出來るならその山の根つこに場所を構へたいと思ふのだけれど、これは十八日に君に來て貰つて、その場所などを見て貰はう。

すべて夢想談なのだが、先づ笑はずに、大體斯うなるものと君の方でも夢想して、電車の往復にでもちよい〳〵考へをめぐらしてくれたまへ。準備が出來なかつたら、兩人して大に笑ふことにしよう。

村井君、僕は、このあひだから自分の勝手の事ばかりしやべつてゐて、誠に濟まなかつた、先日も第一にその事が頭に來たのだけれど、何だか書きづらくて、わざと默つてしまつたのであつた。君から通

知を受けた時もまたさうであつた。千代ちやん(幼名で呼ぶことを許して呉れ)のこと、まことに、何と云つていゝか、今でもわからない。意外であつたし、ちひさい人たちもある事だし、ほんとうに、君はどうするだらうと思つた。申しにくいけれど、いま、僅かに此處で弔詞を申し述べる。

その後、どうしてゐるね、ほんとうにさう思ふと、あまりに平常無沙汰がちにすごして濟まなかつた、どうか許してくれたまへ。

とにかく十八日を待つ。忘れずに時間を知らしてくれたまへ。

今日はこれで筆をおきます。

三月五日　牧水

武君

夢想の家屋 (別紙)

六疊　離室二室(小生の書齋)

洋室、應接室を兼ぬ、暖爐を設けたし。

四疊半

和室、廻緣とし、圍爐裡を切りたし。

六疊を東、北向き、和室を南、西向としたし。

母屋(六室)

四疊半　主婦室

三疊(又は四疊半、)　老母室 ｝明るく暖く

三疊　子供室 ｝

二疊又は三疊　女中室

六疊　雜誌發行室(玄關を兼ぬ)

六疊　茶の間

二階(二室)

六疊

三疊

他に臺所(板敷)、便所、湯殿、玄關(いりくち)(土間)物置等。

一〇

三月十一日、沼津町上香貫より、宇都宮市、神原克重樣宛(繪葉書)

神原君、四月二日大會散會後、夕方から伊豆長岡溫泉にゆき一泊、翌三日修善寺溫泉晝食、夜湯ヶ島溫泉着、二三日滯在、といふ風で五六人出かけようと思ふ、君も仲間に入りませんか、一泊四五圓、不飮、詠歌三昧に入らうといふのだ。とにかく近づきました、何だか、オツカナクテ、何事も手につかなくなつた、助けて呉れ！

三月十一日　　若山牧水

一一

三月十七日、靜岡縣沼津町在上香貫より、東京、和田山蘭樣宛（手紙）

病氣はそんななのか、困つたなア。

土肥がその神經痛にはたいへんにいゝんだがね、思ひ切つて一月ほども行つて見ないか。日が二圓くらゐならいゝとおもふ（その樣に話をして）、そして、一度に拂はずとも、あとを幾月とかの月賦にするといふ樣なことも出來るだらうとおもふ、君にその心があれば僕早速問合せて見るが、どうだね、神經痛と胃腸とにいゝのださうだ。（それとも、僕、たてかへてもよろしい。）

大會には駄目かナ、顏だけでも見せて呉れるといゝとおもふが、無理をせぬがいゝかも知れぬ。開會辭は高鹽君に頼まう。

「酒壺」評をまだ遲れてるが、月末までには書かう。二三の雜誌に出てゐたが、割に同情ある批評だつた、雜誌はみな送らせた。

大會に出る者に、何かするのかね、宿所の問合は？

「酒壺」の代を二册分だか僕預つてゐるわけだ、一册は服部純雄、一册は名古屋の何とかいふ人の分と。恰好な小爲替の來た時に送ります。

先月來の中耳炎がまだ直らぬ、外聽道炎といふのまで併發したのだ、耳といふものは痛いものだねエ。

土肥溫泉のこと、よく考へて、出來たら出かけることにしたまへ、いろ〳〵疲勞も直るだらう、一月はゐなくては駄目とおもふ、藥をも持つてゆくのだね。

「酒壺」の廣告、どうせあいてるのだからもう一號出します。

大會、今では何だかオツカナクなつて來たが、乘りかけた舟で、やむを得ない、斯うなると一種凄愴の氣を帶びて來る。然し、いゝものにしたい。

悲觀しないことだね、そのためになほいけないのではないかナ。

夫人によろしく。

三月十七日あさ三時、　　牧水

山蘭兄

一二

三月十七日、靜岡縣沼津町在楊原村香貫より、下野國、高鹽背山樣宛（手紙）

高鹽君、「峽間」は、それではその樣にしませう、萬事、手ぬかりのない樣にすることにしませう。君の序文はやはり入れた方がいゝとおもふ。

それから、大會の開會の辭を、君、述べて下さい、和田君が病氣で（腰のたゝぬ病氣ださうだ、一種の神經痛）多分出られないといふから、是非君に頼みます。

もう一つ、二日閉會後、すぐ伊豆長岡溫泉にゆき一泊、三日修善寺晝食、夜湯ヶ島一泊（若しくは二三泊）といふことに、七八人して出かけますが、君も仲間に入りませうよ、飮まないから金はさうかゝりませんよ、湯ヶ島は山櫻のさかりとおもふ。

小生、まだ耳直らず、がんぢがらめに頭を卷いてゐるので、ひどく氣分重苦しく、困つてゐます。實に爲事が多いんですからねエ、イヤになります。

歌が、今月は來ませんでしたね。

三月十七日朝三時　　牧水

高鹽兄

一三

三月廿三日、靜岡縣沼津町在楊原村上香貫より岡山市、三浦敏夫樣宛（手紙）

三浦君、多分もう藤井君も歸つて君の方へ訪ねたかも知れぬとおもふが、一つ大會に君の銘酒を一樽寄贈して貰へまいか、四月一日夜の宴會費が、(何分モサ揃ひのこと〻て) 甚だ覺束ない、さればとて蒸發しかけた氣分を折角のところでツブスのも誠に殘り惜しい、卽ち、君にこのおねだりを申込むわけである、四斗樽は大きすぎやうし (別に苦しまないがネ) 一斗か二斗のはないかね、三十一日まで創作社に屆く樣にたのみ度いものだ、その代り、「神露」の廣告を一頁出しますよ、五月號に。

君が自身出て來て呉れるとなほい〻なア、二日から伊豆の溫泉廻りをやる、廻りと云つても三つ四つほどで、あとは昨年君が僕をだまかした湯ケ島溫泉に滯在するのだ。

とにかく、色よき返事を待つと云爾。

三月二十三日　　　　牧　水

三浦敏夫兄

一四

三月二十六日、沼津在上香貫より、東京、村井武樣宛 (繪葉書二枚)

村井君、先日は來て呉れてほんとに難有かつた、何しろ、久し振に僕も身心のたがを外した氣持がした、たゞ、それが過ぎて、多少、あがつた傾向あり、ために君をしておちつかしめなかつたかとあとで、恐縮したことだつた、どうか惡しからず。

(その二)、今朝は、お手紙と圖案と、難有う、家内中打寄つて鑑賞した、流石うまいものだと思つた、斯んなのを見ると、明日にも工を起したくなつて困つた、何しろ、例の大會といふのを控へてゐるので、それが濟んでからまた萬事申送ります、

二十六日　　　　若山生

一五

四月八日、伊豆湯ケ島にて、岡山市、三浦敏夫樣宛 (繪葉書)

廿七日から毎日二度づゝ丸運店へ日參、來ない〱で終に四月一日になつた、午後になつた、いよ〱諦める氣になつた午後五時何分かに丸運運送店より入荷の電話、いよ〱實物が會場に屆いた時百數十人總立になつた光景をば宜しく御想像下さい、地曳も大當、二日夜長岡溫泉行が九人、此處まで來たのが七人、一昨日五人歸り、現に小生共二人殘つてゐる、いま妻からの手紙によると小生宅にもまだ三四人ごろごろしてるさうです。

四月七日　　　　牧　水

一六

四月十四日、沼津町在上香貫より、三河國、金澤修二樣宛 (手紙)

修二さん、たいへん、おちついて御元氣の樣で、嬉しく思つてゐます、どうぞ、出來るだけ氣をおちつけて、あまり我儘を云はずに、ほんとうの「健康な人」になつて下さい、皆、ねがつてゐます。

小生は七日か八日に湯ケ島から歸りましたが、何しろ、腰は拔け、魂も拔け、わがみでわがみがわからない狀態でありましたので、今日まで、何處へも葉書一本よう書きませんでした。阿父樣からもわざ〱お手紙をいたゞきましたが、君よりよろしくおつしやつて下さい、姉樣にも同樣、ねがひます。

五月末、お訪ねします、そして永年の樂しみを果たしに鳳來寺山へ登ります。佛法僧よどうぞ、待つてゐて呉れ。

修二さん、大會はホンに面白かつた、一日より二日が、二日より三日目が、といふ風にだん〱面白かつた、それ〲の記事もよう書けとる、五月號は恐らく君など涙なしには讀めまいと思ふ、泣き笑ひですね。每年でも每月でもやりたくなつたが、每年にしろ、やつたとしたら命は幾つあつても足りません。

塚田さんが、一昨日きりで、稻玉をよしました、丁度義妹 (潮みどり) が君と同じ樣な事をやつて入院させてありますので、その見舞の歸りに一昨夜同

君を引つ張り出し、パリーアンの奥二階で、心ばかりの送別會をやりました、山本の兄さんを呼ばうと思つたけれど、何だか（そんなところへばかり引つ張り出す樣で）氣がとがめてよしました。君がゐたらと、一座して惜しみました。

他には何の報導も無ささうだ、君の親友であるタコ、ミコ、マコ、フコ族など、みな丈夫です、就中フコの亂暴と來たらお話になりません。二階組も、まだ大會氣分が完全に拔けない風で、小生同樣、フラ〳〵してゐます、笹田君は、明日、耕文社の慰安會に出て一緒に長岡に行くことになつてゐます。彼近來、イヤにメカス傾向あり、且つノム形跡あり。オヤヂ、多少悲觀の態であるのであります。明日も耕文社のアクトウ共と一緒にさぞノムことでせう。

狩野川の川口の昨今を覺えてゐますか。

とにかく、速く完全によくなることです。

四月十四日午前三時二十分　牧　水

金澤修二兄

一七

四月十四日、沼津在上香貫より、千葉縣、細野春翠樣宛（手紙）

細野君、どうしたネ、小生漸く昨日あたりから机に向ふ元氣になつた、然し、何彼につけて思ひ出されてたまらない、ほんとうに大會は愉快だつた、あとになるだけ、よかつた、

細野君、寫眞はどうした、五月號に繪葉書の題目だけでも發表する必要がある故、出來たゞけ全部送つて見せて呉れ、その中から恰好なのを選ぶのだ、急ぐよ。

君の方の身の上の事はきまつたかね、氣になつてゐる、然し、とにかく小生は君の炭燒說に贊成だ、此處に偶然長塚節の手紙にその事の書いてあるのを見出したので、切拔いて送る、

机に向ふとなると、半月分の爲事が鬼の樣なつらをしてオレを見てゐる、片附けざるべからず、いろ〳〵書きたいが、失禮する、手紙を呉れ、

十四日午前四時四十分　牧　水

細野春翠樣

一八

四月十八日、靜岡縣沼津町在楊原村上香貫より日向國、河野スヱ樣宛（手紙）

今日、鐵道便で山葵漬(ワサビヅケ)と秋刀魚(サンマ)の干物とをお送り申しました、ワサビヅケはたべるだけ桶の中からとり出してそれに砂糖醬油を少しかけ、練(ネ)るやうによくかきまぜてたべるのです、お刺身のツマなどに結構です、サンマは小生の記憶では日向地方にはとれなかつたとおもふのですが、只今は汽車でよそから廻つてゆくかも知れませんネ、それからあとの參考のために、何日に屆いたか、一寸知らせて下さい、荷物の宛名は兄上あてにしておきました。

先日の雲丹(ウニ)はまことに結構でした、ちひさい時から好きでしたが、それで福井だの若狹だの下の關だの長崎だのと雲丹の名所として知られてゐる土地のものをそれ〳〵とりよせてたべてみましたが、やはりちひさい時にたべた都農のものが一番うまかつたといふ氣がしてゐたのですが、今度二十年目ぐらゐにたべてみて、やはりその記憶が確かであつたことを知りました、あの海苔(ノリ)はどうしてたべるのがいゝのでせうか、味噌汁に入れてたべてたいへんおいしかつた海苔があつたとおもひますが、あれとは少しちがふ樣ですネ、カキモチも難有うございました、こちらではどうしたものか斯うまく出來ません、あまりにうまいので、子供たちにたべさせるのがもつたいなく、かくしておいて小生だけで少しづゝたべることにしてゐます。

小生の忙しさは全くお話にならぬほどです、で、たゞ、これだけにしておきます、兄上はもうお歸りになりましたか、母はいつごろまで滯在しますか、春のお產はいつごろでせうか、みな〳〵によろしくおつしやつて下さい。喜志がこの手紙を書く筈でしたが、この二三日風邪でやすんでゐます故、大急ぎで小生が書きました、亂筆御めん下さい、あなたはずつとお丈夫ですか、いつかこゝまでやつておいでな

さい。それから例の延岡中學へは毎月送金することにして、今までに四十圓だけ送つておきました。

四月十八日　繁

姉上様

鐵道便の荷物の中に雜誌を入れておきました、あの中に小生たち一家族の寫眞が出てゐます、この三月の十日ころにとつたものです。

一九

四月二十三日、沼津在より、三河國、金澤修二樣宛（繪葉書）

誘惑々々偉大なる誘惑、鳳來寺線繪畫面、難有うございました、直ぐにも出かけたく、ひまあればあれをひろげてゐますがやはり五月のなかころになりませう、必ず參ります、姉樣其他へよろしくおつたへおき下さいまし、たいへんお丈夫さうに思はれて愉快です、第一、すべてを規律正しくなさる樣になつたことが何よりです、それさへ續けば萬事しめたものです、

茂三郎兄と昨日三島へ行く筈でしたが、私の返事が遲れたゝめ、ゆけませんでした。

いつも病人のこと、お氣にかけ下され難有うございます、彼女もたいへんよろしく、もう起きて坐り得る位ゐになりました、

四月廿三日　若山牧水

二〇

四月二十九日、伊豆畑毛より、千葉縣、細野春翠樣宛（繪葉書）

朝湯のなかにて
二人聲を合せ
伊奈節にて唱へるうた

洗ひあげたやスミヤキさんをソラちよういとつまみこんで、ちよういとつまみこんで、このお湯で、ソラコイアバヨマタオイデ

四月廿九日

二一

五月四日、沼津町在楊原村香貫より、三島町、塚田靜保樣宛（手紙）

塚田兄、先日は飛んだお騷がせを致しました、二三日打ち續けて飲んでゐた宿醉があゝした思ひがけない失禮を働くことになつたのでした、どうかおゆるし下さい、奥さんにもよろしくおつしやつて下さい、

例の風邪を引きました故、お藥をいたゞかせて下さいまし、熱も幾らかある樣ですが、たいしたことはありません、鼻水が頻りに出て、咳も折々出ます、鈍い頭痛があり、氣分がすぐれません、いつもやる通りの容體です、

稻玉樣へ御厄介になつてゐた病人もこの三十日に退院して今は小生宅にやすんでゐます、いろ〳〵お世話樣で難有うございました、もう暫くこちらで（室でも借りて）遊ばせるつもりでゐます、

五月四日　牧水生

塚田兄

二二

五月十九日、沼津在上香貫より、三河國、金澤修二樣宛（繪葉書）

修二さん、すつかり御無沙汰、申譯なし、忙しいといふのだか氣拔けがしたといふのだか、とにかく極めてぽかーんとして何か知らあくせくしてゐるのです、いよ〳〵茂三郎兄もおいでゝした、沼津は寂しくなるばかりです、來月初めまでにうんと爲事の溜つたのを片附けておいて御地へ出かけるのを樂しみにしてゐます、昨夜馬込の海に烏賊釣にゆきました、

十九日　若山生

二三

五月十九日、沼津上香貫より、濱松市、綿引惣吾樣宛（繪葉書）

綿引君、當用のみ取急ぎ。

中學校の校長の中に左の二人の現任校が解つたら敎へて呉れ。

（高松か）　御手洗　學

（何處か東北）　宇都宮虎雄

これは校長でなく先生だらうが、

（能本か）　豐島　貢（國語）

（？）　梅木重二郎（數學）

「山櫻の歌」を送らうと思ふのだ、昔の先生たちだ。

近々、どうかすると訪ねてゆく、ゆけば先づ來月中旬だ、

大會後、ナマケグセがついてほと〳〵困つてる。飲む。

元氣か。

十九日夜　　若山牧水

二四

五月二十二日、沼津在上香貫より、宇都宮市、河脇萍花樣宛（繪葉書）

行つたナ、若葉の眺め「花」（註、某婦人）のながめなど、いかゞでした、

一體北の方へはいつ行くのです、それとも溶けて流れたわけか知ら、樣子知り度し、行つてしまうと一寸逢へないと思ふし、この六月の十日ころ東京へゆく故、それまでゐるなら其處まで延さうかともおもふ、樣子知りたし、

二十二日　　牧　水

奥さん、其後御無沙汰してゐます、おちひさいたちも皆さん御元氣ですか、（繪葉書畫面に）

二五

六月六日、靜岡縣沼津町在楊原村香貫より、三河國、金澤修二樣宛（手紙）

修二さん、默つてゐて、ごめんなさい、

三十一日の晩に服部安成の兩豪と飮んでその翌日からすつかりおなかをこはし、初めはいつものことゝて驚きもせずにゐましたが、どうもいつものと違つて、今日までまだ下痢と腹痛がとまりません、二日三日四日と隨分に苦しみ、昨日あたりから起きられる樣にはなりました、

このいゝお天氣を見てると、淚が出ます、もう大抵いゝ樣ですから、あと二三日樣子を見て直接にあなたの方へ參ります、そして一晩御厄介になり、鳳來寺山へ登り、出來得れば四五日滯在、歸りにまたお宅へ一晩御厄介になりたいなどと勝手なことを考へてゐます、そして、出來たら其處から步いて濱名湖の方へ出たいと思ひます、

五湖、身延、梅ケ島は自然消滅です、

皆さんにどうぞ吳々よろしくおつしやつて下さい、

六月六日　　牧　水

日と時間と、きまり次第、打電します、

今日で四五日、オモユばかりすゝつてゐます、まぶたの皮の上の方が骨の下に吸ひ込まれてゐる心持がしてゐます、不愉快です、（以上、原稿用紙欄外に）

二六

六月十日、靜岡縣沼津町在楊原村上香貫より、三河國、金澤修二樣宛（手紙）

金澤君、實に意地の惡いもので、どうしても駄目です、昨夜も三度通ひました、痛みだけはとれて（用便の前後少し痛む）も、この、通ふのがやまぬのです、汽車にゆられたら一層馬力をかけて通ふことになるらしく豫想せられ、自からにして汗ばむ氣持なのです、無論行つたとしてもこの分ではたゞ君にお逢ひするだけにとゞめて鳳來寺山はまたの時にとつておくつもりには、昨日あたりからきめてゐたのです、

たいへん待つていたゞいてゐて、この有樣では何とも申譯がありませぬが、どうかよく〳〵のことゝ惡しからず御推量下さい、そして、姉上初め皆々樣

に君よりお詫びを述べて下さい、

お逢ひしても飲食不能、(飲だけは少量を用ふ) 談話不活潑、外出不安心では、河童を岡にあげたもおんなじで、甚だ間の拔けたものではあるのです、一つ元氣をとり返した上、お伺ひすることに思ひ決しませう、

今日、もう少しして三島の塚田君ところに行き、よく診て貰つて、都合では長岡にでも行つておなかを溫めて見ようと思ひます、今朝、二時から眼を覺してゐて (行くとすれば五時五十分ので出かけるつもりでしたから) 只今、漸く、右の樣に決心した次第なのです、

萬事、惡しからずゆるして下さい、

十六日に上京、十八日から印旛沼を初めにあの邊の沼めぐりをし潮來から銚子に出る豫定になつてゐるのですが、多分、それにも缺席することになりませう、そして急いで歸つて來て「七月號」にかゝり、「半折」を書き、他の選を急ぎ、來月早々、五湖を手始めに身延、新城、鳳來寺山と出かけませう、あゝ、速く元氣よ出て來て呉れ!

どうか、がつかりしないで下さい、賴みます、

六月十日朝四時二十分　　牧　水

修　二　樣

今も今とて机の上にひろげてある地圖が癪の種です、

二七

六月十一日、伊豆長岡橋本屋より、三河國、金澤修二樣宛 (繪葉書)

これだけは豫定通りに昨日三島で診察を受け此處へやつて來ました、病氣よりも何だか一種の氣づかれが一時に出て、ぼうつとしてしまひました、何も見ず考へずに十五日まで寢てゆきます、あたりの小松山に雨がこまかに降つてゐます、

十一日　　牧　水

二八

六月十一日、伊豆長岡橋本屋より、沼津創作社氣附、黑木傳松樣宛 (繪葉書)

古戰場に來てゐる、月初めからおなかをこはしてどうしても直らぬので溫めて見たらと出て來たのだ、十五日までゐてゆく、タブノキバルだのアカイガツだの、思ひがけないなつかしい名をきくものだ、十七日に出た時、せめて二三時間でもツボヤタイムを作りたいものだ、君たちは夜は休みなのか、休みとすれば何時からだ、とにかく兩君に君より宜しく。

十一日　　牧　水

二九

六月十三日、長岡橋本屋より、三河國、金澤修二樣宛 (繪葉書)

お手紙難有う、ほんとうに詩を讀む樣な心地で拜見せられます、目下の君の靜かな境地が羨まれ尊まれます、小生は此處でも爲事をする積りで持つた來たのですが、つかれが出たか、毎日、障子をあけ放つて枕ながらに向ふの松山の雨をみてゐます、

十三日　　牧　水

三〇

六月十五日、伊豆長岡より、三河國、金澤修二樣宛 (繪葉書)

速いもので、こゝにもう六日ゐたわけです、これからぼつ〳〵歸ります、不養生ながらの養生ゆゑ、思ふ樣にはきゝめもなかつた樣ですが、でも來たころよりずつとよくなりました、いまお別れの永湯をして來たあと、崖から飛ぶつもりでビールを一本あけました、溫い奴をば毎日用ゐてゐましたが、ビールは恐かつたのです、明日は上京、

十五日正午　　牧　水　生

三一

七月十一日、靜岡縣沼津町在楊原村上香貫より大阪市、大島武雄樣宛 (手紙)

十五日に沼津着、十六日富士登山とのこと、登山の方は今年の小生の身體では駄目のことゝ諦めてゐましたが、お逢ひ出來るのは嬉しいと樂しんでゐたところ、因果なことが出來ました、以前沼津にゐていま三河の鄕里に歸つて居る金澤修二君といふのが肺がわるくて非常に淋しがつてゐたのです、そして、是非來て吳れと云つてよこしてゐたのですが、今日東京から村松道彌君が來て、これから金澤君ところにゆく、出來たらあなた（小生）をも連れて來て吳れとのことであつたといふのです、どうも斷りかねて、これからか明朝か出かけようと思ひます、行けばとても一日や二日では離しますまいし、小生の方でも行つたついでに鳳來寺山に登つて來たいと思ひます、さうすると丁度行きちがひになります、いつそもう一週間か十日も延ばしたらどうです、そちらの方の都合で延ばせないとすると、今度は殘念でもお目にかゝれぬことになります、どうぞ、あしからず許して下さい、

小生、身體まだ完全でなく、あちらにゆくのも無理なのです、あちらは、

三河國新城町　　金澤修二方

です、但し、鳳來寺へ登つたあとだとすると急用は足せないかも知れません、

何とも殘念だが、平田君へもよろしく〳〵傳へておいて下さい、

先日、服部純雄居士と邂逅ありし由、羨しかつた、

七月十一日　　牧　水

大島武雄樣

今年は、季節ちがひで、まだ三人とか不二に登つた人はないさうですよ、

雪がたくさん見えてますからネ、

三二

七月十六日、鳳來寺山より、三河國、金澤修二樣宛（手紙）

修二さん、終に此處に登つて來た、樹木と、鳥禽と岩石と溪流と霧と雲と雨との世界です、難有しとおもふ、

昨日、此處に着くとすぐ聞いたことですが、加藤さんといふ人が昨日の午前にわざ〳〵此處まで登つて小生等のことを賴んでおいてゆかれたさうです、悉く恐縮し感謝しました。小生もとりあへず禮狀さし出しますが、お宅よりもよろしくおねがひ申します、その加藤さんと、只今この寺の留守居役をしてゐる靑年僧氏とが極く親しい仲だなどといふのも奇緣でした、

それからいろ〳〵厄介な用事をば村松君から直接お傳へして貰ふ樣に同君に賴みました故、何分宜しくおたのみ申します、

四五日、時の樣子ではもつと永く、滯在してゆきたいものに考へてをります、今日はブラ〳〵この寺の室內で暮し、明日からはもつと奧の小さな別莊といふのにお辨當を持つて出かけます、

阿父樣初め兄上その他皆々樣へ宜しくお傳へ下さい、

數日後、またお目にかゝります、

十六日午前　　牧　水

修　二　樣

三三

七月十七日、鳳來寺山より、三河國、金澤修二樣宛（手紙）

どうも、驚いた、土砂降りの中を一人の人が登つて來て、いきなり「若山といふ人のゐる寺は此處だらうか」といふ、ギヨッとしながらその旨を答へると、斯う〳〵だといふ話、また二度びつくりしたことでした、

御心づかひのほど、全く感謝に耐へません、何ともお禮の申しあげ樣もありません、どうしていゝかと惑ふほどです、たゞ頓首再拜致します、皆々樣には君より吳々宜しくお傳へ下さい、

御送り下すつた品々、確に難有く頂戴致しました、淚の出る程嬉しい品々です、

每日の豪雨で、室內にのみとぢこめられてゐます

が、案外に心神平安です、但し、たゞ徒らに平安なだけで、まだ何もようせずに居ります、二三日うちには何か出來るかも知れない、

使の人、何と云つても上にあがらないのでとりあへず、これだけにとゞめおきます、

とにもかくにも難有うございました、

七月十七日午後二時四十分　牧　水

修　二　樣

村松君は今日立ちましたか、ゐましたら呉々よろしく、

三四

七月二十四日、沼津町在上香貫より、東京、村井武樣宛（手紙）

すつかり御無沙汰してゐて誠に申譯ない、先日一寸上京したけれど、大勢にとりまかれてゐて一寸の隙もなかつたので心に思ひながらお訪ね出來なかつた、歸つて來るとまた病氣になつて不景氣この上なしであつた、

お尋ねのこと、土肥溫泉といふが丁度いゝとおもふ、沼津から汽船で二時間、海岸で、その溫泉は神經痛に一番いゝと云はれてゐるのだ、平常はすいてゐるが夏はやはりこむさうだ、宿料はたしか三圓五十錢であつたとおもふが、一ケ月ときまればまた違ふことゝおもふ、今日早速そんな問合せを出して見よう、時間も迫つてゐるので、直接そちらへ返事のゆく樣にしておかう、それから、ずつと下田寄りになつた同じ伊豆の西海岸に加茂溫泉といふのがあるさうだが、これは僕知らない、海岸から三十町位ゐときいた、（土肥の土肥館といふのからは海まで三四町）東海岸となると河津、伊東、伊豆山、熱海と澤山あるが、これはいはゆる都人士でざつとうすることゝおもふ、僕のいつもゆくのは右の土肥館（土地では一流なのだ）だが、若しそこがもう滿員でゝもあつたら他の宿を其店から交渉させよう、

僕も八月一日から子供三人をつれてこゝの對岸、伊豆西浦村へ海水浴にゆくつもりでゐる、こゝには

溫泉はなく、たゞ、海に浸るだけの淋しい漁村だ、八月一日と云つても君のお父さんが土肥においでる樣になれば沼津からの船へお見送りしておいてから僕等は立つことにする、

土肥が都合よかれかしと祈りながら惶しい筆をおく、實は昨日三河の鳳來山から歸つて來た所なのだ、

七月廿四日　牧　水

村　井　兄

三五

七月廿四日、沼津市上香貫より、三河國、金澤修二樣宛（手紙）

修二さん、いつか行かうと思つてゐたところへ、案外早く行つた樣な氣がしてゐます、そして、その時もう幾度も來たところの樣な氣がしてゐたのでしたが、斯うして考へてゐますと、一層その感が強くなります、それほど馴染み深い土地として三河國新城が感ぜられます、

然し、實に思ひがけない御もてなしを受け、何ともお禮の申し樣がありません、流石の我儘者も手も足も出ぬのを覺えました、どうぞ御父上初め兄上、御二人の姉上たちに呉々よろしく申上げて下さいまし、小生の歸りましたあと、姉さんたちはがつかりなさりはせなかつたかと思はれます、

それにあなたの健康の恢復（といふより、今まで見てゐたうちで今度が一番健康さうであつた位ゐ）してゐたのが嬉しかつた、速くその咽喉が直りますとネ、もう申分なしですけれど、もう一息のこと故かんしやくを起さずに早く〳〵直す樣にして下さい、

道彌さんは昨日午後歸つてゆきました、よく〳〵歸りたくない風でしたが、つとめ先から私あてにも手紙が來てゐたりしましたから、どうも惡留めすることも出來ませんでした、

家内中相變らずでした、たゞ、サ、ダニノダミゾウ氏がいつぞや癪を起したとやらで、まだ寢てゐま

す、やはり胃がわるいのらしい、昨日午後、彼一人を殘しおき、あとはねエやも連れ、千本濱にゆき、泳ぎました、そして歸りに粹多に寄り、家內食をとりました、

たゞ、爲事の溜つてゐるのを見るとつく〲いやになります、ことに今度はどうしたか私信用の手紙が六七十通も來てゐて、何か知らそれ〲の用事を持つて待つてゐられたにはうんざりしました、返事かきに二三日かゝります、

今日から午前二時起床をやりました、そして朝酒晝酒をやめることにしました、

向日葵がさしわたし一尺ほどの大きさで八本さいてゐました、トマトーは枝になるゐ〲と赤らんでゐました、たべすぎておなかをこはしました、

例の銀行のことはどうなりました、うまくカタがつきさうですか、どうか一日も速く無事解決のつく樣にと祈られます、ほんとにとんだ御災難で、お氣の毒でした、樣子をよくきかして下さい、

溜つてゐる爲事の片附き次第、伊豆へ渡ります、別に手紙認めませんが御父上初め皆々樣に吳々宜しく申上げ下さい、

七月廿四日　　牧　水

金澤修二樣

三六

八月九日、古宇、大谷屋より、沼津市創作社、大悟法利雄樣宛（手紙）

いま、沖に發動船が見えて來た、あれが來れば何か便りが來てるだらうとは思ふが、それまでに郵便局に行かうとおもふので、とりあへずこれを書く、

賴むものをいろ〲忘れた、

一、旅人に賴ましたのは、朝ウガヒをする時に用ふるコップだつたのだが解つたか知ら、とにかく、平常ビールを飮んでるコップもほしいのであれを全部（三つあるさうだ）ワレ物だからと斷つて船の人に賴んでくれたまへ、さ

うすれば別にウガヒのはいらない。

二、買へたら（爲替か何か來たら）上等醬油の四合壜（中野からとつてもよろし）を送つて下さい。

三、若セウガを三バばかり。

四、トマトが眞赤にうれたらそれを。もろこしはもう二三日おく方がいゝかとおもふ。

五、何か雜誌が來たら廻して下さい。

何だかまだあつたとおもふが忘れた、また明日だ。

僕も雲丹に足をやられた、フンガイして雲丹退治を始め、相當成效した。

ボイチエン大人（註、二男富士人）はおとなか知ら。

笹田君は元氣かナ、葉書はいつ出來る？これは官製がよかつたのだが、氣がついたか知ら。

ねエやによろしく。

あとはまた明日だ、

九日午後四時　　牧　水

としを樣

船に賴む荷物には若山行と書いておいて下さい。

（封筒裏面に）

三七

八月十五日、伊豆田方郡西浦村古宇、大谷屋方より、三河國、金澤修二樣宛（葉書）

金澤君、すつかり御無沙汰してゐました、旅人だけ四日から、小生等親子四人（富士人はるすばん）は八日から來てゐました、そして彼等四人は昨日沼津へ歸りましたが旅人だけは一泊で今日午後の船でまた引返して來ることになつてゐます、釣が無上に面白く來るとから始めて昨日まで夢中でした、さうもしてをられず今日から机を借りました、先づ筆始めに葉書かきを始めてゐるところです、何しろきびしい暑さです、御元氣らしくて結構です、茂三郎兄たちお歸りで、お賑かなことゝ察します、別に手紙書きませんせん故、皆々樣へ君より宜しくお傳へ下さい、月一杯こちらです、

十五日　　牧水生

三八

八月廿一日、伊豆田方郡西浦村古宇、大谷屋方より、三河國、金澤修二樣宛（手紙）

修二さん、また默り込んでゐました、御免なさい、寫眞、難有う、たいへんいゝぢアありませんか、僕には君がさうおつしやるのが解らない位ゐです、何れもみなそれ〲に面白いと見ました、そして大喜びをしてゐたところでした、今でも（とり出して見ながら）面白いと見てゐます、

あの橋のあたり、橋までの田圃の小路など、すつかり秋になつてゐることゝおもひます、かすかな淋しさが心に觸れて來ます、あそこあたりのこと、其處に君を置いて考へたりしてゐますと、

御家族皆樣、お變りありませんか、先日蔦子姉さんからお手紙頂きながらツイ御返事もよう出せずにゐました、君よりよろしくおつしやつて下さい、阿父樣初め兄樣嫂さまたちにも、

海岸にも倦みましたが、さりとてまた離れがたい氣もしてゐるのです、よく晴れた日に歩いて大瀨崎まで行つて來たいと考へ、それに書きかけたイヤな原稿を書き終へてからなど考へて、まだぼんやりと此處に寢起きしてゐます、大瀨へは舟では（小舟を發動船に曳かせて行き、あの附近で終日釣つて、そして夕方また曳かれて歸る）二度ゆきました、いい所です、崎全體を圍んだ老樹に、南洋ものらしい大きな草花なども生えてゐて、とにかく變つたところです、いまゝでは多く二三の人を連れて行つたので、今度は一人でゆき、一日、あの石の上に寢て來たいと考へてゐます。

其處の家庭生活に厭いた樣なお手紙でしたが、多分さうでもあらうと推察も出來ますが、それは然し、君が現在の狀態を脫せられない限り何處へ行かれてもさうだらうと思はれます。健康になり、自分自身を自分自身で處置してゆける樣になられぬ限り、さうした不滿はつきものだと思はれます、早くさうなられるか、それかまた當分のまゝで充分諦めておちついてゐれらるかの二つでせう、君が周圍に對して不滿な通り、周圍もまた君に對してそれに似たものを感じて居るものと見るが適當だらうとおもひますからそれをも多少君の意識に入れてお置きになる必要があると思ひます。

然し、それは別として武藏野の秋を見においでるのはいゝでせう、私も行きたい位ゐです、

眼の前に見えてゐる沼津も一寸戀しい、第一、何か早くむしや〲とたべてやりたい氣持です、何しろこの一ケ月ヱライ食事を續けて來ましたからねヱ、都合では三四日うち、または十日ころには、歸ります、

元氣はいゝ方ですか、

八月三十一日　　牧水

修二兄

三九

九月二日、沼津上香貫より、伊豆古宇、高島友次郎樣宛（手紙）

船中無事、兩船とも全速力、乘客亦た血相變へてシヤガミ込む、一杯々々なめずりながらも流石に醉ひ難し、そのうち河口を入れば我入道の氷會社など半壞、やがて左手の岸なる日東製氷も一棟全つぶれ（下敷の死人はまだ分明せぬ由）といふ風にて先づ滿目蕭條、船を降りて町に入れば全部道路暮しにて家中に人影無し、

早速車宿に入り乘車、田圃にかゝれば八幡の森あたり一面の野營なり、途中逢ふ者皆、張目して挨拶す、心自ら躍る、

家の近所もまたみな道路野營、門を入れば先づ木蔭に蚊帳見え疊見え人間見ゆ、

家内實に慘憺、足の踏處もなし、二階など、ゆがみ果てたり、

東京全滅（芝と何處とかの區を除いて）橫濱全滅の風說あり、詳細知り難し、三島はひどいさうだ、汽車も駄目の由、

第一困つたことは沼津に酒のないことだ、近所の小店はみな樽をつぶされ壜をこはされ、あとかたな

し、アートン勇を振つてこれより町中たんさくの上一升位ゐは見つけて來るでせうといふ有樣なり、それに托して船にことづけて貰ふため大急ぎでこれだけ書く、

今日はとても歸れない、都合では明日も怪しい、生方君ももう少し尻をおちつけておゐでなさい、いま、そこを出たつて動けないぜ、

宿の人を初め紐やのお爺さんその他へ呉々よろしく、

ことに宿の人には西瓜のお禮を家中して云つてゐたとつたへて下さい、

古宇も同じく不安の日だらうとおもふ、沈着と鋭敏とを祈る、

四〇

九月十八日、沼津市上香貫より、信濃、中村端穂宛（手紙）

お手紙、難有う、非常に身にこたへて讀みました、幸に横濱（金子花城だけ不明）東京共、重もなものは全部無事です、生命だけといふ副詞句を附ける必要のあるのが多々あるが、とにかくみな奇蹟的に助かつてゐます、そして、目下可笑しい位ゐに皆が相助け合つて一團をなしつゝ避難してゐる相です（大悟法を六日に上京させ、昨日歸着）、すべて、涙なしに聞けぬ話ばかりでした、

御厚意難有う、然し、今度の事は、一人二人の事でないので、具體的の慰安法といふのを行ふのは不可能です、で、せめてもの心やりに十月號を震災紀念號として、歌を除いて（五六人だけのせたし）全部その記事として殘しておくことにしました、

君に歌が出來てゐたら折返し送つて貰ひたいともおもふ、右十月號のために、（間に合ふかナ、合はなくば十一月號にします故、とにかく）

中村君、今度のことは然しよほど考へさせられた、何とかお互を生れ變らさすことに努力せねばならぬと思はせられた、君はさうは思はなかつたか、

ひどく疲れてゐる、まだ晝夜三四回づつやつて來るので、やはり安眠も出來ない、子供たちが痩せたよ、

「秋」がさすのか、「事」がさすのか、むやみと逢ひたくなつてゐる、どうかすると出かけるかも知れぬ、

東京（ことに下町方面の）全滅は僕のノミクヒの根源を涸渇せしめた傾向があり、目下夫婦默々として對峙しつゝある、いつそヤケダサレた方がさつぱりしてたかも知れぬとふといことなど唇を漏れむとす、

御一家恙なきや、特に宜しく、

十八日朝　　　　牧　水

柊　花　兄

四一

九月十八日、沼津市上香貫より、東京、長谷川銀作梧子樣宛（手紙）

銀作君、桐子さん、

いま一寸何ともよう云へないが、とにかく元氣か、ひどく疲勞を出しはしないか、

どうして乘つ切るか、當座の見當はついたかね、それに就いて何か僕たちにいふことがあるなら云ふだけでも云つてくれたまへ、

會社は大丈夫かね、若し駄目だつたとするとどういふ風にするつもりかね、あらまし聞かして呉れ、

桐さんは先づ一日も速くこちらに來るがいゝとおもふ、此際銀作君よりあなたの方が更にしつかりせなくてはならぬ位置に在るとおもふが、今の場合、身體でもわるくせられては大難儀だ、そのためにも靜かにこゝに來てゐるがいゝとおもふ、

幾らかでも小遣を送りたいとおもふが、振替が止つてゐるので、どうにもならない、それが利きだしたら少しでもどうにかする、家中、いま文なしだ、

樣子を一寸づつでも知らして呉れ、

山崎君には遠慮なくいろ〳〵頼むがいゝ、彼は苦勞人だから斯ういふ際にはつきあひいゝ男だ、

桐さんに、わかさんから四五枚着物が來てゐる、こちらにとつておかう、

とにかく、先づこれだけしか書けない、
九月十八日　　　　牧　水
長谷川御夫妻樣

長谷川君、あまり逸りすぎるな、充分落ち着けよ、喜志は、風邪(疲勞だネ)で、ブラ〳〵してる、

四二

十月十四日、沼津市上香貫より、信濃國、重田彌次郎樣宛（手紙）

重田君、

先日の、君の手紙を見た時、僕はホロリとした、丁度座に一家揃うてゐた(中には信州の義兄も)ところで、皆、ひとしく君の心に動かされてしまつた、

ところが、生憎くその前から風邪を引いてゐたのだ、今日もまださつぱりしないでゐる、風邪の熱と一緒に、今度の事變で傷んでゐた頭が、急に痛み出して、急性神經衰弱といふ風の狀態にもなつてゐたのだ、

とにかく、この廿日か廿二三日までに溜つてゐる雜用（この一月半、全然何もようしないですごした）と、十一月號とを濟まして、直ぐ出かくることにする、伊豆を廻るつもりでゐたが、それをやめて、五湖から甲府に出、小淵澤から八ヶ岳を越えたいと思ふ、なほ日がきまつたら改めて通知する、

君の方から東京へ出る、で、中村君をも君の方に呼ぶ樣に交渉しておいてくれないか、たか〴〵一週間位ゐしか日が無いので、どうかして一緒に逢ひたい慾望なのだ、

松原湖に着く日がうまく打合せ出來るか知ら、僕が着いてから電報でも打たうか、宿は何といふのにしよう、

斯んなことを云ふと、もう、腰骨がむづ〳〵と痛むが、とにかく此七八日我慢せねばならぬ、忙しいその七八日よだ、

萩原君たちにも、右樣、君よりよろしく、
十月十四日　　　　牧　水
彌次郎樣

四三

十月十四日、沼津町在上香貫より、京都市、坂部定弘樣宛（手紙）

坂部君.

先夜は誠に思ひがけなくお目にかゝり、非常に驚き、且つ嬉しかつた、折惡しく夜分ではあり、他に泊客もあつたりして、折角のお訪ねに一向お構ひもせずお別れして、あとでひどく心殘りであつた、どうか、あの場合故、惡しからず許して下さい、

なほその節は、これこそ思ひかけぬお見舞金を頂き、これまた驚きもし、ひどく喜びもしました、場合が場合とて、あの百十七圓の金が實に深酷に役立ちました、それ〴〵の人たちにお禮を云はうと思ひますが、一體これはどういふ風にしてどういふ人たちから寄せられたものなのでせう、單に、「君よりよろしく」だけでは濟まぬおもひがしますので、めんだうでもその詳細をお知らせ下さいませんか、おねがひします、

それからまた澤山なこと大好物の、しかも今年の初物である松茸をお送り下され、重ね〴〵、お禮の申し樣もない思ひをしました、「やれ〳〵これで漸く今年の思ひがとゞいた」といふ氣で、うや〳〵しく味ひました、いろ〳〵に調味して珍重しました、まだ、とつてもあります、

あれから風邪がひどくなり、ずつと床に就いてゐました、昨日から止むなく起きて、この一ケ月餘り溜めておいた用事の片附けかたにかゝつてゐます、かゝつてゐるといふより、茫然とそれを眺めて居ると云つた方が適當かも知れない、頭痛もするのです、

妻よりも吳々よろしく申しました、彼女も、氣づかれ客づかれで、半病人です、

あの時御同伴の齋藤氏へも宜しくお傳へ下さい、

雨森君にはいづれ手紙を書くつもりですが、なほ、君よりも右樣よろしくお禮を述べておいて下さい、

とりあへず、右のみ、認めました、
十月十四日　　　　若山牧水

坂部定弘樣

改名したのですか、

四四

十月十六日、沼津市上香貫より、名古屋市、尾山篤二郎樣宛（手紙）

すつかりオキアセ族になり切つたネ、キンランに石ころを包んだ形だ、

地震には驚いた、プラスになるべきものがプラスにならずにしまつたのなら結局おんなじだからまアいゝが、來るとわかれば現物の顔を見るまで手をつかねて待つてゐる樣な血のめぐりのわるいことはしないからネ、ちやアんともう一二ヶ月前から馬力をかけてそれだけのカタをばつけてしまつておいたのだ、そして舌なめずりをして待つてゐたところにあれだから驚いたよ、なんだか僕には地震が二度あつた樣でくやしくてしやうがない、

一時全く弱つたが、この二三日、漸く眼だけあけてゐる、悔い改めよ悔い改めよ、もう地震にはコリ〳〵だ、

然し、君をあの時東京に置かなかつた事は千ざいのイカンだよ、日本橋ヒモノ町邊からそれこそ完全に宙をとんで本郷めがけて突進する壯觀が終に想像すら許されぬことになつた、惜しい〳〵、

君のオヤヂ振の色あげしたとこを見にゆきたいが、穴埋工事でそこどころでない、細君によろしく、

十六日　牧水

尾山篤二郎樣

松茸で一杯つけたい日和だ、（封筒裏面に）

四五

十月十八日、沼津市上香貫より、信濃、中村柊花樣宛（手紙）

中村君、歌を見た、

矢張り題そのものが示せるごとく、どうも疲勞氣分が勝ちすぎてる樣だネ、もつと新鮮な、張り強いものを期待してゐたのだけれど、

僕自身も考へてる、いついつまで、同じ樣なことを云つてゐてよく飽きないものだと、そして、心の底の何處かには、舊いそれらと異つた何ものかゞ、泡の樣に浮き出ようとしてゐるのをも感ずる、而して一向に形をなして表れて來ない、強ひて表はせば、それこそ、どんなヘマな、ガラ〳〵と乾いたものが出て來るか知れないといふ氣がする、だから恐くて、手がつけられない、ゼイ〳〵咽喉を云はせてゐるゼンソク病者を側に置いてる樣な不快さが、その故に、常に身を離れない、

然し、中村君、どうしても大抵のところで、大手術が必要だ、このまゝぢア屹度歌がイヤになるよ、イヤになつたとしたら、あとの恐さが思はれる、

この間、彌次さんが、金二十兩を封入して、これで直ぐ飛んで來いといつてくれた時、僕はほんとにホロリとした、折も折、風邪を引いてゐて、それは實行出來なかつた、然し、行かずにはゐられない、今のところ、十一月號の編輯を終へておいてすぐ出かけるつもりでゐるが、例の振替がまだきかないでゐるので、それの利かぬうちは原稿を印刷所に持ち込めない狀態になつてゐるのだ、いま、他から都合をつける運動をしてはゐるが、それが若し出來るとしたらこの廿五六日當地發、富士五湖を廻つて甲州に入り、小淵澤から八ヶ岳を越えて松原湖へ出たいと思つて居る、そして其處から千曲川の上流を極めて東京へ廻りたい、スルト、君の方へはゆけない、すまないが、君が松原湖まで出て來てくれないか、若し小淵澤で落合へるとすると一層難有い、日取決定次第、お知らせする、が、先づ君の都合を聞かしてくれ、

郵便が此頃遲いからそのつもりで、

「アララギ」と「潮音」とが來てゐる、珍しく讀んで見たが、困つたものだ、どうでもこれは一奮發しなくてはならぬと思ふ、君も一つ考へてみてくれ、

社中の若い連中はいま一生懸命である、けれど、

僕等はもう其處にはゐない、微笑を以て眺めてゐるにとゞまる、然し、何に限らず夢中になつてる姿はいゝものである、

飛行機がとんでる、筆をおく、十月十八日午前十時、

柊花兄　　　　牧　水

四六

十月廿二日、沼津香貫より、靜岡市、村松道彌樣宛（手紙）

道彌さん、

菱花君のことは同地の社友コシカワといふ人から電報が來たので、知つたのだつた、あまりに突然だし、それにもう葬式も濟んだころに遲れて着いたので、とりあへず、同君と細野君とに問合の電報を打つたけれど（十九日に）まだ返事が來ない、しかも彼の死んだといふ十七日に彼からの葉書を（元氣な）受取つたりしてゐるので、まことに不思議でならない、明日は何とか云つて來るだらう、

別便で、「寒さしのぎ」を送る、羽織の裏などは細君のお古だけれど、がまんして呉れ、ほんとうに間に合せ千萬のものだが、萬事「此際」だから許してくれ、仕立てる筈だつたが、遲くなりさうなので、そのまゝ送る、

君の上京はいつにするね、僕も、ゆきます、來月初旬とおもふ、

廿二日、とりあへず右のみ、牧　水

道　彌　樣

四七

十月廿三日、沼津市上香貫より、長野縣、重田彌次郎樣宛（手紙）

重田君、どうも身體の具合わるく、日一日とあせりながらに遲れてゐる、

廿七八日當地發、卅一日か一日小淵澤着、二日か三日松原着といふことに、いま、豫定してはゐる、

なほ、當地發の朝、電報をうつ、

松原から、千曲川の上流に溯つて武藏の方へ出たいと思ふが、さうした道がありさうかネ、詳しくとり調べておいてくれたまへ、

中村君には小淵澤で出會へるといゝと云つてやつておいたけれど、返事未着、もう一度出して見よう、

旅費はどうかして作るつもりだ、松原の滯在費を持つて貰ふと難有い、それから久し振に布施をも訪ね、新妻の君にも逢つてゆきたい、

今度は、ほんとにお互ひの間で逢ふだけで、いつもの、大勢集ることをよさうぢアないか、あれはどうもいかん、

この十七日に千葉の鈴木菱花君が頓死した、その追悼や何や十一日に或は會合が東京で行はるゝかも知れぬ、とすればどうかして出席して來たいとおもつてる、君も一緒にゆけたらとおもふ、

以上、當用のみ、齒痛み、筆が持てぬ、

廿三日　　　　牧　水

行歌兄

四八

十月廿七日、沼津市上香貫より、長野縣、重田彌次郎樣宛（手紙）

重田君、漸くきまつた、明早朝、大雨でゞもない限り、出立する、ツイ十分前に十一月號を片附けた、今日一日と今夜とで、他のめんだうな雜用を片附ける、

廿八、九と五湖を廻り、三十日に小淵澤で中村柊花と出逢ひ、三十一日山にかゝる、とすると、多分十一月一日には松原湖畔日野屋に着くことゝおもふ、

學校内君あて、若しくは右日野屋宛に小生宛の郵便の行く樣にしておくから、學校と、日野屋とへ、君からその旨話しておいてくれたまへ、菱花花城の追悼會が四日になるか十一日になるかきまらぬので、それでまごついてゐるのだ、

やアれ〳〵、難有や、これで明日は草鞋がはけるといふものだ、どうか天氣であつて呉れ、

廿七日朝六時前　　牧　水

行歌兄

四九

十月廿九日、甲州河口湖畔、中屋ホテルより、
三河國、金澤修二樣宛（繪葉書）

昨日、うちをとび出し、此處着、これより舟を仕立てゝ西湖精進湖に向はむとす、照り降り曇り天候千變萬化、酒の味だけ變らねエ。ソレカラ美しいのはやつぱり美しいや。

廿九日　　牧　水

五〇

十月廿九日、精進湖山田屋より、沼津市、大悟法利雄樣宛（繪葉書）

アートンよ、何をしてゐる。小生、今日、靑木が原ですつかりいゝ氣持になり、この湖畔に到着、見れば渡し場の向うに立派な白亞のたてものが見える、訊けば精進ホテルだといふ、其處に行けと命じたところ、船頭煙い樣なツラをして一泊八圓ですよといふ、乃ちリサイミンして此處に來たが、此處にも一つの悲劇が起つた、それは歸つて話す、とにかくガタ〳〵慄へながら麥酒を飮んでるものとおもへ、悲しや〳〵。

廿九日夜七時　　牧　水

五一

十一月二日、信州松原湖、日野屋より、山口縣平賀財藏樣宛（繪葉書）

不二の裾野から五湖へ、それから甲州に越え、小淵澤から八ケ岳の高原念場が原といふを橫切つて信州地に入り、野邊山が原の曠野を步いて、昨日此處へ來た、これから都合で千曲川の水源を極め、三國峠を越えて武藏の秩父に入る積りだ、運惡く咽喉を痛め、元氣やゝ悄沈。今日は獰猛な風雨で、炬燵にしつかとしがみついてゐる。

十一月二日　　牧　水

五二

十一月九日、梓山より、北佐久郡、大澤茂樹樣宛（葉書）

甲州屋を出て少し步くと見渡す限りの枯木の原から遠く純白に雪を被つた一山が見えた、甲州の鳳凰岳ならむと思つたが、實によかつた、此處までの溪谷は意外に平凡であつたが、たゞ、四周の山の眺めはそれを償つて餘りあつた、途中で一老爺と知り合ひになり、それに明日三峰山まで案內させむとおもふ、此處の宿で例の SHIKANOYU の種族とまた一緖になつてゐる、

九日夕方六時　　牧　水

五三

十一月十一日、秩父奧、大瀧村落合伊豆屋より
埼玉縣、山田子之吉樣宛（葉書）

山田君、昨日信州千曲川の水源地帶から十文字峠といふを越えて秩父に入り、栃本といふに泊り、けふ三峰山に登り、今朝見て來た溪の眺めの美しかつたのが忘られかねて、また斯うした所まであと返つて來てゐます、地圖を開いて君の村を探し出し、これを書きました、一寸でもお目にかかりたいけれど、豫定より五六日も遲れてゐますので、明日は東京まで出てしまひます、いづれまたの機會を待ちませう、

十一日夕方　　若山牧水

五四

十一月十二日、武州三峰山の裏なる溪間より、
信州、大澤茂樹樣宛（葉書）

大澤君、十文字峠は素晴しくよかつた、三峰山はひどくつまらなかつた、三峰山をつまらなく思つた罪か、昨夜この宿につくとからおなかが痛み、難行苦行にしやがみづめだ、今朝もまだ痛むので、例の抵抗療法を少し念入りに試みつゝある所だ、天まさに降らむとして密雲諸峰を包む、どうも夥しく旅のあはれが身にしみます。（君の村を本牧村だつたとは思ふが、少し怪しいので（それで一二枚出したのだが）

重田氣附にします。）

十二日朝七時　　　　　　牧　　水

五五

十一月十四日、沼津市上香貫より、福岡縣、毛利雨一樓樣宛（手紙）

御手紙拜見、とりあへず返事認めます、

日常生活の平々淡々を歌はうとしてのあの騷々しさではない樣に私には思はれます、寧ろその反對で、何事にもあまりに大上段に振りかぶりすぎるあなたの癖があゝした歌を生んだのではないかと考へられます、鷄を割くに牛刀を用ゐた形があゝなつたのだと考へます、今少し落ちついてほしいと云つたのは其處を云つたつもりだつたのです、今少し觀照を澄ます必要がありはしないでせうか、あなたのは一から十まで全部感激の結晶で終始してゐる樣です、それはともすると感激の安賣にもなりがちのものなのです、

歌を自分の宗教とするといふことは、私の作歌そもそもからの願ひで、いまだに少しも變りません、（十年ほど前に出した「牧水歌話」といふのにもそんなことを書いておいたと覺えます）、現に作つてゐる歌、叙景であらうが、抒情であらうが、すべてそれから出てゐます、

ところで、あなたのいはゆる「いのち」の歌は甚しい未成品です、正月號にとつたあなたのものゝ中にもその「いのち」の歌は一首も入つてゐません、（二三首採れば採れると思ひましたけれど、他の間に挿入することは木に竹をつぐ形で、そぐはないと見ましたから全部略きました、）何故いけないといふと、それが、全部概念から出てゐるからです、一種の理屈となるか、說敎となるか、若しくは下手な演說使ひじみて來るからです、多く形式だけの、內容のないものが多いのです、

然し、あなたの行かうとしておゐでる心持は解つてゐました、今度のお手紙で、いよいよ成程とうな

づかれました、然し、只今のまゝではいつまで行つてもあなたの願ひは果されないと思ひます、あゝいふ風に徒らに外面的に、概念的に叫ぶことなく、それを心の內に含んで山に對し川に對し人事に對すれば、自から其處にその含まれた心が出て來るだらうと思はれます、

「長門峽」は佳いものでした、實は、この前の、十一月號掲載の分の時に少しアテられ氣味であつたゝめ、今度のこの多いお歌を見るのが少し恐しかつたのです、けれど、見始めると誠にいゝ氣持で、次ぎへ次ぎへと見てゆかれました、これには、この間の時の歌の樣な騷々しさが、ありませんでした、全く無いではない、（それはあなたの持味なのだからそれが全部なくなられても困るのだが、）かなりの誇張（感情にも言葉にも）があつて、それが却つて歌を輕くした所がないではなかつたが、先づ先づあの位ゐならいかにもあなたらしくていゝと思ひました、

實は私も夙うからその長門峽といふのに行きたくてゐたのですが、お歌を讀んで、一層その念を強めました、

亂筆でごめんなさい、云ひつくさないけれど、御判讀下さい、

正月號は賑かなものになりませう、

十二月十四日夕方　　　　　牧　　水

毛利雨一樓兄

小生も珍しくこの頃歌を詠んでゐます、二月號に全部出します、

五六

十一月廿日、沼津市上香貫より、信濃、重田彌次郎樣宛（手紙）

重田君、まだ、お禮も出さなかつたナ、

大勢してお騷がせして濟まなかつたが、久し振にお目にかゝつてたいへん安心した、といふ意味を阿母

さんに申上げてくれ、若草の君妹の君たちにも然るべくよろしくたのむ、

歸つて來ると、いつものことだが、イヤな爲事が部屋いつぱいになつて待つてゐるので、つく〲イヤになる。それに二三日はバカの樣になつてるし、漸く昨日今日机に向つてゐる有樣だ、

困つたことは新年號の締切が例年より一月近くも早くなつたのを知らずに旅先で悠々としてゐて、ヒドイ目にあつた、なに一つ間に合はないのだ（十二月號一齊休刊のためだネ）、いよ〳〵今年の暮はヨニゲだ、かくまつてくれる勇氣はないか、

小諸から、ありがたし、もうそろ〳〵先生さまになるのではないか彼女たちも、

今は鰺がとれない、何かそのうち氣をつけておかう、

中村からはほんとうにサフランを貴贈されて恐縮、早速用ゐてるがなか〳〵酒の味もいゝぢアないか、

今度は君直傳の卵黄氏を試みて見ようと思つてる、

何しろ、怠けたあとで、今日なども午前一時からちやアんと起きてるのだからね、

今日は何曜日かナ、この手紙が丁度コトスギの日などに着くといゝナ、

では、左樣なら、

十一月二十日正午　牧　水

行　歌　兄

五七

十一月二十二日、沼津より、三河國、金澤修二樣宛（繪葉書）

御元氣らしく、結構です、歌の御勉强はことによろし、實際惜しいものだと思つてゐたところですからネ、身體にさはらぬ程度で大におやりなさい、皆さん、お變りありませんか、隨分昔の樣な氣がしますお目にかゝつたのが、こちら相變らずですが旅人が足にケガをして三週間ほど澤病院に通つてゐます、片輪にはならずにすみさうです、西風が吹きだしましたよ、

お察しの通りうす暗い部屋に晝間も電氣をつけてクシヤ〳〵したツラをしてやつてをります、湖月どころですか、このごろ年に二度位ゐしかオナリバシを渡りません、最も清淨なるリサイミン氏として行ひすましてゐます、

旅はやはりよかつたやうです、第一、あんなにバカノミしても旅から歸つて來るとグツト身體のよくなるのが不思議です、いづれ紀行をかきます、では左樣なら、

二十二日　牧　水

五八

十一月廿二日、沼津市上香貫より、信州、大澤茂樹樣宛（繪葉書）

トウガンを、ありがたう、實に偉大なものですね、切るが惜しく昨日一日床の間に安置して眺めました、

佐久のあたり、もう隨分と寒いでせう、炬燵が戀しく梅漬がしのばれます、あれこれと思ひ出して來ると、またしても草鞋が穿きたくなつて困ります、

廿二日　若山牧水

（伊豆天城山わさび澤繪葉書畫面に）

十二月號のために例の旅だよりの葉書を整理しながら幾度か泣笑ひをやりました、一概にバカバカしいとは云ひ捨てられない、

君の方にこのわさびがあるのでしたかね、たしか、無いのでしたね、山葵漬を送りませう、ほんの少し砂糖を入れ、醬油を落してよくかきまぜ（皿などにとりて後）てたべてごらんなさい、一杯やれますよ、

五九

十一月二十三日、沼津上香貫より、三河國、金澤修二樣宛（手紙）

土肥の温度は沼津より袷一枚あたゝかいと一般に云はれてゐます、食物は品物の變化には乏しいがたべられないものではありません、三度々々先づ相當のものをば出す樣です、（土肥館にて）

但し、淋しくて君にシンボウが出來るかどうかは

カミサマでなくては誰も知らない、
小生も都合では正月元日から行くかも知れない、
十一月廿三日　牧　水
修二様
君の若山の若の字は常にウソ字です、

六〇

十一月廿四日、沼津市上香貫より、信濃、中村柊花樣宛（手紙）

二枚の繪葉書、難有う、金峯山には君登つたのかね、この間この山をば仰ぎ見て通つたわけなのだが、ヨニゲもまさか出來まいが、お葉書を見ながら考へたことだ、昨年ゆきかけてよした雪見のことだ、越後の長岡から出雲崎などいふところへ出かけるわけで、中川杏果などを待たしておいてすつぽかしたのであつた、今年の雪の都合では行つて見ようか知らと、いまフラフラと考へ出してゐる、

そしたらまたバチカブッテ君にも一緒に行つて貰ふことだ、汽車賃だけ持てば、あとは向うで何とかするだらう、

君の方での集りがあるとすればなほさら、松本のマレンドボーイ（註、高橋希人）をもあゝ云つて追つ返してあるので、これにも多少氣を病んでゐる、村井下車一泊といふ樣なことになれば、ヤマノカミの前にも多少の色彩がつくといふわけだ、

こいつはどうもホンモノらしいぞ、

雪の汽車は恐い、といふことになるらしいが、年一年恐くなる芳齢にある、一度位ゐはとつくりと雪にうもれた自然が見てゆきたい、斯う考へて來ると、まろみを帶びた凄い野山が見え、人家が見えて來る、

これはどうも本物になりさうだ、したいものだ、

今夜は、ではない今朝は、「短歌作法」七十枚といふものを書くべく夜なかゝら起きてゐる、一度斷つたのだが、二度も東京から不便な昨今の汽車で出て來られてツイ引受けたのだ、しかも廿五日一杯といふのに、今朝六時間かゝつて漸くいま八枚を書いて、夜明けにけりだ、一枚五十錢か一圓の相場らしし。

また飮めざるかなだ、これから一椀を喰つて一眠りだ、今朝は冷飯のぬくめ粥、大根に芋に烏賊のオニシメといふところだ、ウキス亦た貧弱、昨日、チザキキタロウにナメられたるなり、チザキキタロウ、愛すべき好ボーイにして君の歌の極端なる讃美者だ、來年は外國にゆくといふ、

歌は出來たかね、

僕、作るべくしてまだ作らずにゐる、一寸調子が狂ひかけてゐるので容易に刀が下せない、相當に切れるといふ氣はしてゐるが、それは頭のドンノクボ（日向語、脊髓骨の眞上にあたる後頭部の凹みの所）あたりでチクチクしてゐるにすぎない、恐ろしいことだ、

しつかりして呉れ、賴むぜ、

昨日地崎の云ふ所によれば北原前田尾山橋田吉植等々が相寄つて樹海社とかいふを結び大に歌壇に雄飛するさうだ、多少大に笑はせる傾向があるが、それだけにこちらには責任が加はるのを感じて苦しい、まごまごすると歌は亡ぶ、僕にはまだ歌にミレンがあつてたまらない、

粥すでに焦げ、ウキス將に盡きむとす（あと一杯だ）、あつちの部屋ではチビ共が眼を覺してドヤドヤやつてゐる、これで止さう、

彌次さんからたよりがあつたかね、彼の事をおもふ、常に甚だ物足らずして而かも常に妙に物淋しい、あれはほんとうにあのまゝの男かしら、

「改造」に「草鞋の話旅の話」を書いた、此間の旅が主になるのだが紀行はまた別に書くつもりだ、文章の拙いのも（歌もだが）氣になることだ、

サテ、いよいよよす、

十一月廿四日午前六時四十五分　牧　水

柊花兄

六一

十一月廿六日、沼津市上香貫より、東京、長谷川銀作樣（繪葉書）

エラクいゝ所を見附けたらしいね、おめでたう、全

く今ころよくそんな所を見附けたものだ、感心々々、だが、昔から其處は火事のよく出る所だぜ、柏木といふと全く本場だ、氣をつけろよ、セヮ女房ぶりの、得意つぷりも目に見える、十二月中旬、出かけて行かねばなるまい、

廿六日　　若山牧水

六二

十一月廿九日、沼津より、信濃、大澤茂樹樣宛

（繪葉書二枚）

大澤君、濟まなかつた、あの日に葉書と一緒に大悟法君に賴んだとばかし思つてゐた山葵漬をころりと忘れてゐたのだ、今日はとにかく送ります、おくちに合つたらいつでも送ります、實はこれだけぢやアまづいのだ、鯛の生きたのでも添へるといゝのだがネ、先づ〳〵それは沼津にやつて來てからのことにしておきませう、東京のヨセガキを見ましたが、何だかベラボウに長いものだつたとは覺えてるが中味は知らない、大分信州を騷がせた傾向がある樣ですね、荻原君などあのため風邪をひいた相な、

（伊豆西浦立保橋の繪葉書畫面に）

この夏行つてゐて津浪に會ひそこねたのはこの隣村でした、今はこの邊、蜜柑のさかりでせう、見かつ喰べに一寸行つて來たいと思ふけどなか〳〵忙しくてだめです、毎晩一時から起きて机にかぢりついてゐます、といふうちにも信州の高原、時雨、炬燵など目に見えて來る、

その二、

旅のよせがき、十二月號に出ますがネ、校正刷を見ながらも泣笑ひさせられます、とにかく面白かつた、狐と馬との合の子女史のあたりより湯澤館、それよりもなほ印象の深いのは野邊山原のとつぱなのあの一軒茶屋でしたネ、あれなど、何彼につけて思ひ出すでせうよ、あの雪隱もあの景色もあのオヤヂもあのオムスも。紀行文を書くつもりです、多分二三月號の「改造」に出すでせう、アーア、考へ出すといかにも遙かな出來事の樣でなつかしい、鹿の湯のオヤヂも日野屋のオヤヂも湯澤館のオヤヂも皆なつかしい、

廿九日朝三時　　若山牧水

六三

十一月三十日、靜岡縣沼津市上香貫より、東京黑木傳松樣宛（手紙）

變な顏をしたといふのは君のヒガミだ、か、その時君が變な顏でもしてゐたのを僕が怪しんだか、だ、あれから一人別れて大森へゆく君がさぞかし淋しからうと、それを思つたのをば覺えて居る、そして大森まで一緒に來ればよかつたと、あとで思つた、

「自分の善良さを樂しむのを切上げる」云々はいゝことだ、それはそれとなく度々君に云つた言葉であつた、自ら卑下して他にたよるといふことは卑しいばかりでなく一種のさもしい狡猾を含む、

高山君と逢へてよかつた、一日田子の浦へ行つてあそんだ、鄕里の方がまづくならねばいゝがと案じてゐたら、うまく行つたらしい、手紙はまだ僕の所にも來ぬ、もう少しおちついてから書くと大悟法に云つて來たさうだ、彼はなか〳〵しつかり者だ、

君の歌（來てゐるといふの）をまだ見ないが、（十二月號には一切題附以上を除いた）どうだらうかと見るのを樂しみにしてゐる、ともすると甘くなりがちな傾向を持つからそれに注意する必要がある、節歌集を讀むのなど大によろしい、濟んだら赤彥のものなど讀むもいゝだらう、借してあげます、寫生味堅實味といふ風なものを加へてゆくには多少の參考にならう、

身體の精力を浪費せずに勉强しなさい、可哀相と思ふけれど要するに何か事を爲すにはすべてが難行苦行だ、岩に嚙みつく一心が必要だ、

僕も今年はすつかり怠けた、來年はやります、君と、利雄と、三千樹の歌を「東京朝日」に出すつもりでゐる、各社の人のを揃へるのらしい、新作があつたら送り給い、

奈須君はどうしてゐます、手紙を書かうと思ひながら失禮してゐる、彼も何彼とさびしからう、宜し

く云つて下さい、

都合では十二月下旬に一寸上京するかも知れぬ、そしたらまた牛鍋でもつゝかう、

矢野君はもう來ないのかね、

僕はいま八時にねて、毎晩一時ころに起きてる、くだらない爲事が山積してゐるのだ、幸にいま身體がいゝ、やはり歩いて來たせゐだね、山の者はやはり山にゆくがいゝ、

ではこれで失禮、身體に氣をつけ給へ、無茶をやらぬ樣に。

十一月三十日、雜誌、今日出來る、

若山牧水

黑木傳松兄

六四

十二月七日、沼津市上香貫より、信濃、中村柊花樣宛（手紙）

中村さん、旅の歌は出來た？

旅の歌、〻〻、と固くなると出來ないね、何か手近の種を先づ詠んでゐると出て來るよ、僕もいまそれを經驗してゐるところだ、今朝珍しく少し出來た、初めは「冬」の歌など作つてゐたのだ、よしわるしはもう一二日たつてから見直さねばわからぬ、

正月號をば十二三日に編輯を終りたい、いぢめる樣だが少し急いで呉れ、

今度出る「國歌」といふ雜誌で、窪田系統の奴等が寄つてたかつて僕の歌を袋叩きにしてる相だが、噂を聞いて甚だいゝ氣持になつた、牧水といふ男もこれでなかなか細くないね、痒いところを搔かせた氣持だアね、

雪が戀しい、今年はほんとにゆくよ、その覺悟をしておいて呉れ、越後にも手紙を出しとく、長岡から北越を通つて京都へ出ようか、道草をくはないで、京都で一晩京都料理をたべて、そして歸らう、そしてヒモ屋ぬきメンタル拔きのさつぱりと名古屋で一杯飲んで別れよう、一足伸して沼津に來て川端の家などでヨセナベなど煮るとなりア極上だ、

とにかく越後にはゆく、

田口にはもう二尺積つてるつてね、

君の歌を「短歌」で見た、やはり中で一等いゝと思つた、

あれから殆んど毎晩、これを續けてる、身體はよくなつたとおもふ、あの旅のおかげで、

こんなに稼げば汽車賃位ゐ出來やうではないか、粥、足の下にていま煮立ちつゝあり、ウヰスをもう一杯位ゐはいゝだらう、

十二月七日あさ五時半、

牧水

柊花兄

六五

十二月八日、沼津市上香貫より、福岡縣、毛利雨一樓樣宛（手紙）

お手紙、今朝、難有うございました、何かまたお送り下すつたさうで難有うございます、度々いたゞいてばかりゐて濟まなく思ひます、

來年こそは參ります、春になるか秋になるか今のところ一寸わかりませんが、とにかくお目にかゝれます、參りましたらお宅に暫くお邪魔させて頂きます、昨今のおつきあひなのに、どなたにももうおちかづきになつてる樣な氣がしてゐます、八幡全體の元氣な人たちと逢ふこともまことに樂しみです、誰は斯う彼はあゝだらうと想像してゐますが、大抵當りませう、先月、高山三千樹君に逢ひましたが、これも豫想と合ひました、

それから、これは夙うに手紙を書かうと思つてゐて（實は旅先でかくつもりだつたのが、獨りの時間少く、出來なかつたのでした）まだ果さなかつたのですが、君の歌がどうもひどく騷々しいものになつたのを思ひます、新年號に來てゐるのをばまだ見ませんが、十一月號あたりのものを拜見しながらひどくそれを感じました、最初のころのおちつき、底力といふものがなく、いかにも上辷りがしてゐてさう

〳〵しい、まるで山坂で石ころをころがす氣持を感じました、さうなると君の特色は無くなると思ふ、君に難有いのはその重さと强さとですから、それを捨てゝ他の年少たちの仲間入をされることは小生甚だ不感心です、御自身どうお思ひでせう、

なほ、この事は新年號のを（二三日うちに）拜見して、申し添へ様と思ひます、

小生も非常に多忙です、といふのは、二三年前までの様に、かんたんに迅速にものごとを片附けることが出來なくなつたからです、毎晩八時にねて（晩酌後）十二時か一時に起き、六時頃からまた一時間ほど眠る、といつた有様で机にかぢりついてゐます、ことに今年はいろ〳〵の事で忙しい目を見ました、幸ひと身體が丈夫で、ヘコたれぬのです、

昨夜（ではない今曉）珍しく、歌を作りました、今年になつて初めてゞせう、變なもので變な氣持です、二月號で見て頂きます、

どうぞ、御家族と、そこの若い大勢の友だちにあなたから呉々よろしくおつしやつて下さい、ことに友だちの方には、牧水は酒をば食らふが酒にはくらはれない、下手なまねして酒にくらはれるケイコをするなと、

十二月八日、朝九時　　　牧　水

毛利雨一樓兄

子供たちの寫眞を入れておきます、利雄さんが忙しいので、今は妹二人につれられて病院通ひです、三四日前病院で副院長さんがとつてくれたのださうです、旅人に岬子に、眞木子、

六六

十二月十二日、靜岡縣沼津市上香貫より、松本

高橋希人樣宛（手紙）

高橋君、松原湖では失禮しました、お目にかゝつた喜びより君を一人あゝして歸した寂しさの方が强かつた樣に思はれます、風に吹かるゝ長いマントがいまだに眼にある、

松本からついでに越後に雪見に行つて來ようといま考へてゐるのです、いま問合せてあるのですが、一月がいゝか二月がいゝか、その返事とこちらの爲事の都合でどちかにきめようと考へてゐます、どうも二月の二十日すぎにならうかと思はれますが、それでは君たちが困りはしませんか、もつとも一晩お目にかゝつたゞけで失禮する積りですけれど、とにかく正直のところを聞かして下さい、とにかくそのころ、漸く松本でお逢ひ出來るわけです、

寒いでせう、もう雪が來たさうですね、

忙しいので閉口、でも、この間あゝして歩いて來たせゐか割合に元氣です、どうも僕ごときは部屋の中にゐる動物ぢアなささうだ、

ア、先日の歌集の評ね、あれはやつぱり駄目です、お目にかけられません、かんにんして下さい、

君、お正月は松本ですか、

十二月十二日　　　牧　水

高橋希人兄

六七

十二月十三日、沼津市上香貫より、福岡縣、三苫京子樣宛（手紙）

京子さん、いま、あなたのお歌を見て居ります、たいへんに佳い、ありがたい心地で、繰返し拜見してをります、

少し早口――饒舌――だけれど、それに伴ふべきコセ〳〵した所や身振り手振りが、一向に感ぜられない、何處か知ら、大まかな透明さがあります、其處がいゝと思ひます、

女の人は、或る境地まで行くのは實に速い、そして其處で止つてしまふ、目に餘る例を私は見てゐます、今もあなたの歌を前に置いてそれを考へてをる、これもまたさうか知ら、どうもさうではなささうだと、それでもやはり多少の不安がある、それが私にこの手紙を書かせたのです、

眼の前のことを思はずに下さい、小さいことを思はずに下さい、他を顧みないで下さい、そして、あ

せらないで下さい、あなたには確かにあなたの行くべき大きな道があると思ふ、その道をしつかりと心に感じ信じて下さい、

守西君にも書きたいが、またにします、とにかく、おしまひまでいゝ夫婦であつて下さい、大きな夫婦であつて下さい、

十月十三日朝三時廿分　　牧水生

六八

十二月十三日、沼津市上香貫より、大阪市、大島武雄樣宛（手紙）

大島君、「大阪時事」に出せば今日の紙面に載るわけでしたが、いま來たのを見ると出てゐない、矢張りあの記事の出た日の何曜附錄とかいふのに出るのでせう、時間がたつては面白くありませんけれどね、

來年は「創作」のあたり年らしいですよ、何だかそんな氣がする、

忙しいでせうが、歌をもう少し勉强して下さい、

それから、この九月に拜借した金、だん〳〵延びて申譯ありませんでした、とりあへず三十圓だけ、今日振替で拂出しておきました故、御手數ながら御受取り下さい、殘り半額は濟みませんがもう少し待つて下さい、あれこれとやりくりをつけつゝありますから、程なくどうにかなることゝ思ひます、ほんとに難有うございました、そして遲れて濟みませんでした、

野元君はお嫁さんを迎へたのですつてね、ずるいや、まだ默つてますよ、彼の自宅はどこでせう、ついでの時、知らして下さい、

平田君たちは、この間、淸瀧あたりから遙かにアテテよこしました、

小生、べらぼうに多忙、それも今までの樣に、簡單明瞭に（ホンヤクすれば、無責任に）やつてのけられないための多忙なのですよ、年のせゐですかね、

旅から以來、每晩半徹夜です、

海人草を、おねだりしたいなア、その用法と。

十三日、時雨　　牧水生

大島武雄兄

六九

十二月十四日、沼津市上香貫より、京都市、藤原染子樣宛（手紙）

染子樣、簡單に云はして下さい、いま、あなたのお歌を拜見してゐます、どうもいけない、歌つてあることが殆んど悉く概念から出てゐます、戀とか宿命とか淋しいとか云つてはあるけれど、それは多くその文字面の興味にとゞまつてゐて、一向に中味を持つたそれらでないのです、謂はゞ地圖の樣なもので、山、川、草、木そのものではないのです、つまり、これは、非常に高い所から下を見下して歌はねばならぬといふ樣な態度から歌はるゝためではなからうかと思はれます、心の內から歌ひ上ぐるといふでなく、下手な演說の樣に徒らに叫び上ぐるといつた所があると思ひます、これは多く下手な誇張癖から來るでせう、いかにもあなたにふさはしくないことゝ思ふけれど、歌にはたしかにそれがあります、もう少ししみじみとしたものが拜見したいと思ひます、「他（ヒト）に見せるものでない、」といふ考へで一つ作つてごらんなさい、自分一人を相手にする氣で試みてごらんなさい、幾らか違ひはせぬかとおもふ、

御無沙汰してゐます、御免下さい、また、地震の頃には、難有うございました、お禮も申し遲れ失禮いたしました、

十二月十四日朝三時　　牧水生

七〇

それに、どうも歌が理屈つぽくていけませぬ、理屈と演說とお芝居とが一番いけない、（手紙の初めに）

十二月十七日、沼津上香貫より、東京、長谷川桐子樣宛（葉書）

土肥行は眞實にや、部屋豫約の必要あり、かつきりしたところをきかして下さい、中島君夫婦のことも問合せの上、右同樣よろしく。急ぐ。今日今年第一の名物が吹いてる、ガッタン〳〵、ゴウーッ、ガタ〳〵〳〵ッ、ピーン（これは障子のやぶれ）。小生、元朝六時の汽船でゆく、

十七日　若山牧水

七一

十二月廿二日、沼津より、信州、中村端樣宛（繪葉書）

中村君、書くとなるとヘイにたへない位ゐ書くネ、いま、夜爲事を終へ、ウヰスを飲み、眠くなりてねむとしたれどあまりにオナカがすいたのでお勝手から飯を持ち出し書齋でゾウスヰを作りつゝある所だ、ゾウスヰ氏、頻りに音と匂とをたてゝ煮立ちつゝある、雞のゾオモツの殘汁なのだ、

廿二日あさ五時半　牧水

樂しきをいつと定めむ斯く居りて、樂しきほどを樂しきとせむ

曉と雞啼く時し取り出でゝ飮む酒うまし夜爲事のあとに

ほがらかに時計なり出であかときの四時とはなりつしるき冷えかも、（繪葉書畫面に）

巻末記

○本卷には明治三十七年から大正十二年まで二十年間の書簡を收めた。總數四百六十九通である。

○明白なる誤りを訂正したほかすべて原文のままである。行かへ、行間あき、文章書出しの字下げ、句讀點、日附、宛名、署名等もそのままにして出來るだけその氣分を表はすことにした。もと〳〵これらはその時々の氣分または字配りの都合等によつてなされたものであるがゆゑに、かうして纒めたときにはいくらか不統一の感がないでもないが、しかしそれも止むを得ないことと思ふ。

○初めの日附は便宜上編輯者のつけたものだが、その次の居所は「より」以外は原文のまま、（宛人の住所だけはいろ〳〵都合のある方もあるかと思ふので簡單にしたが。）勿論宛名の下の敬稱の「樣」「君」「兄」等もそのまゝである。

○手紙のうち、文章の書出しの一字下げになつてをるのは大體に於て原稿用紙にペン、さうでないのは卷紙に毛筆を使用したものと見ていただいてよろしい。六ポイント活字で小さく入れた註は編輯者。それから人名その他で〇〇となつてゐるのがあるが、これは原文のままのも一二ある

けれど、多くは編輯者のしたことである。

○書簡中に引かれた歌で歌集所載のと異つてゐるのがあるが、これはこちらの方が原作で歌集のは後に改作されたものなのである。

○封筒裏面に追記したものがかなりあるが、これは一たん封をした後にふと思ひついたことを書き加へたもので、先生の一種の癖と言つてもいい位だつた。

○書簡を集めるには出來るだけ手を盡したが、なにしろ永い間のものなのでいつとなく紛失してしまつたのがかなりあつた。殊に尾上柴舟、土岐善麿、北原白秋、福永渙、その他生前最も親交のあつた諸氏宛のものが紛失したりまたは燒失したりなどで掲載し得なかつたのは殘念だつた。さうした遺憾さはあつても、また考へ方によれば、古いものがよくこれだけに集つたものだと言つてもよい。御貸與下さつた諸氏に深く感謝する次第である。

○なほ量の關係から遺憾ながら割愛したものも少くなかつた。

○口繪寫眞の一は下の關で寫したもので當時二十三歳、向つて右は大見達也氏である。二は大正二年一月末九州旅行の途中大牟田での撮影。三は前列向つて右より和田山蘭氏、小川水明氏、後列、先生、越前翠村氏である。四は百八十二頁所載、平賀春郊氏宛の手紙の一部である。(大悟法利雄記)

昭和五年五月二十八日印刷
昭和五年六月五日發行

(兩角製本)

牧水全集 第十一卷

著者 若山牧水

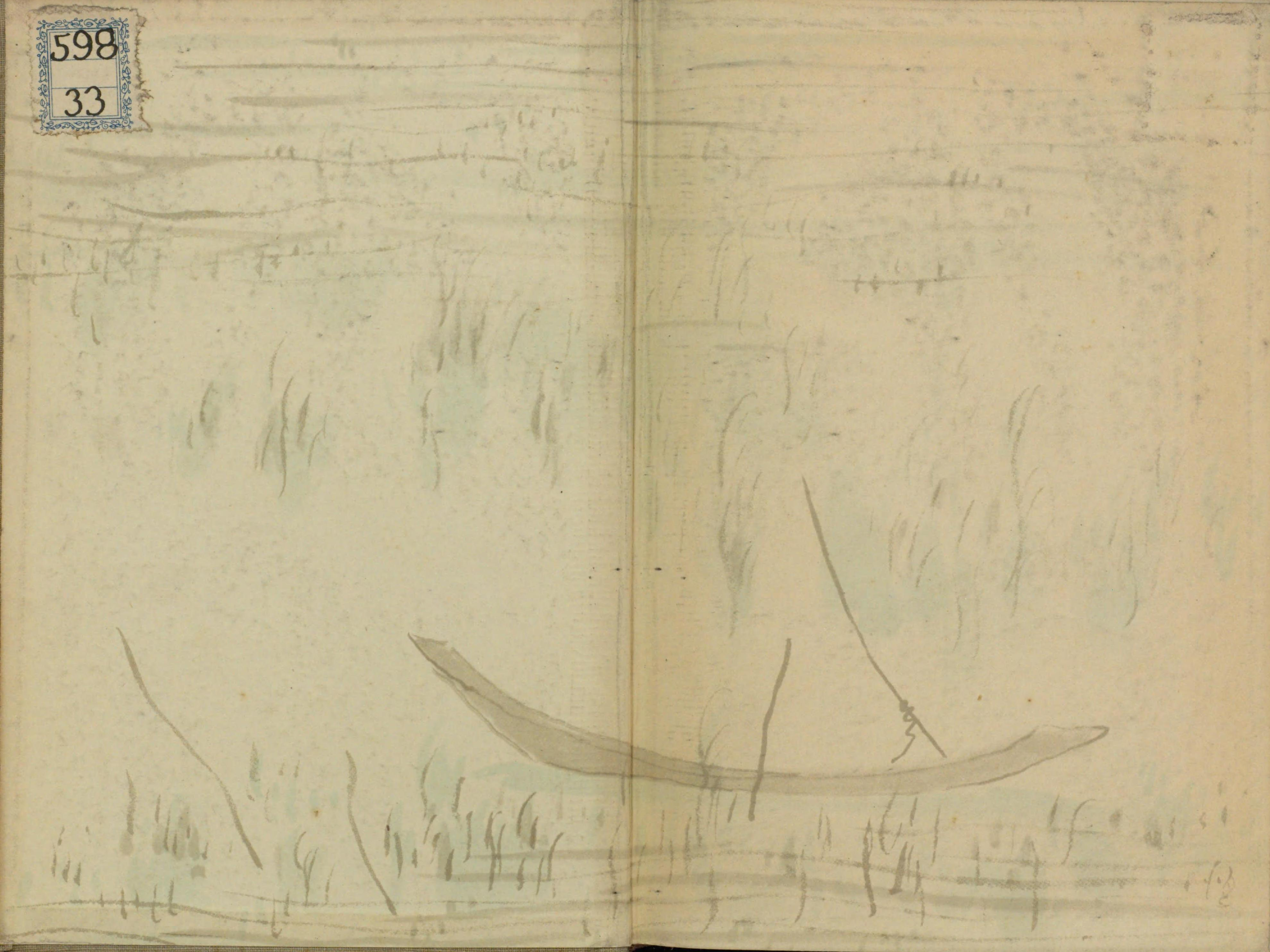
發行者 山本三生
東京市芝區愛宕下町四丁目四十番地

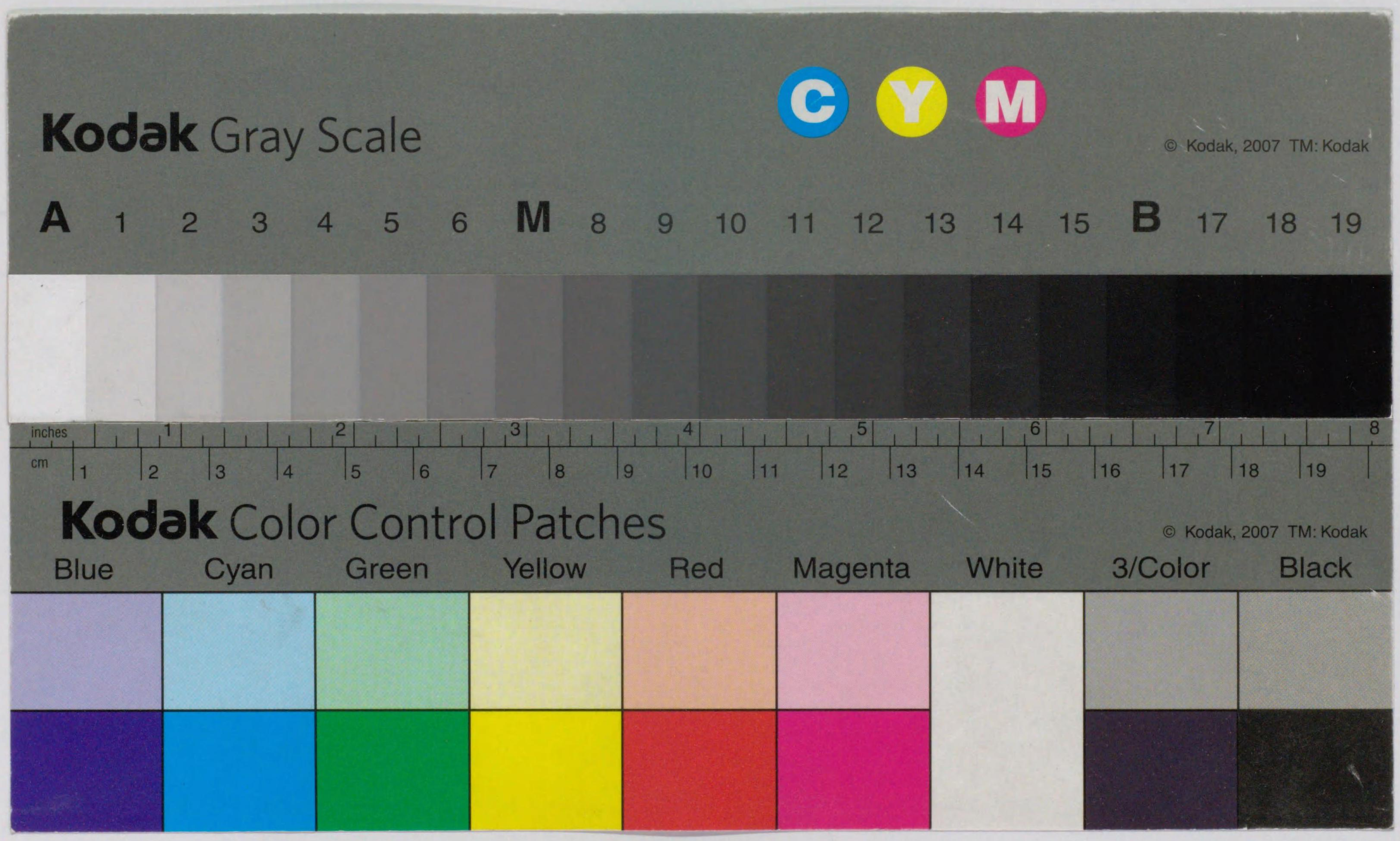
印刷者 竹內喜太郎
東京市牛込區榎町七番地

發兌 改造社
東京市芝區愛宕下町四丁目四十番地
振替口座東京八四〇二番
電話芝(43) 一一二一番 一一二二番 一一二三番 一一二四番

日清印刷株式會社印刷

598
33




Kodak Gray Scale
C Y M
© Kodak, 2007 TM: Kodak
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19
Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black